



朝香翁
芳翁



大戸ノ喜三郎

上刃安中
下野尻
觀音堂ノ省念尼

上刃伊香保
温泉宿主人

永井喜八郎



伊香ノ俠客

福田屋龍藏

安中後開榛名梅香止卷

三遊亭圓朝演述
酒井昇造筆記

第一回

御聞は違はずと、聞の文化より文政の頃上州安中よ草三郎と申す鰻頭屋で義侠が有ました。此人の親の爲に賊を働さ。一度善心よ立歸り。再度主の爲に大賊とあると云ふお話しで御座ります。今晩の其發端で茲は小川町の御屋敷で只今の屯所よ成て居升が土屋能登守と申上て九万五千石取の御大名で赤い御門で三ッ石だ、みの御紋所其御家來は僅か十石二人扶持取りよて恒川半六と云ふ人の悴に恒川半三郎と申人があましました。が幼少の時から文武の道よ心を掛就中武藝を好まれました。其劍術の御師匠と申の木曾川成瀬と申て元神田三河町の角よ町通橋を出して居ました。が此木曾川先生の柳生流の奥儀を極めた。方で其後内藤美濃守様の御抱へとなり御指南を勤て居升うち御國話を仰つかり信州岩村田へ參つて居ました。所不圖、邪氣よて打臥しました。が追々病氣も重り升たから先生の老体のこと故迎も全快の覺えない就て、柳生流の奥儀の傳習を讓る者の門弟も多有が年若いが土屋藩の恒川半三郎より外よあいから江戸へ急飛脚を立て呼迎へ存生の内よ一ト眼逢ひたいと申され

一席の數十輩の書を読し不勝の証之を
 早稲の功傍聴筆記法よあましそ家儀を
 峰三遊亭主人が名譽を不朽に盡る者ハ他なし
 傍聴筆記法よあましそ家儀を
 明治十八年十月日新富街第七坊
 佛骨庵中の膝下ふ旅の後用の
 天保九年の擧がの梅が香墨を硯
 雨受音誤の稿を撰しと澤の記す
 假名垣曾文



又た故早速飛脚を立たしたところ恒川半三郎の大きき驚き直十五日の間御暇をいたさ
たいと願出しました所半三郎のまだ部屋住でいあり殊に師匠の病氣見舞のためなれば直さ
まお間濟で御暇が出ました半三郎の藤藏と云ふ僕を連れ信州岩村田へ参り師匠は面會を遂
ました所先生も大層な悦び「此傳書を譲る者は外なきいから遠路の所態々呼むかへ貴公へ
譲る上いたとへ貴公は劍客者よあらんまでも此傳書の大事よかけて跡々へ傳へてくれ又遺
物は何れもあいがべふるした巾の狭い帯と肩の裂て居る分織ばかりだが受納下され」と云
ふので半三郎の詰らん物でも師匠の遺物は程迄よ已れを愛して下さるかと思へば冥加も餘り
嬉し涙も暮ましたが木曾川は其儘息を絶りしました故野邊の送りも濟せ七日の佛事も用つて
日限故どり急まして此所を出いで藤藏を連れて岩村田より小田井ふかりましたが頃は寛政
七年九月十日の事であります故遠間獄下風は吹送れ荒町の原よ來掛りますと側への日の出
屋と云ふ餅や饅頭今坂を賣て居り升茶店へ腰を掛けて 恒川「藤藏草臥たノウ 藤
へイ草臥ました且那の御看病勞れで御坐イ升やうなかくアノどうも御老体を抱て小便を
おさせ爲さるさぞの實に驚きました且那の様を御師匠思ひのお方ないに誠な感服して居
ましたそれ又御弟子も多し中よ貴所が御傳書をお受なさると云ふのの先生も深くお眼が
ぬえも叶た事で私迄御供をして來ても肩身が廣い様で御座イ升一休御傳書と云ふ物はどん

な事が書てあるので御座いませう 恒川「貴様が開ても解らん詰らん物だ 藤「へい而し
て御遺物は喜んで御座イ升 恒川「古しの帯と着古しの羽織だアナ 藤「チャクくひと
い物で御坐イ升もうちと上物を下さりさうなもの御座イ升 恒川「御師匠の御遺物だか
ら金銭も替へ難き大切の品だから油紙も包んで置きたいが油紙の持て居るか 藤「へい油
紙は貯へて來ましたそれから先程晝飯の時藤藏の味増漬の香物が良味う御座イましたから
少いことつて來ましたからこれも包みまして置ませう 恒川「うればよい事をした此土地
の喰物が悪いノウ道中筋のまだ善がこれから先横道へ三四里も入ると頓と喰物のないが味
増漬があれば先ツ宜い又此邊でいだつまといふ草の浸物を喰せるが食へないノウ 藤「へ
い只今先の休所で見たりやうな鱈の天麩羅は困りました浸しも爲さぬで堅いのをブツク
切て揚て出しましたものだからポリ／＼澁くつて悪臭くて食へませんでした實に不良物を
食せ升これから味増漬があり升から御氣遣ひはありますと云ひながら油紙の中へ傳書
と遺物や味増漬の香物も同やうに二ツも包み支度をして居る所へ年齢十五六の小僧が
竹の節といふ若衆も結び前髪を取り貧乏人の子と見へて木綿の古衾は木綿の袖をし伴天を
着て其上から帯を素靴で箱を二ツ擔いで参り 小僧「御客様どうか今坂でも饅頭でも
三 買ひなされて下さいまし親父の長病で母が看病をして居りますので内職も出来せんか

四
ら私が斯やつてお饅頭を賣まして親子三人助るので御座います御慈悲も御買をすつて下さいまし 藤「宜しいく其方へ持て往けりんな物が旦那又喰れる物が穢らしい彼方へ持て往け 恒川「コレく藤藏りんなに酷く云ふ嘘も親の爲と云つて居るではあいか少し買てやれ 藤「お情深ひ旦那様だからナちよいと私か鹽梅を見ませう小僧少し持て來ひそんなよ澤山入らんよ些と斗りで宜のだ強よ賣つけ様と思つてコレくうんなよ盛て往かんよ旦那様お待遊ばせ私が鹽梅を見ますから、堅ひ甚く堅ひ食れるものか 小僧「へい昨日の御座イ升から 藤「ナニ昨日のかナゼ今日の出さねエのだ 小僧「へい賣れ残つた壁のから順よ賣て参り升から 藤「不良物を食はせやアがる」と云つて居る所へ奥の方からバラ／＼と馳けて來たの此の家の亭主で年齢五十六と覺しき肥太爺言をも云いず小僧の頭を取つて押拳と上て丁々打擲をし又た土足懸けて踏よちる 小僧「御免なさいまし 亭「御免なさいましで濟かコレ巴家又此通り見世で今坂や饅頭も賣て居やすから己ア所で商賣のなりやしねへと云付て御座りやすのよ性ざりもねへ此處へ参つて商賣をする法が御座りやすかどうして呉べエ」と云ひながらいさあり菓子箱を取て抛り出す菓子箱の四邊へ飛散りましたから椽臺の下は寐居た犬が飛出してムンヤクと喰て仕舞ましたから 小僧「酷事をなさる私の重々悪ひから貴所は打れても黙つて居り

ます此處で賣ると叱られる事存じて居升が少しでも賣て歸りませんと親子三人が困り升から濟さい事との知事ながら賣たので御座イ升此の饅頭は私の品での御座イませんお隣の御爺さんの賣るお饅頭を二箱分て貰ひ賣上ヶ高で二百でも三百でも貰て親父と家母が助かるので御座イ升の斯やつて犬よ喰せて仕舞ての困り升御家での饅頭をお製造なさるから返して下さい 亭「誰へ返すものか職た言を云ヤアがるな成やしねへ 恒川「御亭主や暫く待て 亭「ヒエイ 恒川「小僧貴様が悪いが此家で斯やう又見世先で餅菓子賣て居るのに其容よ又菓子賣付ての商賣の障りあるから兼て亭主より其方よ來るかと云付て置よの夫を承知して來るの悪いぞ又亭主も悪い 亭「ヒエイ 恒川「小僧の惡から打擲されても黙つて居ると云て居でいあいかさうして見ると小僧の罪のほう消えて居る然るも箱を抛り出し人の品物を犬よ喰しては濟むまい此處は亭主が悪い已も中へ這入たが不勝だから斯う致さう兩方の中ずみを取て如何程仕入で來たか知らんが饅頭と今坂の代を小僧よ遣うが幾ら仕入で來た 小僧「へい一貫文で御座イ升がモウ十一賣ましたので 恒川「コレ藤藏小僧よ一貫文遣れ 藤「お遣遊すのか犬の喰たの迄小僧へお遣し遊ばすか亭主も餘計な事をするお旦那様へ御散財を掛けヤアがつてコレ小僧犬の喰た餅の代遣下さるから難有く心得よ 小僧「へい難有う御座イ升御蔭様で親父や家母が助かり升私のと

「せ空手で歸り升のですから追分のお泊迄どうかお荷物でも御持せ爲つて下さいまし 恒川」ナニ宜いから早く歸れ 藤「旦那様どうせ空手で歸るものですから荷物を持せませう 是の大事の御書付と御遺物と御書と召上つた残りの蘿蔔の味噌漬が這入つているのだから 大事も持て往け。小僧」ナニアノ是の蘿蔔の味噌漬で御座イ升か 藤「旦那様お小使で御座イ升か私のこれで支度をして居ります爺や茶代をこれへ置よ旦那様只今の手拭を持って参り升モウ是から一と丁場で御座イ升からモウ譯へありませんと云ながら側を見れば油紙包が見へませんから藤藏の狼狽しがら大聲をあげ 藤「亭主や婆々々今此處へ置た油紙包が見えないがどうした 婆「先刻此處へ餅を賣り参りやした小僧が油紙包を抱えて逃して参りやしたよヒエイ 藤「怪しからぬ奴だ貴様黙つて見て居る奴があるものか 婆「何だか向ふへ走つて参りやした狡猾い奴で御座りやしてヒエイ 藤「ハイでいゝい大事お御傳書や御書付が入居るのだ 恒川「藏藤跡を追蒐ろ」と云ひれて藤藏のヌツヌツと一生懸命跡追蒐て行きましたかどこ迄逃しても一面の原中で遙か向ふへ小僧が油紙包を抱えて逃して行く姿が見通せまます右手の方の新舟山左手の淺間ヶ嶽の裾野にして向ふの彼の碓氷峠から兜山が見えるといふ廣野の平原で御座イます小僧の其中のめめる様も逃るのを藤藏の追蒐て参り升と小僧が前田原村の方へ曲つて行く跡も追付き小僧が石は躓き茅屋の

前へ倒れる所を飛係り捻伏せて拳骨で擲つける物音も彼の茅屋から年齢四十二三よある女が乳香子を抱たかり飛出して来て 女「どういふ鹿相を致しましたかどうぞ御勘辨おすつてどの様も不調法を致しましたか知りませんが年齒もゆかない者を貴郎のやうお大の男が打擲をささるよん及び升まい」と云ひれて藤藏の熱起み怒れる聲を振立ながら 藤「不届な小僧だエ々あんとか云つたア、ソレソレ此の先の日の出屋とか云ふ饅頭屋で此小僧が餅を賣た所から茶屋の亭主が商賣の妨を爲たと云つて小僧の持て来た饅頭の箱を抛り出したものだから犬が不殘喰で仕舞たのを私の旦那が御慈悲深ひお方だから可哀さうだと云つて餅の代と下さつたら此小僧がどうせ空手で歸り升から泊迄御荷物を持て参りませうと麻々しく云ふ奴ださうとい知す持して往うと思つて居るとエ、此小僧が油紙包を盗んで逃出したから跡追蒐けて来て打擲つたのだワイ 女「重々御尤様さぞ御立腹でございませうコレお前は何故そんな凄しい心よお成だヨ幾何貧乏も暮しても何故なんを凄しい心を出してお呉だへお親父も知れると濟ないよエ、お前はどうしてそんな心よお成だよ 父「コレヨくおはるや、其お方お相濟んから御詫を申上ねばならぬ此方へお上申せ ばる「お親父よ知れたよお父様の御耳も入ると一と通りの御詫では濟ぬぞへ貴郎どうぞ此方へお入來下さいまし 藤「御免をさいと云ながら上り端へ腰を懸け 藤「オイお婦人さん御

八 茶でもお呉れな」と云ながら四邊を見廻せば貳疊計りの上は煎餅の様な蒲團を敷き其上は年齢五十近ひ男が體病けて手拭で巻鉢を爲たるま、床から這出し藤藏に向ひ。父「如斯く見苦敷所あれども先々これへ承はり升れば手前悴が不調法な働き御腹立の段重々御尤も御打擲を受るどころではあひ殺されても致方の御座りません手前御面前で折檻を致升と云あがら又這出して。父「草三これへ來い只今承はれば何方の御方様かは存せねど旦那様が御情又犬の喰て仕舞た餅の代迄御恵み下さつた大御恩ある御方様の物を盗とは何事なるぞ盗みする者でもナア思ある人の物は取すと聞にそれを手前の包を拐帯て逃出すとは如何も人面獸心手前の様お奴を助け置かば後日どの様お事を爲も計られん渴しても盗泉の水を飲ず位の事は兼々申聞けてあるではないか不屈至極お奴を打致から左様心得ヨはるや戸棚から脇差を出せ。はる「どうぞ御勘辨あすつて下されましッレ御覽今も云ふ通りとらいふ譯でうんち凄しい心もお成だエ是又懲て此後は氣を付させ升からどうぞ御勘辨下さいまし。父「イエ成ません此奴を助け置かば後日どの様お事を仕出すかも知れん奴だ早く脇差を出せヨ。藤「御亭主ヤ斬あくつても宜い勘忍して遣なさいナ品物が出たのだから宜いヨ。父「誠又御情の御心から左様仰しやつて下さるのだが此奴成人の後主親は對して如何様な事を爲るかも知れません何分此ま、捨置れん奴御面前は於て手打致し首を斬て御

院を致升はるや脇差を持て參れ。藤「宜いヨ御亭主。父「イエ捨置れません」と云ひながら女房の止るのも聞入らず武士堅氣の一轍短慮怒りの餘り草三郎の髻を取りズル〜と引よせセイ〜と片息をつき膝行ながら戸棚もある用意の脇差を取寄せたが重き病も力も抜け鞘除ひをする事さへ出来ず切なき聲よて。父「はるや鞘を一寸除へ。はる「どうぞ御勘辨、誠どうも重々恐入升がどうか御勘辨。父「エ、勘辨がなるものか白痴め是を抜ヨ。藤「宜いヨうこで斬ちやア困るといふよいけかいヨといふ後より。恒川「御亭主暫く待て下され。藤「オヤ旦那様か。恒川「己も手前の跡から追蹙て來たが品物が有さへすれば宜いから所願暫く待て下され子を思ふ所から一時の怒りで斬も擲も宜しいが拙者の面前で斬れては甚だ迷惑致て夫よりい貴所から篤と當人へ説諭して改心させ不良心を直すか理當然物を取れた當人が宜いと云ふの御前が達て斬ると云ふの此方へ面當り爲るか知らんどうも面前で斬られては甚だ迷惑致す拙者歸つた跡で斬とも擲とも御前の存じ寄次第。父「なか〜持まして面當り爲のあんのと申す次第で決して御座らんが余りの事故これの御立派を御武士様むさ苦敷もこれへ御懸下さりまし」恒川半三郎の御免といひながら腰を打掛。恒川「藤藏草臥たッ。藤「大層御早ふ御座イました私はドン〜驅て來まし九たものだから胸かどき〜して齒の根も合ない位で婦さん旦那はお茶を一抔上て下さり

恒川「コレ小僧只今親父の云ひる、處を承へるよ盗を爲者でも思ある人の物の取よくと其方が餅を賣た時何と申した 草三「ハイ」

恒川「菓子を賣の親の爲と申したから嘘よも其孝行の徳に愛で犬の喰った餅の代迄拂つて遣たよ其恩義を忘れ賊を働き親よ迄苦勞を懸け其上家名を汚すの道理でいかにいかに見れば前の言葉の皆嘘よ成でいかに一体人の物を塵一ツでも盗り善事でないぞよ、カ左様な凄しい心の決して出ささい様よ慎みよさい 草三「ハイ」有難ふ御座イ升誠よ相濟ませんことを致しました 恒川「是見る此包の中よの金が入て居るでいなし古しの帯だのコンナ羽織や書付計りだ夫よ味増漬の香物計だ 草三「其味増漬のお香物が欲しい斗りよお包を取ました 恒川「あんだ味増漬の香物が欲しいと一体夫のどういふ譯、と問ひれて小僧のあろ」なき 草三「夫の親父が此春の末から長の煩い御醫者様よ見てもらい申ましたらこれで段々食が減れば迎も助からんと仰しやいましたから何卒かして食を進ませ食の減ない様よ仕様と親母と私、が種よ氣を揉ましたか此頃段々食が減て参りましたから何卒かして助けたいと思ひ御嶽山へ願を懸け又親父へ毎日親母と私でお粥を進めましたか何分食せんでしたか此間蘿蔔の味増漬の香物を細かよ刻んでお粥の上振掛けたらば喰られ様と親父が申ましたから何卒かして喰させ度と思ひまして江戸と違つて賣所ありし大盡方でい御漬なさるが賣買よ

爲ません故どうも喰させること出来ませんから親母と兩人で明暮欲いくと思つて居升所へ先程旦那様が味増漬の香物と仰しやりましたから頻よ欲くなり是を御飯の上へ刻んで懸て喰させたらば食も進み引續いて親父の病氣も癒らふかと思ひ濟ない事と思ひながら取ましたどうぞ御勘辨下さいませ 恒川「イヤハヤ夫の孝心事御亭主どうぞ免して遣て下さい味増漬の香物の物と心得親の病氣が助け度と誠よ感服な事で罪に成さいものじや免して遣て下さい」と云れて親父は嬉しくもあり又慚かしく涙を拭ひながら 父「誠よ面目次第も御坐いません ばる」ナニ味増漬の香の物あら私でも盗みませすかも知ません此邊で買よ一樽の外い賣ませんと云て一樽買ふ程の手當の出来ず種々心配をして居た所能お前にお取だそうとい知す荒々敷小言を申たの堪忍してお呉れヨい、ヨ取の當然へだ能取た 父「ナンマ馬鹿おことを申す誠よハヤどうも面目次第も御座らんテ 藤「年齢もいかないの感心事だ其様事と存じませんで先刻二ツ三ツ打たがどうぞ勘辨して下さい成程ナア味増漬を取たからかう」で御座イ升か 恒川「何を申す馬鹿ナ 父「其御包の御書付に木曾川成瀬と書いて御座るが夫の柳生流の達人で何方様かの御抱えよ成たと承りませたが貴所いどう云事で其御書付を御所持さるか承りたい木曾川先生の元三河町の角よ町道場を出してお出なさいませしたが 恒川「ハイ貴所の何方様で御座イ升能夫を御

存じで御座るナ 又「イヤ手前の成瀬の門人で香散見草七と申者で主名を申し舊主へ對し相濟ませんが實の水野織部正の藩で御坐升 恒川「うんゐら香散見の叔身さんで御坐イ升 恒川「土屋藩の恒川半三郎で御坐り升 草七「オヤ半さんで御坐つたか兼て御噂して居ましたが大層御立派にお成された手前は斯様にお羽うちからし見る影もなき姿とあり師匠の事も案じて居升が浪々の身とあり無沙汰を致しました老體ゆゑ古人も成られたかうれどもまだ壯健で居升かと忘れた事ハ御坐りませぬが貴所の御幼少の時分から大刀筋が能御座つたが傳書を受る御身故定めて御上達で御坐り升やう誠ハ御久しぶりお懐い事で 恒川「師匠の僅八日跡岩村田よて死去まして見送りを致して歸る道貴殿ハ御目よかと云ふも誠ハイヤ不思議な事貴所ハどう云事で斯様お所に 草七「師匠の没かりましたかイヤハヤ拙者義の段々深い譯のある事で御座るが夫ハ付てテト貴所ハ折入て願ひ度事が御座り升が御聞濟下されい 恒川「多分お事の出来ませんが旅費も欠乏く成ましたから是ハほんの心斗りで御座イ升、と若干か金子を白紙ハ包み草七の前ハ置きどうか是で貴所の宜い物を召上つて下さいまし 草七「金子杯ハ難有いが御願ひ申ませんどうぞ是ある悴草三郎當年十六歳より升が手前ハ此儘田舎に朽果ても聊か厭ひませんが、せめて此悴丈ハ武士として道度柳生流の御傳書を譲り受る程であくても元より

拙者も好める流義故劍術を覺へさせ獨歩の出来る武士に致して香散見の名字を建させ度とぞ貴所の御家來と成され江戸へ連れ歸り劍術を仕込んで遣て下さらば辱かふ御座りませ此義御聞濟下されと云ふよ 恒川「夫ハ心安き事で御座るが貴所が御病氣の事故御全快よあつた上で跡から書面を持せてお遣なされ 草七「十六歳位の小僧での中々確水を越ての道中の逆も出来ません甚だ無理を御願ひで有ますが是非とも御供ハ御連歸りを願ひ度ひのる「せめて今宵一ト晩御留申し種々支度をさせまして 草七「エ、騒ましい事を申すお斯標を見苦敷い所へ御留申すことが出来るか草三郎自己ハ最早死病と心得今日から此御方を主とも親とも頼み忠義を盡し立派ハ香散見の家を起て呉と云ひながら又泪を拭ひ升とあるも共ハ貧乏の中ハ此様ハ子供が出来るとい誠ハ因果ナ事と潜々と泣沈む 恒川「宜ふ御座る御連れ申すで御座り升 草七「夫ハ大きよ忝あいして今晚ハ何處の御泊り 恒川「今晩ハ追分の大黒屋へ泊る積り明日早天出立致し升が何かもう外ハ仰しやり置ハ有ませんか 草七「何よも夫限申事ハ御座いませんどうぞ柳生流の傳書を譲れあい迄も一人前免許でも戴ば此上もなき仕合せ是草三郎己ハモウ無ものと思つて恒川様を親とも主とも頼み忠義を盡せよいか 草七「ハイ」と口よは言ど是がもう別れに成かと思ハ孝行の草三郎が立兼て遅々するのを氣丈の親父が直よくと急立るよ恒川半三郎も聊なれど貳兩の金を

強て置き然らば御暇申します随分御大切にて、と草三郎を引連れて此家を立出追分通りの原中へ來掛る時、モウ日が暮れかゝりました但見ると片邊の枯尾花の繁りし中を押分けて銅造りの大刀をさし替の三度笠は目倉綿の山なし脚絆切緒の草鞋をはき年齢二十四五とも覺しき青髭の生た好男子がズツと恒川半三郎の前より寄り、男「御武士御免ませへ、藤「コレ其方は何者だ、と云ふを耳にも懸ず、男「内藤美濃様の御抱で木曾川とか云ふ先生から傳書とか云ふ物を受たなア恒川様申しりやア貴所で御座へ升か、恒川「貴様の何者だ、男「へい私やア實の盗人で御座へやす、藤「ナニ盗人だと旦那様御氣を付け遊ばせ道中の輕卒出來ませぬ盗人たけいといと自から盗人だと名乗る奴が御座いませうか此奴何んと心得て居、男「盗人だから盗人と自分から云ふの、正直者なので、藤「ナニ正直者か有ものか、男「お武士様貴所の劍術遣ひよある御方でありし傳書を貴所に持つて往れていどうも他も少し武士が立ねへ人があつて私よ取戻して呉と頼んだお方が有るので貴所から貰つて往れば澤山金が貰へる仕事跡の宿から付て來た所が先刻小僧が傳書をば引摺つて逃たから私もあつつけられんと待ても居られねへから跡を付けて先刻浪人もの、内の様子を聞いて居ればお前さんの御心切お話しぶりア、い、お武士だと思つたから實は突然盗んで驚かせるより正直盗人と名のつて傳書をお貰ひ申すのだ、恒川「盗人おど、云ふ者の又膽力

の違つたもの面白いもんだがうれば随分遣まいものでもあいが何者よ頼まれたか其姓名を申せ、男「イヤ云いねへ子口がくさつても依頼人の姓名の云ひやせん、恒川「依頼人の名を云はんければ傳書を讓る譯より參らん朋友の前へは對し追分の原で盗人よ取られたとは申されんから頼人の姓名を申せ殊も寄たら其腕前を試して譲りてもよい者ならば其者へ渡ふ先方の姓名を申せ、男「旦那へく私やア頼人の名を云ふ様お木葉盗人じやアねへや上州きつて敵のある、みぞろ木の幸吉と云ふ御尋者サ盗もふと思やア三日跡を付りやア急度取て見せるがそうするとお前さんが吃驚すると往けねへから貰ふと云ふのだア眞實よ取ふと思やア今直よでも取て見せる、藤「旦那お氣をお付け遊ばせ盗人だから何所で取か知ません畜生め眞實よ鉄面皮しいあまりと云へば此奴郎め、恒川「こりやア面白い盗人だから盗むが商賣だろがサかう身構へた所を取れる者から取て見ろおれの体よ取る丈の隙が有るかど大刀のうりを打鯉口を切り居合腰よなつた所の流石よ兎の毛を突ほどの隙も御座せんと幸吉の跡へ飛下つて、幸「旦那へく旦那の武士だから敲き合つちやう勝ねへが盗人よ又取る道具があると云いながら懷中より種が島の短筒よ火繩の巻であるのと取出し恒川半三郎の目の前よ突付け、幸「サア斯うして取るのだ、恒川「暫く待て、幸「イヤ待てねへかう遣つて道具で取るのだサアどうだ、恒川「暫く扣へろ、幸「イヤ扣へねへサアどう

だ、と迫つけられ流石劍術の銘人だが進退こゝよ谷まりどうする事も出来ず危き折から最前より主人の側にしやがんで居た草三郎が段々と鉄砲の先きへ進み行き幸吉の近側へすり寄り突然幸吉の足を掬ひましたから幸吉の不意を打れて前へ倒れ鉄砲を抛り出す機会に引金がありると原中へ玉がパツシとばちけ出る幸吉の到底勝じとや思けん鉄砲をも打捨たまゝ、ドン／＼と逃出ししました此方恒川流石劍客者杯といふ者の膽のすいつたもので見通す原中なれば跡を追掛けその疾いこと盗人も度々逃されて居るから逃るの疾いすると茲よ大久保橋と云ふのがあります、が只今板橋よ成つて居升が以前の丸木橋で其下を谷水が渦を巻きドツ／＼と早瀬に流れて居升幸吉が此橋を渡り懸ける所を恒川賊待て、と聲を掛けましたから幸吉のモア勝じと思ひ大久保橋から渦巻流るゝ谷川へ飛込所を半三郎の覗すまじてズンと切り付る幸吉の面部をした、かよ切られアツと面を押へたなりで大凹へ飛込生死もしれずなりました恒川「コレナニ草三郎と申すか誠な危ひ所忝あかつた草三郎那樣の御怪我がなくつて先ツ御目出度御座イ升泥坊が鉄砲を置いて参りましたが持つて参りませうか今度泥坊が出たらこつちで驚かして遣りませう恒川「コレ藤藏と致した藤へい／＼腰が抜ました恒川「氣力のあい奴め」これより主従三人江戸御屋敷へ歸りましたが此が安中草三の發端で御坐り升今日は此で御免を蒙ります

第二一回

扱申續きました恒川半三郎の草三郎を連れて江戸屋敷へ歸りますと問もなく御國詰を仰付られ親父半六の其年の十二月に亡くなりました故半三郎が家督を取り古い奉公人などの皆暇を出し自分と草三郎とマツタ二人きり尤も拾石二人扶持で其上親父が多く借財をこしらへて置きましたから内職者として其借財を返さうと云ふ實体半三郎又草三郎も年のゆきませんが貧乏の情を知つて居升から内職の手傳をいたし隙々又劍術を教へてもらつて居ました素性がよろしいので追々上達いたしましたゆへ半三郎も物も成ると思ひ力を入れて仕込みましたから三春秋の間は免許をとる程の手練り成りましたが草三郎の親父の方より何の沙汰もないのどうしたのかと思つて居り升とあいのも道理親父の没しました書面が久敷小川町の御屋敷へ滞り居りましたが漸く此程其事が判然しましたので此後草三郎の最早世よ便るべき方があいと心得猶更半三郎を親とも主とも思ひ忠義を盡し升ので半三郎も可愛いから一方あらず眼を懸けてやりました茲よ御咄し二筋は別れ御重役で八百石をお取り遊ば久保田傳之進と申して御側御用お取次我儘勤めが出来る位殿様の御氣入であり升が長らく病氣で引込で居まして此程漸く全快をしたので筑波山へ禮参りよ往ふとする所へ下役として佐泉勘二郎と云ふおチヨチヨラもので口調の面白い男だから久保田も可愛がつて近寄せ

る所より佐泉のしきりよあべツカを云ひすがりついて御袴の古いので頂戴しようと思つて今日も遣つて参りましたこの御重役の居る所は片並木と申處でこゝから筑波山迄は五里半余も御座います今日五月の廿日で映山紅もすへふりあれど大層景色のよい山ゆへせひく御供よと申から佐泉と源藏と申若黨を連れて出掛ました（茲よけつりくといふ宿屋が一番宜敷ございます故こゝから案内者を連れて筑波山へ参詣の前は白龍不動の瀧壺の方へ廻りますすが只今では大分ひらけ皆あすこで水行をささい升が登りは十八丁で中々登りよほねがをれますりれよあこもりをもする位の信者が大層出升）久保田はかたへの掛茶屋へ腰打懸 久保「どうだ佐泉い、風光だナア 佐泉「へい風光あどの目よ入りませんが恐入ました余程ひどい山で御座いますナ 久保「なんだまだ白龍不動へ来た計りだ左のみ歩行んではないか 佐泉「デモなんだが胸がはつて苦しくつて骨が折れて余程くたびれました 久保「信心参りよ参つたのよそんな事を云ふやつがあるものか 佐泉「ナンゴカ大夫が筑波山へ一所は往けと御意だから御供をして來ました一ツの土浦よ居て筑波山を知らんでは耻と心得御供をして來ましたが余り面白くもない所で御座い升ナ 久保「ドウセ信心参りだから面白くはないいやあら歸れ其替り筑波山へ参詣して白龍不動までは來たが山が難澁で上れんから下山したのは横着者で何か大罪があるから登る事が出来んと云はれ此事が若

し御重役の耳までも傳聞と手前の役柄よさわるがい、か 佐泉「コレハよわりましたアよろしい参詣しますヨこれ婆ア茶を一杯くれどふだ源藏 源藏「どふで御座い升佐泉様はよわつた御様子で御座い升ナア 佐泉「どふも江戸屋敷よあつた者のどつか慥意者よあつて居から子へ体がきかかんが此邊よ居者は山のほうが却てあるきい、平地いあるきよくいあど、いつて居るが拙者はよわつた 久保「佐泉瀧へかゝろうか 佐泉「イヤうれの御免を蒙りたい 久保「ナセ水をりを取て身を清めて登山しおければありません又何か犯した罪でもあるあら早く懺悔して仕舞ナ 佐泉「へエさんげをしおければどうします 久保「ハテ懺悔をせず瀧へ浴ると忽地血を吐て倒れるぞ 佐泉「これの恐入ヤシタ瀧は御免を蒙りたい 久保「アレサか、れと申よ 佐泉「大夫の御意で御座るが恐入やしたナア 久保「罪があげればよろしいでいあいか 佐泉「デモ人間と生て罪の御座らん者のあいかサ少々い 久保「ナニ少々あるとらんあら早く懺悔して仕舞わつしやれナ 佐泉「困りましたナアらんお事を知らずやみよ御供をして來ましたが實の婦人の事で少々あります久保「ナニ婦人の事だと密夫かあれはよろしくあい罪だナニううではないとあいならんだ云つてしまへと申よ 佐泉「デモどうも大夫の前ではやよくい義でこれはどうも耻入ましたナア 久保「申さんければ血を吐て倒れる計りだ申て仕舞ハ輕々と山が登れるのだ」

と云はれてもじりしをがら 佐泉「實の時々大夫が泊れと御意のある時ハ一泊願ふ事が御座いますアノ下女よそよと云ふのが御座いませう 久保「ウシアノ下總の小山村から来て居る女か 佐泉「つい此間酔たまされよアノそよと痴々練合ましたので 久保「これいけしからん男だ源藏佐泉はうよをやつたよ 源藏「驚きましたナアあんな酔ひものをようあたりませんでしたナア 佐泉「河系じやねへが實はほんの酒狂の上でやつた處が悪女の深情け誠今いよわつて居升 久保「出来た事なら仕方がない左様いつて仕舞へばそれによろしいから先へ瀧へかゝれわしの病氣全快よ付て参詣よ参つたのだからどふあつても水ごりを取らねばならん源藏サア行けと申よ若黨のあれて居升から裸体よあつて先へ這入れバ久保田も續ひて瀧よかゝり身を清め上にあがり 久保「コレ佐泉早くかゝらあいかと申よ 佐泉「へい心得ましたよろしう御座い升これは恐入た大層高い所から水が落ちて来ますけどどこから落ちて来るので御ざいませう 久保「案内者杯がよく申ではあいか筑波根の峯より落るみちの川こひぞつもりて瀧とありぬるといふ歌の如く始りの管竹のよふ細い水が流れて幾筋も積りて遂よかゝる大瀧よなつたのだ 佐泉「エ、成程百人一首かあよかよ左様赤事がありました手へどふも冷くつて何分か、れません瀧の側へ立た計りでさむく成て澤山で御座い升これで御免を蒙りませう六根清浄〜と云ひながら指の先へ瀧

の水を付て頭の上へ滴して居ますから 久保「コレサとふいふものだ何をして居るのだと云ひながら何やら源藏へ眼配せをする源藏の見て取りうつと佐泉の後ろへ廻り瀧の中へトんと突とばす不意を打れて佐泉の周章で瀧壺へ倒れ眼鼻口から一度よ水が入りて眞青よ成り顔へながら上つて参りまして 佐泉「エ、く〜ひどい事をなさる大夫の御供はもう出来ませんエ、つめてへ息が窒りそうだ「久保田は笑ひながら 久保「あまじいよ懸るといかにから順とるか、れううすれバ容易と山が登れる其うちよ佐泉も身体を拭着物を着てサア参りませうと三人連立ち杖をつきこれから女体山の方へ登つて参り鉄鎖へ攀り段々上つて参りました 佐泉「大夫どうもあつくつて汗がだく〜出て中々骨が折れてかろ〜敷は上れませんナ 久保「おそよのおもひだと思つてがまんして来いヨどうだ實よ名山だノウ 佐泉「名山だかなんだか知りませんがてまへどもの爲よは悪山で御座い升實よ如斯やつて繩よつかまつて上つて行處の猿の境界で御座い升此山の昔辨慶でさへ立戻つたと云ふ程の難所どうも私しの胸が張て困り升と云ひながら登りますうちは漸く登りつめました此所より下を臨めバ水戸より笠間の方が一面よ看へ實よ絶景の所です 佐泉「モシ太夫拙者の大層腹が空りました 久保「うんあらさつきちから餅をたんと喰て置かい、よ 佐泉「彼時の胸が張つてたべられませんでしたか今時あんだかむちやくちや又腹が空て来ました 久

保「うんからこちらへこい」と片側の茶見世へ腰を懸る此所の男体山と女体山の間に御座
 イまして山祝ひは女夫餅を賣掛茶屋で 久保「爺や茶をくれヨ 爺「ハイ御目出度御登山
 で御座イ升と茶を吸で出し餅を盛と盛で持て参る 久保「サア〜それを喰へ 佐泉「サ
 ンデケスこれの女夫餅ですと〜 久保「これの筑波山の名物で夫婦餅ともめうと餅ともい
 ふのだ 佐泉「へー大層長ひ申し買してありますなこれの大ううかたくつて有味くも
 なんともあいと吐出しよかゝると 久保「なんだ勿体ない吐出す痴漢があるものか 佐泉
 「デモ鹽氣も甘氣もあんよもあい餅つかりで旨くもあんともないからくへませんヤ 久
 保「うんからこつちの田樂をやつてみる 佐泉「でんがくの一すよいもので江戸で淺草の
 菜めじやの田がくなどいちよいとよろしいこゝでめうと餅とでんがくを一所に賣るのいど
 ふ云ふ譯でげすハ、ア男体山女体山と云ふ夫婦山だからめうと餅が出るので又りんきでや
 くと味噌をつけると云ふのかチへ 久保「うん事いふと罰が當るぞ 佐泉「罰があた
 つてもかまいませんんを物の喰へませんと吐出しませすと久保田の笑ひ出して 久保「ナ
 ニモ名物だから喰んでもいゝのだハサ 佐泉「うんから耐忍して喰なけれはよかつた」とみ
 ち笑ひありて烟草をくゆらしながら戯談半分ふさけて居るのも山よ酔と云ふことが御座イ升
 がこれも保養よあるもので御座イ升此所へ上つて來たの同藩中で奥向を勤める三拾石取り

の奥住彌兵衛と申す五十五歳の老の坂娘のありと申て今年二十歳で御座イ升が土浦の御
 城下此位美人のあいといふ程を噂の高い別品で鼻筋が隆然と通り眼元は愛嬌があり口
 もとの可憐らしくまだ元服前の大島田で親父彌兵衛を働りながら漸く登りて参り同茶屋よ
 休みました 奥住「亭主ヤ茶を一杯くれ 爺「ハイ〜入らつしやいまし殿様嚙ぞ御草臥
 でと云ふ折佐泉がちらりと見れば兼て知て居る奥住ですから 佐泉「イヤこれの思ひけな
 くよく御登山でありえ様も御出遊のしたか其後の誠よ御無沙汰を申ました何よ男体山の方
 からこちらへ登つて御出か左様で御座るか御老体だのよ御信心事事で又ありえさんのお年
 若で窈窕も足で入らつとやるのよよくマア手前どの油汗が流れて困りきりました 奥住
 「其後の御互様御無沙汰を申しました 佐泉「奥住氏これよおいでなさるの久保田傳之進
 様で御座るか 奥住「ア、左様で御座りましたかまだしみてと御面會をいたしませんで
 御ざつたが私しの奥住彌兵衛と申升るもので御座り升 久保「ア、左様かかけ違つて違ん
 だつたが老体の身で今日の能く御登山 奥住「私しおんじながら御無沙汰を申ましたあ
 れた様がまだ御幼年の折ちよいと御目通りをいたしましたことが御座りましたが其後の懸違ひ
 拜顔を得ませんでしたが大夫よ此間中長らく御不快お伺ひも致しませんで恐入りました今日
 三十二 三 老の身でどうか死んうちよもう一度登山がしたいと心掛け漸くの願ひで参詣をいたしま

したこれなるの手前娘と申すもので御座り升 久保「ハイ、左様かこれのどんだよ
 さそうお娘も直下山するかへ 奥住「女体山を参詣いたしましたしてうれから白瀧不動へ
 参る積り大夫御先へ御免左様あら 佐泉「氣を付て入らつしやいありえさんしつかり鐵鎖
 へ攀つていらつしやい裾が岩よ引つか、るといけませんヨ 久保「コレ佐泉 佐泉「ハイ
 久保「アレハ奥住の娘かへい、婦人だノウ 佐泉「大夫の初めて、御座り升がいくのさ
 んのと申て御城下中よあの位お美人のありや致しませんヨ第一親孝行で養子をすると若し
 其養子が不孝でもあつていあらんと云てまだ養子をいたしませんりれ又顔かたち計りよ
 ろしいのでいありません裸体も成つた姿あんど云ふもの實は堪りませんヨ私し、此間
 行水を遣つて居るところを覗ましたがきめこまかで色白で奇麗なことのなんとも云ひ様があ
 くお尻さんぞい少さくてあるかあいかわからない大概昔こ、らよお尻があつたかと云ふ位
 ちもので乳房さどのほつてりした塩梅の腰高の餓頭へ木鑿子を附けたやうでござるが平凡
 の女の乳房さどの練袋は團栗を附けたやうだがどうもこうふつくりとした塩梅なんぞの有
 ませんヨ又からだ中がきれいにすき透つて心の臓のどこもある肺の臓から胃の腑まで見透
 りは出来今朝たべた御汁の實のあんであるか大根の細裁断が三本引か、つてあるのがわか
 る位なもので足の踵がしまつて横骨がひつこんでどうもソノ中肉中丈で何よもかも揃つて

居り其上發明ではあるしもの、言様するさびきと申し實はあの位お婦人はありますまい
 久保「どうもい、娘だノウ奥住はおれにくれまいかノウ 佐泉「大夫よはあさと様が入ら
 つしやるでは御座りませんか 久保「ナ、あれの妾同様のものだが子供が出来たから止を
 得ずあ、して置のだから表向は御新造の届をして貰ひたいがどうだらうくれまいか其方が
 婚姻の取持をしてくれるから多分の禮の出來んが兼々其方が欲がつておる關の兼吉の脇差
 とあの羽織と金を三十兩遣ふじやないか 佐泉「どういたしまして大夫よの色々御懇命を
 蒙りて居り升から此位な事を致すの當然へ何も御禮をいたさきたいと云譯でないがマア
 頂戴いたします方が實のよろしいが先方の僅か三十石此方の八百石此方から嫁よよこせと
 申せば奥住彌兵衛の手を拍いて二ツ返事で上るよ極つて居り升御媒どの恐入升から御取持
 ないたします 久保「イ、カノ 佐泉「これのモウ必ずへエと申よ相違の御座りません」
 と云いれて久保田も機嫌よく下山いたし一ト晚けつうくと申す宿屋に泊りましたが已奥住
 の娘を嫁よ娶つた心持で大層きげんがよろしうございまして左様かことい知ませんから奥
 住の娘をつれて急ぎ立歸ろふと眞鍋の並木よさしか、ると阪の下り口は葎藤ぱりがありま
 して此掛茶屋の爺に兼て奥住を知つて居りますゆへ 爺「イヤ旦那様只今御歸りおみ足の
 履いよよくマアお履様も御一所で大体な男でも彼山のこたへやすのよよく御参詣ありや

した只今お茶を入れ升」と云いれ奥住親子の腰を懸けて居升と向ふの方からほうばの下駄を穿き無反の長剣を横たへ短刀のを前へんよさし油でかためた大醫年の比四十二三よなる朝貝林左衛門と云ふ漢と大形村の浪士で博奕奴あどよ頼まれ喧嘩の手傳あどをする鶴見金太郎と云ふ年三十三四よある浪人と二人連れにて城下で一杯やつたど見へ微酔きげんで少し計り喰残つた物を折入入れて来たのだが跨々として歩行ゆへ折の何處かへ振落しこぐ細計ぶら下て往來の婦人あどよからかいながら此方へのいりよか、り 林「コレ鶴見よせ往來の婦人あどよからかつチャ婦人が迷惑すらア 金「あよしあさいヨといひやがつたがあんまりあよしあさいといふ面でもねハヤ」としやべりあがら此方へ参り 林「ヤイ爺茶を一杯くれ 爺「へい只今と云ひあがら上等茶を別急須に入れて奥住の前へ置き此方への初末急須茶を入れて持て来る様子を金太郎が斜然と見て取り向の客を見れば老人が娘を連れ柄袋の掛つた大小で腰をかけて居るからハ、ア土屋藩だナと心は點頭喧嘩を吹掛けようと今茶屋の爺が茶を入れて此方へ持て来る所へ金太郎が足を出して居りましたから此へつまづき持つたる茶急須をはね飛ばすと其はずみ朝貝林左衛門の足へ熱茶がかかりましたからア、アツくくく」と林左衛門は大いよ怒り 林「無禮奴め」と云ひながら突然爺のひか、みを蹴るげられて爺の前の方へつんのめるを 林「ヤイ無禮奴め視ろこんあ

にヤイ眞赤よあつた 爺「ハイく 林「ハイでいこれ視ろ手前は何か同じ休客よわけへだてをして向ふよお休みの客よの別よ上等茶を入れ道具も結構なものを取り揃へ参り拙者共は浪人と輕蔑つて粗末茶を出し殊よ鹿相とは云ひながら客の足へ熱湯をかけて只ハイで濟と思ふかヤイ 爺「誠よ相濟ません川あ方が足イ出いてあるもんだから不思議なつてこけたので 林「ナ、ノ、あんだかわからねへなんだと 爺「茶ア入て持てめへる先へ其あ方が足イ出いていたもんだから前へつんのめりやしたの」と云譯するのを耳よもかけず何を喃々云ひやがると爺を擧げて二ツ三ツたゝきかぐり 林「我等共の浪人だから鹿未よし同じ休客のわけへだてをしやアがる甚だ無禮至極だ 金「左様く捨置きがたい奴朝貝久しく人を斬んから此爺をぶつた斬てしまをふ黙止つて居ると癖あるお手傳をしやう」と云ひあがら二人して茶屋の爺を引ずつて並木の方へ連れて参るから奥住は見兼て跡から走り出で懇懇浪士よ向ひ 奥住「ア、申しさし出がましい事でござるが御案内の通り何よもしらん爺とんと御相手よいあらんものでござるよつてごふか御勘辨下されたい年寄同士不慙よ心得ますゆへ御勘辨を願ひたい手前成代つてお詫を申上り 林「イエ相ありませんたどへ年寄でも一軒の店をばつて團子澁茶を買て居ながら客よ怪我をさせて置ながら只御免で濟かへ 奥住「ソレハ至極御尤もでござるが故意といたしたといふではなし



恒川急住
聞て奥住
て救ふ

林「當然へサ故意とかけりや猶更ゆるせぬ」奥住「幾重も成代つてお詫を申しますと
 ぶか御勘辨下されたい」林「イエなりません強て此者の詫も這入つて助けたくば爺の代り
 御貴殿の首を斬り升と云たら御貴殿も大小をさしてお出だから袖手て斬られてもぬめへ
 から相手をしませへ」奥住「イヤ左様よきるのひくのと云ふ程の事でもありませんへ」林「
 御貴殿も手もあり足もあるからたゞ斬れては居めへから比武をいたろう」奥住「なよも爺
 の詫も這入つたからと云ふて比武よなる譯はありますまいとんと取るよ足ぬ爺御手打よな
 さるも却て御刀の汚れよあらうと心得升一よは老の身の後前を辨へますから申し上るので
 貴所方お年若故其御立腹は御尤も、しかしうかがおあさけとぶか御勘辨を」林「左様な事は、
 じいんから老の口でいらざる異見がましいことは云はんでもよろしい一休中裁よ這入るよ
 自分の名前を申さんで済かへ」奥住「取敢ず罷出ましたから申後れましたが奥住彌兵衛と
 申し升林「何れの御藩中だ手前は朝貝林左衛門これあるは鶴見金太郎と申者でござる」奥
 住「手前は土浦藩でござる」林「ハ、ア能登守殿の御家來か九萬五千石取の大名御立派な
 事だ御相手よ成ても不足はないサア比武をさせい」と云ふ横合から 金「土屋の家來は
 皆な臆病で腰抜計り居て劍術もあよも知ん奴等だんぼ太平の世の中だといつても軟弱奴
 計り揃つて居るから比武の出来めへ夫よりの其處で三回まわつて御叩頭をしる勘辨してや

らア」と口よまかせて罵る雑言過言奥住も勃然とせき立 奥住「御相手よ成ふ」と立起る
 側から娘が袖を牽 りる「こんなものは御捕ひありはずな 奥住「イヤはなせ土浦藩は皆
 臆病腰抜侍と主名を賤する奴たどへ斬れても宜しいから立合すよ居られるものかりる」
 おきたこれしきの事で御怪我でもあさると 奥住「ハテ主名を賤された上からの何様あつ
 ても立合のだ りる「左やうならばどうかりの短い御刀をかして下さいまし私しも女なが
 らお助太刀をいたし升心符でございます 奥住「馬鹿アいへ白痴な事を申すな手前は直よ
 城中へ立歸り捨難いから立合つたと御重役へ申上ヨ假令此儘斬れても無遺憾城中へ歸れ
 何を遅々して居る早くゆかんか」と云ふうらよ 二人「サア家い早くこい」とせき立られ
 奥住は手早く下緒を取て襷袢懸け身仕度を嚴重よし其處へ参り 奥住「此處の往來だか
 ら向ふの松並木にて比武をいたさん りる「御親父さまどうあつてもあなたに比武ひを
 奥住「エ、歸れと云ふ道理の不明やつだ手前は跡も残つて奥住の家を相續する人間でい
 さいか りる「デモあなた向ふは二人ではありませんか 奥住「エ、たとへ百人千人居る
 とても捨置がたい悪口雑言殊よは御領地を荒し歩行浪人ども捨置ては侍の道がた、んから
 比武をするの、あたりまへだハ」と云はれても娘は看々親父が斬殺されるの知れて居るの
 よどふまアこれが見のがして城中へ歸られようと迂路くとして居升と向ふの方を通りか

しり升たは同藩の恒川半三郎が草三郎を供よ連れて往く姿を見付娘はこれ幸ひとかけ寄て
 り急「モー、恒川様よい所へ御出下されました 恒川「これの承はれぬ筑波
 山へ御参詣のよし只今御歸りか り急「ハイ早速の御願でございませすが只今あれなる掛茶
 屋で父と浪人者と間違ひが出来まして浪人者が土屋藩の者は臆病腰抜侍との悪口よ父が
 主名を賤されたから捨置がたいはたし合をすると申してあれなる松並木で斬合つて居り升
 るが所願か御助太刀をして下さいまし 恒川「ナニ土屋藩の臆病腰抜侍と申たぞ可惡奴
 お頼みがあくとも参らんで相成ん」と云ひながら袴のも、だちをとり上げながら松並木
 のかたへ馳出してまいりますると早奥住は一刀の鞘を拂ひ二人の浪人を相手よ比武をいた
 さんと相方身構へたる所へ恒川半三郎が飛込むと申所は次よ申上り

第三回

引續ひて御聞よ入れまする様名の梅が香の御喇の全尾までいお長い續物で御退屈も願みず
 申上ますが彼奥住彌兵衛の今年五十五歳の老躰なれども浪人共は臆病者腰抜侍と存外な
 雑言遊言よ捨置がたく小紋の脚半紺足袋又鞋草なき柄袋を取捨て刀よ反を打てサア御相手
 よあらふと立向ふ朝貝林左衛門はギラ／＼とした生鹽の三馬魚のやうな無反の一刀を引抜
 けば金太郎も同じく強刀を振舞し二人共血氣ふいやる若者故息まき込でサア來と對狙ふ聲

劍會で木太刀の立合との違ひまして眞劍よなつてい互よ只モウ氣合が満て睨み合て居る計
 でソウ無暗よチヨンナヨコ遣わけよ参りません互よウンと双方構へて居所へ恒川半三郎
 が飛込で参り 恒川「奥住氏恒川でござる御助太刀よ参つた 林「扣へる手前の知つた事
 ではあひ 恒川「勿言汝達の大形村の浪士で水戸から笠間領地を暴して歩く奴よくも只今
 土屋藩の臆病者腰抜侍と申たナサア相手にあるから覺悟しろ 林「ナンダ手前が何も存
 じた事はあひ引込で居る 恒川「イヤ此方の土屋藩の恒川半三郎と云者なるぞ臆病侍の腕
 前を見せてやるサア覺悟しろ、ナカ／＼斯真助よ成つて饒舌れる者でい有ませんが流石の
 腕前の勝れた御方ゆへ沈着た物で刀を正眼よ付た儘サリ、ト一歩ツ、進みました位
 取が並々のものとの違ひ升から二人の浪士の大いよ恐れ後の方へ段／＼退り額から油汗
 を流し身体が盛んで参る様子を見て取り 恒川「ヤイうんあでくのぼう構をして用よ立か
 と云ひれて兩人は戦く聲を張上げて 林「ヤイ其方は何も存た事ではあひ扣へて居れ 恒川
 「ソウハいかんソラ／＼其様事では首が幾個有ても足んぞ、とい、つ、付入れれば二人はッ
 ウ／＼と喘みながらサリ、トと後の方へ退る其内隙が有たりけん恒川は飛込さまオンと林
 左衛門の面部へ斬付る切られて林左衛門ワット叫びながら片膝つく所を起しもたてず肩先
 から乳の下迄斬下るとウンと云つて倒れる様子を金太郎は見てコリヤ叶はんと逃出す處を

奥住彌兵衛横擲りよ頼のあたりをエイト斬る斬られて金太郎は刀を投出し兩手で顔を押し
 ヲット云て倒れまして血が流れて眞赤な顔よあつたから正眞の金太郎の様よなりました朝
 貝は猶も起上りまして逃んとするを彌兵衛が繼けて擲り斬り寸々斬升たが朝貝の細切
 たのは三杯酢よ致しました立派よ止さをして恒川は奥住諸共城中へ立歸り即刻重役よ届出ま
 した處が彼等は水戸から等問あたりを暴しあるく奴で御座イ升故却てよく斬た御稱美よ
 あり斬徳斬られ損で其事は先無事で済ましたが奥住彌兵衛は恒川半三郎の御影にて危き所
 を助かつた命の親だから早速禮よ參る所だが其頃は重役たちの權があり升から先重役の方
 々へ禮參りよあるぬた後恒川半三郎の方へ娘ありと下男を遣て參り 奥住「勝藏取次げ
 勝藏「頼もう 恒川「草三取次があるやうだゾ 草三「ヘイドウレ是は奥住様よく入ら
 つしやいましてませ御上り遊セ 奥住「サテ此間是不計危き所を主人恒川氏の御助太刀
 で一命が助かり何とも御禮の申さふ様もありません早速上らねばならぬのであり升るが何
 分にも重役廻りで存あがら御無沙汰を致した御在宅か御在宅から一寸御目通がしたい是は
 輕少物だが有合せた儀だから御笑納下さる様どうか臺の上へ載て御主人へ上て下され 恒
 川「これへくどぶぞ御通り下されたい 奥住「ハイ先御壯健で日々と追々御暑さよ向ひ
 升たが不相替御壯健に御勤成れ蔭ながら大悦よ存升此度の危うき所を御助太刀下され誠よ

辱あいのモウ年の五十五よあり升から惜もあいな命でいあり升が如彼奴不屈な狼藉者の爲よ一
 命を捨るのいかよも残念よ存ました處貴兄の御蔭で先怪我もなく無事よ治り誠よ難有いな命
 の親の恒川氏だから早速御禮に參りたいが長い物よん巻れるで何角ど大きよ遅れ恐入升
 恒川「イエどう致して御禮所で御座りません彼等近邊を荒して歩く悪い奴でござる只
 今又大した御進物斯様御心配を戴く譯に決して御座らん 奥住「イエよ御禮で痛入る
 どうか御笑納下されたいホンの有合せた物を差上げるのだからどうぞ御心配なくそれよこ
 きたの親子半六殿とも御別懇よいたし升たが半六殿のナヨイト三味線の爪びき位が出来端
 歌が上手で狂歌をやり發句がうまかつたから御重役の御酒宴の場所まで一寸扇子を以
 て舞などをやられなかくう云こと御器用で御座つたが御儀いあまり御上手でいなか
 つた所が貴兄のズツと御御にまさつた御腕は實に感服致しました何時の間にかそんな御
 名人よあひなりなすつた 恒川「イヤモウ甚だ未熟で 奥住「恐入たねエ私外よ何も御禮
 の仕方がないでいろく考へました處貴公はまだ御新造がない事を承りましたから不束あ
 から手前知り悉を上りたいがどうか貰つて下され 恒川「思召の程の辱あいが到底うれ
 不釣合の事 奥住「手前も一人娘で外よ子のあいかから聲を取べきかしり子であり升が貴
 殿へ差上ると申せば恩よ懸るやうよ思召か知らんがううでいありません私もどうか貴兄

乞御恩送りをしたいと思ひ升がモウとる年で先が短い事でござるから不束なれども此娘を
 貴殿へさしあげ命を捨てても貞を盡せと申付置ましたからこれを御恩返しに御禮も上る積り
 針仕事も一人前は出来ませ器量も親の口から自慢を申様だが余り御城下には此位お娘は澤
 山の無い心得御嫌でもあらふが無理な貰つて下され 恒川「誠よりれば難有い事ですが手
 前ども親父が財借を悉く殺して夫が爲る古い家來共は皆暇を出して只今での草三郎と云
 ふ下男と私二人ざりて極どうも經濟を正しくし儉約に儉約をしても借財を返す切譯も参ら
 ん位な仕義でござるから誠は困りますそれ貴兄はそう云ふ思召でござらうともおひる
 縁程の御器量なら十分を所へ御縁組も出来る御身分殊に貴兄の禮だから嫁は貰へど仰しや
 つても第一御當人が御不承知でい 奥住「イエウれば御心配はありません當人へも昨夜申
 聞ました所が娘が申より私は大した所へ参るより恒川様の様なお優しい御器量のよい御方の
 所へ参りますれば仕合で願ても参りたい位だと申ましたナンメ是り逃出してはいかんヨ
 逃んでもい、い實の娘も得心である通り眞赤も成て逃て行のは何よりの証據でござらふ
 恒川「誠は難有い事で御さい升が併縁談の事ゆへ一應の御重役の御方へ申上げ殿様へも伺
 ひ濟の上で御相談と致ませう 奥住「イエ伺ひは濟ました此間早川様へ参り呉願ひまし
 たら早速殿様へ申上げて下された所殿様も至極好縁だから早速取極るとの御意で先以大悅斯

吉事は早が宜しい結納として白羽二重も持て来た勝藏これへ其包を出せテヨイと祝箱を拜
 借と直筆を乗てすらくと認め山中殿を媒妁として早速其仕度取掛り五月の廿八日
 出度婚姻が整ひましたが一對の雛をあらべたやうお夫婦揃た器量よし恒川は廿九おる廿
 丁度よろしい似合の夫婦が出来ました併恒川の劍道の腕前のい、所から早川が段々と引
 立儀のうち五十石取進みしました併又新成と聞かあつて重役達も御馳走をしたり使ひ
 物や何や蚊やで物入が多ひが皆奥住から辨へ立派に致し呉ましたかやうも御城中御城下よ
 もない評判の御新造を嫁貰ひ其上萬事の人用ハ里方で持と云ふ悦び事が餘り續くと後ハ
 不善もので御座イ升實は歡樂の極る時の憂の糸口と申まして恒川半三郎ハ此おりえさんを
 賢つた計も重役久保田傳之進と云ふ當時飛鳥も落る勢ひ此久保田が筑波山でおりえを見染
 め自分の方へ貰ふと思つてゐる内に八百石の方へハ斷りまして十石二人扶持の恒川の方へ
 参りましたから少し疝癰もさわつて居る所へ退々立身して五十石取と成ましたから久保田
 ハ恒川を見る度思ひまして何かして失敗らせるやうな工み大勢の中で耻をか、せ終り役
 向とも勤らん様も致しませるが恒川の根がよい人故耐へま堪へて六月から八月月末迄辛抱
 して勤めて居ました或日青い貌として歸りて参りました故 奥住「旦那様御歸り遊ばせ大
 層御貌の色つやがお悪うござい升御藥でも上りませんか 恒川「イヤ、薬も何も服んで

三六

宜しい何故か胸がつかへて気分がよろしくないから自然貌色が悪いのだるふヨ　りゑ「長夫今日も又久保田が窘めましたか　恒川「お前どうして久保田が私を嬬事を知つて居るさるか　りゑ「ハイ長夫お隠しなすつてもいけません夫の御城中の評判で度々妾の耳へ傳聞升夫は草三郎が歸りまして男部屋は這入て袂を噛んだり自分で髪をむしつて口惜がつて泣いて居升から妾があんでお前のそんな口惜がつて泣のか喧嘩でもしたのかと尋ましたら草三郎が申升の毎日く久保田が旦那様を窘める者だから旦那様の今も御役を引だらふと御同役の方々が仰しやつておると申ての口惜がつて居ましたが大御隠し遊ばすのの妾よ心配をさせまいとの思召でございませふが夫では余を事でお恨みを申升、と泪ぐんで申升

「恒川」どう云ふ譯か解らんが此程よりの悪口雑言私を窘めて役向の勤らん様として万事御前体不取爲をするから殿様の御面色が違つて恒川は以の外だと御怒おさるも全く久保田の佞奸より此間も木の下屋の具聞の折柄衆人満坐の中であの帷子の染が間合あかつたから間に合せは紺青で紋を摺込んで置たもなだから早くも是を見て取り久保田の若侍達に銘／＼ぬれた手拭を持って紋をこすつて行ものだから仕舞の紋がばやけて消あつて仕舞たら久保田の見附て恒川の見聞は無紋の帷子を着て來のは腹でも切のかと大勢の中で赤面させ居た、されん様よしたから余程斬て仕舞かと思つたがあいよく好方の大小は他へ預け

七十三

て金を借り番ざしを帯て往たから我慢をして居ると又久保田が恒川の親父は拾石二人扶持で料理番を勤めて居たから刀は魚の鱗が着て居るだらう一寸見せると中を引ぬき赤鯛であるから矢張魚は縁があるぞと悪口し賦は不屈極み奴殺さふとは存したあれど否々輕躁の事としては第一殿様は不忠あり又お前の親御に不孝あり又お前も心配させまいと耐へ／＼て居たけれども今日の様子では逆も勤らんから役を退て元の拾石二人扶持よさらぶと思つて居るのだハサ　りゑ「長夫アノ久保田は大層見許家で座イ升から談ふ様でござい升が憎い鷹よは餌を飼と申替久保田の所へ機嫌聞御出遊ばせ　恒川「ただ往けば猶窘むだらふし兎云つて氣入る様よい物を持って行事は逆も出來ません　りゑ「アノ妾の不用櫛や笄が御座イ升たから親共は内証で拂て御使の物なるやうな立派な飾物の折を取て置ましたからアレを持って入らつしやいませ　恒川「忝ない其深切の無よいしませんン

あら往て來ます、と恒川もありゑの志を氣の毒と思ひましたから右の簪節の折を草三郎も持せ大手先から廿四丁ある片並木の久保田の屋敷へ参り玄關へ懸り　恒川「御願み申す

源「ドウレ　恒川「コレハ源藏殿恒川半三郎で御座り升今日の大士の御氣げん伺ひ

よ上りましたがどうか御在宅なれバ御目遣を願ひたい私も疾より御禮かた／＼罷出べき筈

の處御案内の通御用繁多よて存じながら御無沙汰なり誠に相濟ません是は輕少物で座



るが御笑納下れまし宜敷御取次を願ひ升 源「暫く夫へ御扣下されと、立て奥へ此事を取次ぐ、奥より例の書問斗分の佐泉勘二郎が参り久保田と酒を香で居ました所ゆゑ 久保田ニ恆川半三郎が来たところへ通せ 佐泉「ナニ恆川が来たしたとアレハ日々大夫の所へ御機嫌伺ひも参りてもよい筈だの少し腕のい、所から増長して何事も寄らず高慢な奴だが大分に隙れてはいかんと気が付て参つたのでありませう、と酔ばらいの噂々贅言 久保これへ通せ 源「へい、と立て再び玄關へ出て参り 源「御待どう直様御上り遊せ、と案内して奥へ通しますると恆川の次の間へ両手をつくのを久保田は見るより此漢がある故ありゑが此方へ参らんと嫉妬の虫がムカクと込上けて来たしたからこれを押へやうとする」と又此方から疳癩の虫が込上けて来たしたから見ると顔色を變て 久保「イヤ恆川これへ御出 恆川「日々未熟の半三郎何角と御引廻し下され有難ふ御禮は罷出へき所何分御用多端で存じながら御無沙汰は和成相濟ません平常ながら御機嫌よろしく 久保「日々御役目御苦勞今日は又どう云譯で彼様を結構な折を持って來あすつた其許の諷い武士だねエイヤサ斯様鯉節の眞藥で私を猫同様自由仕様と思つてもうういのかん勤は嘘があれバ教へても遣らんければありません夫をかういふ物を持って來て頼むくといつても鯉節はひかされて其許は手落があつても知らん顔で居ての役向が嘘にあらんからソンの物持て歸らつし

やい 恆川「決して左様な次第で御座りません到來はまかせホンの心計御土産の印御笑納被下すれば難有イ仕合で 久保「イエ成ません重役が鼻の下まいかひ賄賂を取て下役を自由とするやうな久保田でいあいぞ元石二人扶持御料理方の悴だが劔術が上手な處から御側勤よのあられたが先達でも木の下屋で拜見した腰の物のナンだアンを赤鯛を帯して居て正可の時の役又立と思ふか尤腕がい、から、陰でも差支ない云顔付で故意とアンを物を帯て來たのかコン事の小言もいんければあらんじやないか 佐泉「コレハ恆川氏日々御昇進のよし手前蔭ながら御恐悦を申升手前共なぞのトンと役立ぬ人間だから昇る事もなければ下りもしないで中途ぶらくして居升只今大夫の仰じやる所の一々御尤こんち物などを持って來ても大夫の御悦びのあい手前共なぞの毎日のやうな斯やつて上つても物をど持て來ると却て持て歸れど御小言を頂戴する位の事あれば何も持んで日々御馳走を戴くのだから物など持て來るの夫のいけやせんナア大夫先刻恆川氏が到來物だと云つたが恆川の所へコンを立派な鯉節を帯て來る筈はないアノ内へ持て來るもの干袋よさくら海老位もので恆川氏ソリヤア宜くさい是で返つて諷と言ふものも當から持て歸るが宜しい 久保 恆川九月の節句も間もあいが服の心得て居るか 恆川「何角未熟の事故一々御差圖下されば何様の事でも違背せんが何かお教下さらば難有イ仕合せで

座り升・久保「濃御納戸の紋付羽二重位の着なければあらん尤袖でもよひが 恒川「ハ、誠は親父の恥を申ては濟ませんが父半六が高不相當の借財を返し其上新役仰付られ誠は難有イ事であり升が夫が爲よ何やかや物入が引續き大小迄も他へ預け借財を致し升位を仕義で何分金子が不手廻り故 久保「ナニ貧乏で金がない爲めは役向も差支ると夫の氣の毒千萬何程有ッたら宜い 恒川「へい五十金計 久保「五十金で宜い何造作もない事サアこれを持って行け、と恒川の御前へ金子を投出す 佐泉「コレハ甚だ宜い恒川氏大夫のお小言は仰しやるが斯やつて成る事ハナヤンとなさる御氣質はやく持て居らつしやい 恒川「誠は種々難有うと座り升一寸御書付を認めませう、と速に証文を書て右の金を借用してお宅へお歸りよあると御新造が リ「うれ御覽なさいナ憎い鷹には餌を飼といふ譬への通り如彼奴は又爲よある事もありませふ、ナド申しこれから早速御納戸羽二重の紋付衣類を盤へ恒川が初めて着事で座り升から御新造が丁寧仕立てしつけまで抜いて置いて置て彌々翌日は九月の御節句で早出の事故大小も結構おのを質受あして衣類と共に風呂敷に包みの上へ載せて置きまして九月八日の夕方おりるは奥住の内へ参りました跡へ久保田の若黨が獨で参り玄關の前へ立 源「御頼み申す、 恒川「草三郎取次があるぞ 草三「へいこれは源藏さん御出ささい 源「ナヨいと旦那御目通りが願ひたい 草三「旦那様久保田の源

藏が参りましたと云ば若黨でも重役の家來だけ權があるから恒川自身も出て参り 恒川「コレハ源藏殿先達では罷出まして御深切御教へ下され難有く心得升 源「毎度御草々申升就ては主人申し先達で御用立申ました五十金今日速に御返金を願ひ度御書入の証文持参致しましたから引替よ金子を講取て参れと申付かりましたからどうか宜敷願ひたい 恒川「どうも只今直と仰しやッては誠に困り切り升御案内の通り大夫の御情で斯様は紋付も整へ大小も質受致し差支なく明日のお役の勤まるも大夫の御恩と悦び居ました今日も成て急返せと仰しやッては誠に當惑を致しまするが責て四五日の間御猶豫下され升れば必ず才覺を致し御恩金の事でござるから是非とも御返金の仕まつるがどうか其許から宜く願ひたいもので 源「いへいけませんそれハ大夫と御直談の上で御話しが付ば宜しいが手前は主人から金を取て参れと申付つただけを申より外は仕方が有ません左様じやア有ませんか 恒川「どうも夫での當惑を致し升必ず御返金の致まするが少々の間御猶豫を願ひたい 源「貴殿も御存の通り大夫が疝癪が強から云付つた通りして行ませんとはどう云ふ事だ馬鹿小僧の使でいあいぞ用立ん奴だと鐵の延の御煙筒でコッソリ頭を擧られ升からどうも往ません 恒川「ト仰ッても今と申ての金子ハ手元には御座らんからサ 源「金子が無れば私主人へ御逢の上でお頼みささい手前は云付つた通り証文の御渡し申升其替り此御召

二十四

物と大小の預つて参り升貴殿は主人は逢て能く其譯を云ふてお借り成るが宜いこれ丈けの
 持て参る」と有合ふ衣類の風呂敷を背負ひ大小を帯し行し掛る 恆川「暫く待て下され源
 藏どん若類の兎も角も侍の腰の物を帯て行と云事がありますか 源「帯たい事も御座いま
 せんが夫じやア五十金頂戴致さう 恆川「サアそれは今い出来ないから其處の其許から御
 主人へ宜く御取爲を願ひたいと申す 源「ア、云ふ氣性だから往ませんヨ」と云ながら玄
 關の式臺を下り掛るから男部屋に居ました草三郎が見兼ねましたから飛出して来て 草三
 「オイ源藏どん 源「ナンヤ」 草三「何か源藏どん夫を置いて往て下さいまし夫をもつ
 て往れチャア主人が明日御番が勤まらないで御役目を失敗らなければならぬから置いて往
 て下さいお前の旦那が御深切な折角借して下さつたのだから何か御願ひだから置いて往て下
 さい 源「コレサ其方も主人が大事だらうが己も大事だから云付つた通りよして往のなか
 ら其所去々 草三「イヤ退れません 源「去れませんといふんだ主用の妨を致と許んぞ
 草三「源藏どん私の頭を二ツでも三ツでも打ても宜から此風呂敷を置いて往ておくれ 源「
 己も云付つた用だからそんな事出来ねエ去よ、と云ながら突然手を上げて草三郎の頭を打
 ば 草三「源藏どん何を打んだねエ 源「主人の用を妨げるから打たのだ 草三「だから
 私の頭を幾個でも打て夫から其風呂敷を置いて往ておくれ」と云ひながら風呂敷へ掴み付を

源「邪アするなヨ去ヨ

草三「退ません

源「オヤ此奴何をするんだ掴まつて何する

チャ放ささいか此奴まだ袂をチャエ、袖がちぎれるア痛い放せと云よ 草三「どうぞお願
 だから源藏どん責て今夜の夜中まで待ておくんを私がどうか才覺して急度金子を持って往く
 からどうか御願ひだから夫迄待て下さいナお前夫を持って行れると旦那様が明日御役が勤
 まらないで御失敗なるのを家來の身として見て居られぬいから御願申します夫迄待て
 おくんをせエ 源「エイ馬鹿アいへ主人でさへ出来さい其方よどうして出来るものか五
 十兩だヨ五十文との違ハア金の才覺が出来ないやうな貧乏主人は勤めて居ると何時でもコ
 ンなものだ何して金の出来やう道理のあるものか出来ねエヨと云ながら又三ツ四ツ打ます
 故 草三「打あくツても宜じやアないかダカラ打て氣が濟から私の頭を十でも廿でも打て
 而して跡のお前が含んで居ておくれを急度今夜私が五十兩才覺して持て行から源藏どの慈
 悲じや情じや頼み升」と涙ながら頼むのを冷笑ひ 源「馬鹿アいへ出来るもんカ 草三
 「ッンから五十兩才覺して持て往たらどうするエ 源「不思議だナア世界が轉覆らア其時の
 恐入て己が三拜九拜すらアエ、面倒だ放せ」と云さまト袖を拂ながら草三郎の胸を突
 突れて草三郎は玄關の式臺へ倒れる隙は源藏は表の方へ出て行くを見送りて草三郎は口
 惜がり式臺へ泣倒れました 恆川「草三郎是へ來い 草三「ハイ」誠まどうも残念で御

三十四

座り升下郎は彼奴は續けて十三打れました 恒川「ぶたれながら勘定して居る奴があるも
 のか 草三「アノ久保田が故意と旦那金を買して明日と云ふ間際になつて取よよとし且
 那を困らせてお役を失敗らせる様よしした事違ひありません旦那口惜う御座い升とふか直
 よ五十金拵へて下さいますし下郎は其金を持って往て衣服や大小を取返して来ますから 恒川
 「うう云ても今直よ金に迎も出来んノウ此物入の多い中でヨ 草三「旦那は余程御貧乏で
 入つしやい升ナ 恒川「貧乏とはナンダ五月から以來物入の續て居る事を知らんか 草三
 「うんから奥住の旦那様の所へ往て御話しを成つて如何でございます 恒川「外父様も
 も色々御無心をした事も再々で借財借財が重あつて居るからとふも致方がない左様な事
 を心配せずよ部屋へ入て居れ」と云れて草三郎の不快と須臾思案をして居ました 草三
 「旦那様下郎はチヨイと御城下へ買物も往て参り升から少々暇をいたゞきたりござ座イ升
 恒川「早く行て来いヨ 草三「へい」と云ながら出て行暫らくたつと恒川の御新造
 ありとどのが眞の所から歸て参恒川の前へ両手をつき 恒川「ツヒ遅くあつて誠と相濟ま
 せん親父も宜しく申升た明日の御早出だから旦那様の御立派に仕度をして御出向きなさる
 所を拜見すると申て居升たチヤこへ置た御召の風呂敷はと致しました 恒川「アレハ先
 刻久保田から金の催促も来て源藏と云ふ若黨があの包を引摺て持て行たよ、と聞ひてわり

ゑの顔色替り 恒川「チャどうも果れましたね久保田が夫よ深切めかして金を川立今日
 よあつてうんお事を申て参るの、全く夫を失敗らせる爲も巧んだ事と相違ありません 恒
 川「左様ヨ 恒川「良夫と云ふ處置御積りでござ座イ升 恒川「どうと云て仕方がないから役
 を退てしまふより仕様のあるまい 恒川「良夫此儘御役を御退なすつて武士が立ますか
 恒川「武士が立てても立んでも仕方ない、恒川「久保田を此儘拾置て良夫御刀の手前濟
 升か家來を寄來て大小まで摺て参るおと云の、怪からん奴でござ座イ升から何か一刀よ久
 保田を斬て御仕舞遊ばせ 恒川「うれのお前よ云のれんでも切て仕舞ふと思つた事、是迄
 再々わつたかれど左様な輕躁事をした時、自分の腹を切らねばあらん夫の厭はんが向ふ
 の今飛鳥も落る勢ひだから此方の家の滅亡うなる時、お前の親父にも是まで色く御丹
 誠を受た事も水の泡となり殊に殿様へ對しては相濟んじやアないか、それが爲今日迄御辨を
 して置たのだワイ 恒川「妾親父へ御心掛の入りませんから何か良夫の御家も障らぬいや
 う御切腹もしないやうよ久保田を御斬あそばせナ 恒川「ソナ都合のよい斬やうの有ま
 せん迎もソナ馬鹿事の出來ません 恒川「久保田の瘡癩持で早出ゆゑ明朝片並木で待
 合せ主従諸共斬て仕舞 妾も一所よ御斬遊ばせと云ふよ恒川の驚き 恒川「ナニお前を斬
 との夫いどう云事で 恒川「サア久保田傳之進と女房りゑと疾から密通致居たる故不義者

六十四

あれば兩人共斬捨たど御届を申出成れば御重役も現在自分の女房を斬てある事ゆゑよもや
嘘とい思升まいから良夫の差たる御咎めもなく少しの御差扣位で済ませううすれば久保
田が家の潰れても良夫の御無事で座イませうから何か妾も一所にお斬遊して下さいまし
恒川「りゑ誠よ忝あいが何もお前能考て見あさい罪も報ひもあいな女房を無暗に殺すやう
な非道な事が出来るものか殊に親御に對して済まんないか 　りゑ「イエ親父の却て悦
び升當家へ縁付て参り升とき手前命は替ても貞を盡せヨ恒川様ハ命の親だと再々申片並木
の御恩返しをえて呉と申て居升から此事が跡で親父は知れますれば却て歡び升からそう遊
ハセアンナ者を捨置時の下役の難義殿様の御恥辱却て良夫が御不忠とあり升からどうか大
勢の爲よなる事ですから御斬遊ハセ」と云ひましたハ流石恒川の女房丈け感心を事で勘い
ふ氣丈の女の餘りありません大概の女の間男をして隠して胡魔かさうとする方が多い中
よ間男もしあいのに密通の濡衣を身よ着て命を捨てても半三郎の家よ障のない様よしやうと
し升のだが是が正眞の貞女と云ものでござりませう併寄席よお出よなる御新造様方の皆か
ういふ御方針で御珍らしくもありませんが中々感心を志して御座り升 　恒川「誠よ忝あいな
不東半三郎を亭主と思へばこそ命を捨てても助けんとする其志、無よの致さん忝あいな」とホ
ロリト落す男涙今ありゑの申た一言よ御主人の爲衆人の爲よあらんから斬れといかよも尤

七十四

の言葉ゆゑ 恒川「ソんから命を貰ひましたゾ 　りゑ「ハイ妾が無い後ハどうぞ親父の事
を何分とも宜くお願ひ申升 　恒川「メがお前の密通する様を婦人ではないから御重役も實
事とい存すまいが 　りゑ「ソんから妾が久保田へ送るみを認まだ當家へ縁付ん前よ密通を
したやうよ拵へ殊よ御種をやとして今月の最五ヶ月よ成ますと久保田の種をやうよ詐り文
句を入置升からこれを証據よあさい 　恒川「ソんからその手紙を早う書なさいまし 　「り
ゑ「ハイ、ト是から硯を引寄せ健筆と文章もうまく書畢り半三郎の前へ出し 　りゑ「これ
で宜しう汚座イ升か良夫のお久う御氣遣で入ッしやいましたからお訣れの水盃替りよ御酒
が少々取てありませすから一口召上つたら宜う御座イませう 　恒川「一杯飲ませう、おりゑ
は臍拵へを致して酌をしあがら涙一滴こぼさず機嫌よく笑ひ顔をして居り升ハ恒川の不憐
がまして胸が張裂るようであり升が武士といふ者のソウ歎嘘と泣ものではありませんから
ソツと耐へて訣れの盃をして居り升所へ眞夜中過草三郎が大な包を背負て参り包みと大小
を主人の前へ出し 　草三「旦那様只今歸りました 　恒川「何所へ行て居つた 　草三「ハイ
御城下へ買物よ参りましたがハイ是は御新造様大きよ遅くなりました旦那様これが御衣服
これは御大小只今久保田から取返して参りましたから明日のお早く御出勤成れまし 　恒川
アムどうして是を連れて來た 　草三「ハイ金子を返しまして取て参りました 　りゑ「ナニお



節婦
夫死を
雪さんといふ



朝香
雪さん

金を返したとは何して金子を拵へたエ 草三「へい一生懸命彼方此方を走すり廻り七所借をして金子を拵へりれを持って久保田方へ参りサア金を持って来たから衣類と大小を渡せと云ましたら源藏がマア金と出と云升から下郎が申ました金は持ては居が渡す事は出来ません モン金子を渡しても品物を與さあいといけいから品物と引替よしましよといつて御衣服と大小を脊負こんでサア源藏約束だ金を拵へて来たから三拜九拜して三遍廻つて御低頭をしろと云て遣ました夫から又下郎の頭を十三打たから下郎も打と云て打て遣ました七ッしが打てませんでした夫から突飛して玄關の式臺え抛りつけて歸て来ました 恒川「誠に手前迄は種々苦勞をさせて濟まん事だ りる本當は有難いヨ草三「旦那様の爲より眞身で忠義を盡しておくれで能マアお金を才覺して取返して来ておくれだノウ本當は有がた いヨ 草三「これで明朝御番の御差支りありませんから揚々然て入らつしやいまし 恒川「誠は辱けない禮の口よ云ませんぞヨ 草三「旦那様下郎も一生懸命は御奉公を致しましたから御褒美として折入て御願が有升が御聞なすつて下さいまし 恒川「ア、何でも叶へて遣ぞ 草三「旦那様どうか長の御暇を戴きたふ御座イ升 恒川「ナント夫の困る 草三「下郎も信州の前田原村に歸り母と妹と二人で暮して居り升から一人の母ゆるすとして遣度成ましたから侍奉公のフツク嫌なりました故お暇を願ひ升 恒川「それはいかんよ

其方の父草七殿の遺言は依て手前を家來とも弟とも心得三年以來劍術を仕込是から先一人前の武士は致さん内はどうも國へ歸して其方の老母は義理が立んからソウのぢらぬりれよ又暇を出してのぢれが困るのサ 草三「サアそれはいけませんへいどうしたんだか急よ國へ歸り度なつたんですからどうぞお暇をおくんなさいまし武家奉公のフツク嫌なりました強て嫌だといふもの仕方がないでありますか夫を無理に置と云譯のありませんどうしても置と仰ければ下郎の出奔て無断で信州へ歸つて仕舞ます旦那の様を氣力さしの貧乏御主人を持って居るのの厭でござい升愛想がつかたから暇を下されと云ふので伊升 恒川「勿言氣力さしの主人との何事なるぞ 草三「へいでも草履取の下郎でさへ五十金を才覺して衣類大小を取返してきたのよ旦那の御高も取て居つしやがら五千金計の金も差支へ才覺が出来ぬと云ふやうな氣力のない御主人を持って居て下郎の出世の妨げよなり升からドンな事があつても御公奉の出来ません 恒川「不屈至極な奴だ りる本當はマア呆ました氣でも違つたのかエ大方だれかよ悪智恵でもつけられての心持でいあるまいかサア御詫をしや 草三「へい心得違もなよもありません下郎が當家へ御奉公は参る時旦那様が主従苦樂をともよしおければあらんから今少の内は其は貧乏をして呉りの代り先へよつての吃度樂をさせると仰つたから今迄辛抱をして居たが三年の間ろくも物を喰

せし事もなく毎日御香物計り御供先で皆が手前はろくを物を喰ないから足がぶるく
 すると云々され外聞がわるくつてありませんから厭で座イ升どうか御暇を下さいまし
 恒川「奴三年以来剣術を仕込眞實の弟と心得丹精を盡してやつた恩儀を忘却して主人又向
 ひ悪口致すの斬捨ても飽足ん奴あれど腰の物の穢れゆゑ助け遣す出て行け 草三「今下郎
 の申事が御腹が立なら斬て御仕舞遊ばせ 恒川「勿言うぬの様者を斬るは刀の穢じやか
 らサツく」と出て行けど申す 草三「出て行ますとも往くふと仰つても願ひ升位ですから
 出て参り升どうか一寸主家來の縁を切たと云ふ御書付を一本戴きたい 恒川「書付は及
 ものか恩知ずの人非人ぬ 草三「三年の間御厚恩を被むりましたから御禮の爲は五十金と
 云大金を才覺して久保田から衣類大小を取戻して参り明日の御差支のない様にして上たの
 でモウ斯なれば恩も平も座イません早く書付を下されまし 恒川「書付は及ばん出て
 失ろ 草三「下ささらあければ私の方から書入ますへい只今差上升と男部屋から汚あひ硯箱
 を持参し禮證文を認め爪印を押し 草三「旦那様御新造様永々御世話様又成ました是から
 信州へ歸りますすがモウかう爲て主従の縁が切れて見ますれば此後下郎の体よどん事事が
 座イましても御厄介を御懸申せんこれ切御目よか、れませんかも知れません段々御寒サ
 よ向つて参り升から随分御厭遊ばして」と涙をす、り乍ら申のを 恒川「どうも本當に呆

かへつて何も言葉い出ないよサツサと出てお出 恒川「兎や角言はずよ早く往 草三「私
 の葛籠の中よりありまする國俊の脇差の親父の片身ですから差て参り升それよ若替を一枚い
 たいて跡の置いて参り升左様なれば」と悪まれ口をき、跡を振返々々草三郎の出て行升た
 恒川「りゑ斯く家來迄よ悪口を受けるといふも全く久保田傳之進より發せしこと相置難
 いりゑお前死んでおくれ 恒川「立派な御斬遊ばせ」と是から夫婦揃つて家を立久保田
 の登城を彼並木よて待受まするといふ所の次は御聞よ入れ升

第四回

恒川夫婦互に別れの盃の爲ましたがその流石女だ 恒川「妾の未練を申升で御座イ升
 が親父も積年で今年のもう五十五歳もあり升から餘所あがら一寸暇乞をして参りたう御座
 イ升からお暇を下さいまし 恒川「ア、往て來あさい」と云われ是から提灯をつけ同じ御城
 中の事あれ夜道も慣て居り升故一人で参りまして門の戸を敲き 恒川「勝藏や寐たかへ
 鳥渡こゝを開けてお呉れ 勝「へい誰様へい恒川様の御新造で御座イ升か只今開け升ると
 眼を靡りながら玄關を開け 勝「大層遅く入來いたしましたな 恒川「勝藏や寐たかへ
 勝「いエ一度寐まして一寸便家よ起て又寐ました所で目が覺て居ました 恒川「阿婆の
 まだ御目覺かへ 勝「へい先程迄御本を讀で居らつしやる御聲が聞へましたが去御目覺で

御座ませう 奥住「勝藏ナンだ何したと恒川のりゑが来た」と自分が立て支關迄出て参り 奥住「オ、これのヤア此方へ勝藏坐邊を片付なよアレ躓了いてのいかんよ輕脱し
 いるサア此方へ來なさい先刻の大きえ御勿々御馳走をして遣りたかつたが歸りが遅くある
 だらふと思ひ夫れも明朝の早出だから恒川が立派な姿で出て行を見たいと思ひ支度もあら
 ふと存じて早く歸しました りゑ「私ハ恒川に申付られまして明朝早く信州へ御代参とし
 て起行升から永の間留守に在る事阿婆も段々と積る御年故一寸御暇乞ふ参りました 奥
 住「何の用で参るのだへ りゑ「恒川半三郎の御術の師匠の木曾川成瀬と申しまして信州岩
 村田の内藤様の御指南番で御座いまして三年前は死なしまして恒川が御見送りの致まし
 たが今年丁度三回忌に當り墓参がてら追福を致度が御用繁多で参られませんか私よ代
 りよ参つて呉ると申升から参り積りもう段々御寒よ向ひ阿婆の御身の上が誠案じら
 れ升から随分御尊躰を自愛遊して御嫌機よく居らつしやい升様に 奥住「ム、誰ハ僕で行
 のだへ りゑ「アノ草三郎と云ふ僧奴ハ信州の前田原村から参つて居る者で道案内を能く
 心得て居升から僧奴を供よ連れて参り升 奥住「イヤ、お前嘘を言お前ハ廿歳草三郎ハ十
 八若い女よ若い男を伴て碓氷峠と云ふ難所を起して遣る恒川でいゝ左様でいゝ有るまいお
 前の何か半三郎のまへを失策て何も内へ歸る譯にいかず仕方がいゝから何所ぞ遠い所へ

でも行て仕舞ふか杯と云ふ不了簡でも有いしなにか頼を殘し賢婦を捨て輕率みあることを
 爲ての往かんヨ何もお前の様子が余所ながら訣別といふ様子に聞へるが如何云語で りゑ
 「イヤ、エ失策りも何も致しません 奥住「イヤ、如何も面色が疑しい頭の元た乃公が悲嘆
 るものか隠事ハあい恒川にかぎつて無闇人々を失策せる様を男でいゝ堂々を賢婦だりれ
 を失策つて遠い所へでも行かうと云ふ様を不了簡ハ有てハ許さんぞ怪からんナンだコノ
 くり白痴こりや誠よ是かつた今迄の娘の氣で居たが今でハ恒川の御新造へ對し甚だ失敬を
 申たがどう云語で失策つたか老父が説言よ行て遣がア、恒川が立腹を致すと云ふハ能々お
 事であらふ何だか云ふさい りゑ「何もりんを御案じ遣はす事ハ決して御座いません強
 て行なご被仰るなら参らんでも宜う御座い升から参り升まい 奥住「行ずよ濟位あらそん
 事事を申して來あくつても宜い何だか疑しい りゑ「阿婆左様あら 奥住「コレハ勝
 藏や御歸りだから深て行け若し何か云ふ事で御新造が恒川様を失策た様子なら直に知らし
 て呉老父が忠説よ参るから何しろ一寸様子を聞て來い亦途中で御新造が逃るといゝかんから
 氣を付て一生懸命帯を握へて行きナ りゑ「阿婆ハ餘計らない御心配を爲され升左様あら
 御機嫌さま宜しう」勝藏ハありゑの袂をこつかり握て伴をして参る りゑ「これ勝藏や送
 らんでも宜しいよナンだねハ袖をぞを握りたりしてサ 勝「うれでも旦那様が御心配を爲

御座イませう 奥住「勝藏ナンだ何したと恒川のりゑが来た」と自分が立て支關迄出て参り 奥住「チ、これのマア此方へ勝藏坐邊を片付なよアレ 躓了いてはいかんよ輕脱し
 いふサア此方へ來なさい先刻の大きき御匆匆御馳走をして遣りたかつたが歸りが遅くある
 だらふと思ひ夫れも明朝の早出だから恒川が立派な姿で出て行を見たかと思ひ支度もあら
 ふと存じて早く歸りました りゑ「私ハ恒川も申付られまして明朝早く信州へ御代参とし
 て起行升から永の間留守に於る事阿婆も段々と積る御年故一寸御暇乞ひ参りました 奥
 住「何の用で参るのだへ りゑ「恒川半三郎の劍術の師匠の木曾川成瀬と申しまして信州岩
 村田の内藤様の御指南番で御座イました三年前は死なまじして恒川が御見送りの致まし
 たが今年の丁度三回忌に當り墓参がてら追福を致度が御用繁多で参られませんか私よ代
 りも参つて呉ると申升から参り升る積りもう段々御寒よ向ひ阿婆の御身の上が誠一察じら
 れ升から随分御尊躰を自愛遊して御嫌機よく居らつしやい升機に 奥住「ム、誰が供で行
 のだへ りゑ「アノ草三郎と云ふ僧奴ハ信州の前田原村から参つて居る者で道案内を能く
 心得て居升から僧奴を供よ連て参り升 奥住「イヤ、お前嘘を言お前ハ廿歳草三郎の十
 八若い女よ若い男を伴て碓氷峠と云ふ難所を起して遣る恒川でいふ左様でい有るまいお
 前の何か半三郎のまへを失策て何も内へ歸る譯にいかず仕方がいから何所ぞ遠い所へ

でも行て仕舞ふか杯と云ふ不了簡でも有いしないか親を殺し賢婦を捨て輕率みあることを
 爲ての往かんヨ何もお前の様子が余所ながら訣別といふ様子は聞へるが如何でござりゑ
 「イヤ、エ失策りも何も致しません 奥住「イヤ、如何も面色が疑しい頭の兀た乃公が其瞞
 るものか隠事ハい恒川にかぎつて無闇に人を失策せる様を男でいふ許さんぞ怪からんナンだコノ
 を失策つて遠い所へでも行かうと云ふ様を不了簡が有てハ許さんぞ怪からんナンだコノ
 くり白痴こりや誠は愚かつた今迄の娘の氣で居たが今でハ恒川の御新造へ對し甚だ失敬を
 申たがどう云譯で失策つたか老父が託言よ行て遣かア、恒川が立腹を致すと云ふハ能々お
 事であらふ何だか云ふさい りゑ「何もらんは御察し遊ばす事ハ決して御座イません強
 て行なぞ被仰るなら参らんでも宜う御座イ升から参り升まい 奥住「行ずよ濟位あらそん
 事事を申して來あくつても宜い何だか疑しい りゑ「阿婆左様から 奥住「コレ、勝
 藏や御歸りだから送て行け若し何か云ふ事御新造が恒川様を失策た様子なら直し知らし
 て呉老父が託言よ参るから何しろ一寸様子を聞て來い亦途中で御新造が逃るといかんから
 氣を付て一生懸命帯を握へて行きな りゑ「阿婆ハ餘計らない御心配を爲され升左様から
 御機嫌さま宜しう」勝藏ハありゑの袂をしつかり握て伴をして参る りゑ「これ勝藏や送
 らんでも宜しいよナンだねハ袖なぞを握りたりしてサ 奥住「それでも且那樣が御心配を爲

つて居らつしやイテからナンでも御宅様迄お送申しますのです。りる「何だねへ断役迄りんを事を云つて失策も何も為ないやね」と云ふ問は恒川の屋敷へ歸て参りました。勝「御頼み申升く。恒川「ドウレ是のく勝藏殿大さ御苦勞。りる「大さ御苦勞よ何でも勤を大事よ為ちよ」と何も異つた舉動もなく勝藏の手持無沙汰で勝「へイこれの外は變つた事の御座イませんか。恒川「何事もないが御親父様は宜しく明朝又御咄しを爲るから宜く。勝「へイ殿様何かりの御新造さまが若し何か御座イ升なら日那が直出向と仰いしましたか何でげすか不斗その尊公さまが何か若しりの左様なら」と問の悪さう急遽立歸りました。勝「旦那只今歸りました。奥住「如何致した。勝「何も別は何も斯も變つた事の御座イません誠は御機嫌宜く恒川様が御出向ひで明朝参つてお咄しを爲から宜しくと仰つて中能く手を握合て立關よ上て奥へ御這入よ参りました。奥住「何の事だりれ。勝「何だか一向譯が分明りません。奥住「勝藏さんと心得るか。勝「旦那様何と思召し升。奥住「ナンだ同じ様な事を云て居る」と互は様子が分明り虫が知らずか奥住の何分も察付れぬも道理恒川夫婦の死を極め大手の御門を偽り抜出して片並木よ身を潜伏で待て居ましたか久保田の疝癩持で意地悪ひ丈に勤めも堅く八ッ起で沸々湯氣の寸御飯を喰まして宅を出て下名村から大手迄二十四丁程あり升が久保田の今日の九月の御節句故麻上下の折

目高く四分一拵への長短刀を帶し源藏を供よ連れ嘉助と云ふ鎗奴よ提灯を持せ急足で片並木へ差掛り升ると恒川半三郎の瞥見るより合羽を脱すて襷を揉り身支度を整へかりるも小刀の目釘を濡し若し良人が危ければ助太刀を致さうとする勢よ待つ折柄眼前へ提灯を持て來ましたから遣りすとし半三郎の備前盛影の一刀を抜くより早く其提灯を切落し升と腕が研て居ましたからスバツと切機み刃頭が嘉助爺の前へあたる嘉助のドサンと打倒ながら嘉「狼藉ものが出ました」と云ふ聲がピンと響き渡りましたから久保田の驚き一歩退つて一刀を引抜怒る聲を上げ。久保「何者だ。恒川「恒川半三郎あり過日からの意恨思ひしれ」と云ふがら一刀をふり上るを久保田の手早く後へ飛去りチャキリと抜合せました。後ろの方よ源藏が居ましたが主人の一大事だから助太刀を爲なければならぬので御座イ升が只もう肝が潰れて狼狽いたして逃る方角も便ませず只龜の子を釣した様よ手先をぶるく動して居り升のをおりる見付け久保田の後ろよ家來が立て居から旦那御怪我が有ていならあいと小刀を取直し源藏の横腹へ力任せよ突通す突れて源藏アツと悲鳴を上げて横よ倒れる其聲よ驚きて久保田が後へ退る途端少の隙が有つたりけん恒川一足飛込みさま臆から右の乳の下懸けて斬着ました久保田のアツと云ふて片膝をつく處を又左より袈裟がけよ斬着られ其儘久保田の倒れましたが。恒川「りるや何處よ居る。りる「へイ只今源藏

六十五

を刺留ました。恒川「早く手が届た」と半三郎久保田の大醫の鬚を引攪する。去て此方の松の根がたまたま扯着て。恒川「ヤイ久保田忘れぬ爲まい其方が不執行で殿様の御機嫌を損じ事へ度々あるぞ又去日本の下屋で見聞の折から衆人萬座の中で存分な雑言過言能く乃公を犬よまで比喩たな汝のやうな者を助け置け配下の者幾百人の難儀とあり又殿様の御爲よあらん汝ゆゑ一寸断し五分絶しよ致して呉ん左様心得ろ」と云ひつゝ、松の根がたまたま捻り伏せ。恒川「コレりゑや何をして居る早く此方へ來ささい久保田よく是迄良人を私より猶更意根のある奴おれに來て存分しあさい。りゑ「ハイ」久保田よく是迄良人を突窘め御役の勤らない様よ爲た奇良人を白眼たのひ此眼でか此口で穿たか、と彼方此方を突く久保田の虫の息で苦々と呻りながら細き聲を上げ怨せ怨せと云ふ。恒川「汝が様お心中の偏悪い奴の腹の如何だか見て遣る、とこれから二人でチャキ」と衝頭で鎗を寸断やうに斬ましたから久保田の息の絶ました於是恒川半三郎がプツリと立派止めを刺し久保田の衣類で殷血を拭ひ鞘を納め。恒川「りゑア、日本晴がした様よすつぱりと胸がはれた。りゑ「モウ鶏鳴よも間近ふ御座イ升から而て此處の筑波道で通行の旅人よ見咎られぬ様よ早く妾を御斬し遊ばせ、と云ひ恒川の傍へ置たる合物を敷て。恒川「うんあら前此上は危座りなさい。りゑ「イへ妾が左様な事を致し升ると却て夫婦談で致した様で宜く御

七十五

座イませんから寧ろ此草原で妾をさも憎さうに御斬遊ばして久保田の死骸と重ねて置て其上からか突き遊ばせ。恒川「左様か宜いか。りゑ「ハイ」と云ながら草原よ坐り兩掌を合せ額をさし延し良人サア不躊躇よお斬遊ばせ、と少しも臆するけしきり御座イません半三郎の殷血よ染つた一刀を眼の前へ突つけました驚然とも致まんせ余の勇氣よ流石夫婦の情合で半三郎の斬かね。恒川「咎も報もさいお前の様お貞女を眼の前で無慚と殺事い出来な事でありゑ今月の五ツ月の帯で有ったナ。りゑ「妾が不思議な御縁で良人の所へ御縁組よ成て問もなく良人の御種をやどま親父が大層よ歡び男の子か女だろうか武士の家では男の子が欲しいものあれど初産の女の子の多く生るもの何れよ致せ初孫の顔を見るのが楽しみだと再々手紙をよこしましたが妾しも良人の御爲よ淫婦よ落入後々で他人さまよ悪ひ奴彼様お立派お夫のある身よて密夫をこしらへたる天罰でよい氣味じやと云ひれるのひ厭ひませんが良人の御種よ此儘よ闇から闇へ遣るかと思へば誠よ残念で御座イ升。恒川「りゑ私のお前を斬る事い出来ませんと申せば何か愛情に牽され未練が残つて斬らん様だがお前の様な貞心あるものを久保田如き悪人よかへて殺さふと爲たのひ私が誤りて有た斯しませう此地に計り日は照るまい何地へありとも二人して落のび其子を分娩し縦令山の中よ隠退んで一生士民よ成ても宜い何もお前を殺てい阿舅よ義理が立ぬめとで御咄しを爲れば解る事だから

一所へ逃げて下さいサア透電しませふ　りる「良人でも妾が是程迄は決心した事をそれでは却て良人の御身が立升まいから如何か妾をお斬遊ばせ　恒川「イヤ、斬れませぬ阿舅も對して如何も斬れませぬ」と云ふ後の方より突然と　奥住「斬て遣て下さい　りる「オヤ阿爹さまいつの間も　奥住「どうも先刻舉動が疑いから心配も成て寐られヤア為ませぬ恒川氏先程テリ急が来て手變な事を申どうも舉動が疑いから勝藏を付て遣ると聊かお失策の機子無いと云ふから猶更氣に成て寐られまいから床を起ぬけて段々大手前へお來掛るとお前達二人で門を出て行から果さどう云ふ譯か猶更苦勞も成るから跡を附て來ると兼て遣恨ある久保田と立合も成つたから若しお前が危ひ時の老父が助太刀を致さふと思つて居たが何しろ久保田の當時飛鳥も落る勢ひだからあとで腹を切るか家が潰れるよ相違ないど心配して居た所り急が左様な事のない様も密通の罪も落入命を捨てお前を助るとい誠は感服わが娘を娶めるのでないが實も又娶て遣ても宜しう御座るこれ程迄は決心した事だから立派に斬て下されコレり急兼々申開て置た事を能守り此並木で老父が涙人よ切られて仕舞所を恒川氏の御蔭で危き所を助かりし夫の爲も老父も代りて命を捨る心も能あつて呉た誠も感服至極の真心どうぞ斬て遣て下さいヨ」と云ひつゝ、涙も聲陰れば　恒川「貴父の御耳も入ら止を得ませぬが何か子のさい昔と斷念で下され下拙りるを連れて一ト先此所を立退き

座へます草「戯談云ちヤア往けねへ和郎の今解つたのよ乃公の永へ間だ奉公を爲たものだから名乗て出なければ乃公が忠義が立たねへ幸「兄さん、和郎ぢやアいけねへ安中の饅頭屋と云つての離れでも人を殺す仁が殺さねへ人か知らねへもの無へから和郎が名乗つて出ても先方ぢやア眞實に爲ねへ乃公だといへば眞實にする事が有る此の傷の十二年以前旦那に斬られた傷だから此の傷を證據に乃公が名乗つて出て恒川半三郎に斬られたのを遺恨に思つて十二年の間だ附き纏つたが敵手の御備遣ひゆゑ叩き合つての難敵へが江戸へ立つ事を聞いたから一番濱浦家で大事なもののお松と云ふ事を聞知つてゐるゆゑ鐵砲で彈を殺し方々へ恒川半三郎と張札を爲たの此の幸吉だ若恒川半三郎なら鐵砲ぢやア殺すめへ刀で斬るよ違エねへのを鐵砲で規ひ彈に爲て方々へ張札を爲たのだ殺した野郎が誰々自分で張札をする野郎が有るか、サア證據も一枚残つた此札を引合せて見ねへと幸ひ一枚引剝して來たのが妙に役に立ちました是で何處までも云ひ張り濱浦へ名乗て出て御處へ受け日那さまの身代りになれ死んだ實父も何んなよ悦びますか知れませぬ……併し小哥が無へ後の便り少ねへ盲口と妹との和妹さん何うぞ黙然うと思つて力に成て遣てお呉れ夫に今聞けば實父を殺した仇敵の九平お坂で妹が仇討を爲てへと云たから兄い何うか鐵太刀をしつてお呉れ至依の小哥が仇討をする處だが和郎さん何うか小哥になり代つて仇討の鐵太刀を

爲て下せへ然うすれア和郎さしが名乗て出ると同じ事だから、是はッかり何うか殿様小
 哥に仰しやり付けて下せへまし實父も何の位へ草葉の影で悦ぶか知れませんが半「ウン能く
 了簡が附いた何うせ永持の無い命だらうから……幸「乃公ア御恩返しに名乗て出る覺悟だ
 阿母ア母「チ、……有難い夫で妾の何にも思ひ置く事御座いません半「ア、大悪の善よ
 近いと申すが幸吉が改心して予の身代りに名乗て出やう實父の恩返しを仕様と云ふ其の志
 は如何にも尊とい實のナ其妾を銃殺したは予でない外に殺し人が有るのだが彼を殺さん
 ければ濱浦家の害よなるから殺した方が宜しいゆゑ千村に逢て其咄を爲やうと思つたが其
 方の志を感じ致されたから、其方に此事を許す譯でないが藤造の息男で有るから其功を
 立てさせる爲めに身代りを許すから速かに名乗て出る幸「へエ有難う御座へ升、有難う御
 座へ升、然んならば大沼さまへも目に掛つて小哥のお細に掛ります、へエ有難う存じ升、
 と草三郎や母妹にも暇乞を告げ銅鐵作りを腰に差して外へ出よ係ると充分の張り込みで壺
 籠の鳥同様一杯に取り圍んで居る處へ幸吉が名乗つて出ましたさて八州の捕方が取巻いて
 居り升中へ溝呂木の幸吉が名乗て出ましたが濱浦家の重役千村喜又と云ふ人が附添て居り
 まして何うも恒川半三郎の柳生流の武邊者で平素の行状と云ひ誠の侍なれば濱浦家に害の
 有る奸婦ゆゑ設令討て立退にもせよ刺客者が與法にも飛道具を以て討つ譯もなし何うも恒

川半三郎では有まいハテ何者が討たらうかと調ました之餘程事面倒に成ことで素より殿様
 のお爲にならん處のお松の方ゆゑ彼が討果されば臣下一統の仕合せ又御家の爲て有る幸
 ひ名乗出た幸吉を引縛り引て往其法に行へハ夫れで事果る恒川の惜い侍だから罪に陥し度
 ないゆゑ幸吉を引て参つたが宜らうと考へましたから名乗て出たを幸ひに之に繩を掛て福
 島へ引く事に成りましたから幸吉の全く濱浦家の權妻お松の方を討たると云ふ廉で江戸表へ差
 立に成て御處刑になりました、草三郎の主人恒川と目の悪いお春と云ふ婆アと其娘おつね
 の三人を同伴て先兎も角上州安中の秋間道の自性寺村へ伴て來まして自分の宅と云て御
 座いません老爺老爺の居る處へ同伴て歸りました、此難番紛に九平のお坂を連れて逐電致し
 ました、お話二派に分れ少し跡へ歸りますすが文化三年に新橋の取手屋久兵衛と申す呉服屋
 の家内が死去まして丁度三十五日の墓参りの歸りに取手屋久兵衛が根岸の植樹屋齊平次方
 へ立寄ますとお出入の事御座い升から鄭重に待遇て酒肴を出し誰か相手に酌をする者の
 無かど云とツイ表に人來鳥と云待合で有ませんが掛茶屋にお里と云ふ年増が居りまして
 美人で有るし口前宜し調子が宜からアノ人と呼んでお酌をさせたら宜らうと云内儀さ
 んの計ひてお里を呼び酌をさせると取手屋久兵衛さんが實に美しい婦女だとシミクお里
 に惚れ込むお里もまた何う云ふ事か取手屋久兵衛を宜さううな仁だ親切な仁だと思ひ込ま

したから品掛りお酒の上で思らしい事を一言二言云つたのが病み附きて遂に之を權妻に致す事となりました此のお里と云ふ婦女の前申上げました通り文化元年八月廿日の晩に取手屋方へ盜賊に遣入りました妙義の白藏と夫婦約束を致し白藏が引廻しの時にお里が逢ひまして馬の前に捕まつて泣いて離れさせんのを無理矢利に振り切て乞食が引出さうとする其時に白藏が深くお里へ念を残し御處刑になす時に盡く取手屋久兵衛を恨んで死にました何う云ふ譯か自分が盜賊を致し悪い事を爲たから就縛れ自己に重罪があるから其刑を受けろの常然だのに夫を恨むと云ふの解りません久しい前に千住の小塚原で磔刑も揚るものが有りましたゆゑ前に立て見物し居てる者が數百人居り升ると其前面の田圃で農業を爲て居たお百姓に覺付法言を云ひましたと云ふ此百姓に恨みも報いも有りませんが乃公が今踏で脇腹へ風穴が開いて此儘相果る苦しみをする中で類冠りを爲てノン氣にも鳥のものを作つて居る百姓の心持の誠は悠然して誠に宜い心持だア、羨ましい事だと思つたより他に何も念のないか其念が露れなかつたと見えまして斯う云ふ法言を云ひましたから御處刑の跡で其暴された男の骨を賞つて葬つたら病氣全快したと云ふ事の全く有た事で御座い升現今然んな咄をするやうで虚言のやうで御座い升白藏の自分で悪い事を爲ながら取手屋を恨みました、自分も悪い事を爲ていならんと知つて居るから止めれば宜いのよ止め度と云ふ心が

有ても止むを得ず悪事の深入りを致し自分が悪事を止めやうと思つても其心を押へる事が出来ず自由になりませんで就縛れ、バ先方を恨むやうな事になります「心だに吾思ふにも任せねば人を恨みん理りぞなき」と云ふ歌が有り升、成程左様でせう白藏の念が残りお里が取手屋の權妻になり其翌年文化四年に本妻に直されました是から十年の間と云ふものゝ家業も繁昌致し彼の拾ひ娘を丹精して誠に家内穩やかに睦む暮して居りました事で娘の今年十三お里の三十五取手屋久兵衛の四十九になりましたが年が惡いから御嶽山へ參詣爲やうと講中に誘われ吉原の角海老の主人に魚平と云ふ先達其他花川戸の講中が附添て木曾の御嶽山へ參詣で六月の末に立ち七月一杯掛りますから歸りの程の遅う御座い升、其内にお里が不圖思ひ出した何う云ふ事か深川の靈岸に妙義の白藏の遺骸が葬つて有るのでお里がおよしと云ふ赤ら顔のデツプリ肥つたお尻の大きい丸々としたお饒舌りさうな下女を一連れ盆の十二日に墓参りに参り「里熱いから納涼うぢやアないか、ど高橋の田川と云ふ船宿へ立ち寄り屋根船を眺へ其中へ喰べ物を入れ「何國の入口に立て往けないから大橋の方が却つて宜いと船頭に吩咐て橋間へ船と繋留て大橋の團粉杯を入れ兩人で納涼で居り升ると直ぐ次の橋間に繋いで居た一艘の屋根船の中に年頃三十四五に見えまして誠に人柄の宜い色白な何處の御用達で御座い升か黒紗の羽織を疊んで柵へ上げ細かい簾戸飛白の

單物に本献上の帯を締め帯剣を引附け其側に居る者の出入町人らしい小粋な男で町人
エー旦那エ兩國橋や向かでの人通りが有て緩くり漸が出来やせん傍でチャカ〜三味線
弾たり隣の船から一杯お喫んなせへなんて五月蠅が此處のそんな事が無くって宜うがすナ
……旦那エ、旦那エ、旦那エ何んだ町人向ふの船に居る年増の何うです旦那エ、美しい婦女
だノウ町人「實に美しい婦女ぢやア有りませんか大丸髷で衣服の裝飾が宜いぢやア有りませ
んか思みが無くってサ着物が薩戸飛白で帯の珠珍ですせ顔の長くもなし圓くもなく宜い加
減で二重脛で口元の可愛らしい婦女だが先刻から頻りに横目で旦那を見て居やすぜ旦那
談云ツちやア往けねへ和郎の笑顔だから和郎に惚れたんだらう町人「談云ツちやいけや
せん小髷杯に婦女の惚れる事有りやせんが何しろ容子の宜い婦女でけすが婦女の立て見
なけりやア解らねへもんで立た姿を見るとお尻が大きかつたり何かして買ひ冠る事も有り
升が、坐ッてる容子が極宜いが幾歳位でせう旦那然う少年増盛りだノウ三十前後と云ふ處
か夫れどもモウ些と出越て居るか婦女の若く見えるからノウ町人「實に美しい婦女です夫に
引換へて彼の下女を御覽なせへ圓い顔で髪は頬邊が赤いぢやア御座いませんか併し一ヶ所
取柄が有る巻縮髪だア旦那止しなヨ風の模様で聞えると思ひヨ町人「ナニ風が強いから咄
を吹飛ばしちまいますから聞える氣遣い有りませんが何しろ美しい婦女だ、と男の直き婦女に

眼を附けるの妙な者で御座い升、思へば思ひるゝでお里の頼りと隣の船を覗いて見ると兩
人ともに容子の宜い男子も多見るやうに見ないやうに横目で頻りと此方を見ながら扇子
を扇つて色氣が無いから扇子も喰べないで細い藤で編んだ信樂の筒から煙管を出し烟草を
薫しながら横目で此方を見て居り升

第九回

里「和女モット此方へお寄りナ下女「ハイ只今、ネエ尊婦妾の身体が重量から船を傾げる
ツて船頭さんに苛言を云ひれました自分には解りませんが尊婦眞實に熱くって堪りませ
んと、早く來月に成たら少しの樂が出来ませうかと思ひます旦那さまの随分お八齋敷う御
座い升けれども其代り打解けてお酒を召上ッて在ッしやる時にまた可笑いお咄をなさい
まして氣を詰めまに一緒に遊べど仰しやッて眞實に宅の旦那さまのやうに宜い御方の御座
いませんよ……ア尊婦向ふの船に居る仁の美しい男で御座い升と御覽遊ばせヨ里「大層容子
の宜い御仁だノ下女「容子が宜いたッて先方でも内儀さんをシロ〜見て居ますヨ尤も誰
だッて尊婦を振返ッて見ない仁の有りません往來でも何處でも人の振返ッて見ますが眞實
に美男で御座い升子エ……尊婦妾のアノ粹風な仁の嫌ひですよモウ一人の旦那らしい仁の
人形が宜ぢやア有りませんか眞實に容子の宜いと扇子をバチ〜遣て首の向ふの方を向い

六十六

てましても眼の珠の此方へ来てエますヨ眞實に宜い飛白で御座い升こと里柄の宜い飛白
 だ子下女「然うです子、したがい眞實の薩摩飛白の少ないと云ひますから妾しなどい一生涯
 奉公しても買へませんワ……アノ飲んで在らッしやるのにお茶ですかねへ里「ナニ和女お
 茶でないよお酒だア子下女「アモ尊婦……アレ彼様な大きなお碗で召上ッて在らッし
 やい升から妾のお茶かど存じました……お香が種々なものが遣入てますヨ里「お止しよ然
 んなに戦き込てないよ……ア、船に居ても随分今日の蒸暑る日だね、と云ひながら扇遣
 ひを爲やうとする同時にプーと風が来て扇が手を放れて川の中へ落ました里「アレ扇が、
 と云ふ中に流れて往のを向ふの船に乗て居た町人体の男が手を伸て拾ひ取り此方へ向ッて
 差出し町人「エー扇が風で飛びまして少し濡れました下女「是の有難う存じ升、誠に何う
 も恐れ入ります里「有難う存じ升町人「何う致しまして下女「尊公の大層お手が長く在ッし
 やい升事町人「エー……ナニ大事なお扇子が濡れました里「誠に恐れ入ります有難う存じ
 ます願だ事でお手を濡しました町人「ナニ何う致しまして……お二人限りですかエ里「ハ
 イ今日のお寺参りの歸りて餘り熱う御座い升から此處に納涼んで居り升ので町人「二人限
 ど仰しやッても何てせう早晩に男の伴れ衆が飛込んで来るやうな寸法なのでげせう旦那
 止しはへ里「何う致しまして妾どもは左様の者で御座いません二人限で斯う遣て居り升

欠

MISSING

第五回

借前同申上申した恒川半三郎の妻のありを伴れて城中への歸らず富士澤村は眞鍋の列木
 へ出せず圓子茶屋の爺が住で居り升からは是へ至り此處で旅装を整へ何方へか退去く心算を
 致升から 奥住、是から直又遠く離れて生活す事故老父も最早五十五歳これが面の見をさ
 めイヤサ何卒夫婦中よく末を遂て下され去後の處の如何様も取斗ひ亦歸參の叶ふ時節も
 有らうから壯健な生活して居らる、様くれく、升ぞよ是の娘へ紀念としてこれの母が存
 命の間誠な信仰を致した御嶽の一心行者の其前も普寛行者と云ふ人が木曾の清瀧で荒行の時
 灘壺より不計得たる此神鏡ゆえの名を清瀧と云ふ魔除けのお鏡それ又此國光の刀首の恒
 川氏へ紀念として進上致さう路金も火急の事故不足にのれど持て行て下され」と差出し
 たるを受納め厚く禮を述べ奥住と談合の上で恒川のありを伴れて退去く先ハト州のみぞろ
 木村と云ふ處に舊召使つた家米の藤藏と云ふ者を尋て到り升と藤藏、水澤へ移住たし開き
 即刻水澤へ到り段々尋升ると上州屋と云ふ行燈を掲た馬士や流庸の歌舗よて居酒と温飴
 を賣り升る見世で御座り升恒川夫婦が覗いて見升と藤藏が頻に温飴を捏て居り升と其側
 に手簿をして居る女房の坂と元吉原の娼妓で彼處此處住替をして遂に玉村邊の驛亭を
 た、いて(あちらで)勤をする事をたくと申升)來た旅娼妓で人練名して髪櫛のお坂とす

して歳ハ三十一で御座り升が一寸垢の抜けました小気な女で洗髪は横櫛で居りますと人の目も付く尤物で御座り升藤藏と共稼をして其日を送り今温飴を捏て居る處を半三郎の藤藏無事かど爬入ます舊主の姿を見升と藤藏の忠義な者で有升から悦び跌足で飛出し能く入来いましてと早々洗湯をとりて上へ揚げ借如何云ふ仔細でと問懸られ半三郎の實の上官は憎まれ斯様ハの次第がありて岳父様とも御談合の上で土浦を退去させ態々汝を尋て来たが萬事宜しく頼み度と云ふ藤藏の決して御配量遊ばすなと夫婦懇認し彼此と饗應し升から半三郎も心を落付て藤藏方へ寄食よあつて居り升が別は爲る事もあければ偶は温飴を捏る手傳など致又ありゑの上手であり升から頻りも他裁縫をして縫上げるのと持て参り幾等かの縫料を取て居ましたが早十一月五日の事で對舖の清水屋と云ふ割烹店から縫物を頼まれ出来上りましたからありゑの包袱へ包み持て参りりる「御免なさいまし」婆「オヤハ出あせエマアお歌なさんしりる「ハイ御詔への御小袖が出来ましたが能くの出せせんから御着よくければ何篇でも縫直し升から御遠慮なく被仰て下さいまし」婆「コレハヒエどうも能出来やしたこんな山の中でがんすから碌は裁縫をする者が無で困つて居やんした貴婦が来て呉たから皆あア歡んで居やんすよ貴婦の旦那の氣色が悪いありでがんすが風でも引あすつたかナア雪がゑらく降つて寒いからねエ大切よあせエよ賃錢の跡から使は持

せて上ゲヤんすよりる「いつでも御座り宜う御座り升ヨ左様なら」と出て行姿を最前より奥の一間で呑んで居た男の宇都宮の素封家で高崎の大黒屋へ来て二年位も泊て輪贏として居る人ですが今清水屋へ遊びよ来て居ると鼻の先へ見とれる程の別嬪が来ましたから素封家の供の男は素「コレサ今迄婦人も見たが此位美人の我イ見た事ハねエナントハア第一アノ品の好事ハサ口のき、様と云ひ禮儀と云ひどうも尋常の女でいゝと思ふがどうだ」供「左様サなんでも屋敷ものよ違ひハあんめエ」素「一寸女房さん」女「ヒエイお呼あせエやしたか」素「今アこへ包袱持て来やしたアノ女の何方の者だエ」女「アレハ向ふの上州屋よ泊つて居るお客さんでがんすよ」素「あんどマア魂消程の器量ですあア女」斯云ふ山の中だから余計よ目立やすよ」素「どうか女房よ賃譯よいさますめエか金を山よ積んでも宜が親の一人位ハ引取て世話をして遣て装金の三百兩位出して構いさいが女房さま世話アして下されぬエカ」女「無功でがんすよは亭主が有やす立派な御方で夫よ孕子が出来てハア七十月とかよ成やすとさ」素「ソリヤ無功だナア我顔ベエよ見とれて居から腹の大のよ一向氣が付やせあんた」と頻り話しをして居ると後ろの顔を明けて出て来ました年三十五六の漢で純名を八呎鳥の九兵衛と云ふ悪黨で座イ升がちよいと調子のよい漢で」九「ハイ只今御隣坐敷で一ツ杯遣つて居ましたが賤生の信濃屋の九

兵衛と申升もので御座イ力御心安く頼升只今御様子伺ひますれば今来た女は湯熱の様子ですがアレの向ふの上州屋に寄食に成つて居るもので亭主が氣色が悪いからアノ女房さんが他裁縫をして其日を送つて居るんですが上州屋の女房のお坂の賤生が妹ですから内の様子に能く知て居升があの位器量だから亭主と別れてエと云ていやしたから尊公が統よ三百兩出して下さるなら嫁姑をして尊公の御新造は周旋しましょうが 素「うれい多謝ひが亭主があり品胎が有ものを金を山に積だつて出来ねエ咄しだ 九「うれい相談づくさ亭主は手切れの百兩も遣つて下さりやアあの女をそつくり引取すのサさうなれば温飽屋の亭主も助かると云ふもの當人の猶更僥倖もある事だから何か左様して上げて下さいお素「コレハ御挨拶も申やせんが我ハ野州宇都宮の糸商人杉原長兵衛と申もので御座り升が四年前以前女房は死れて後を探討して居やすが本統よ来て呉るなら三百兩位の貲度出しますよ 九「うれいでい咄しが早エが今先方のびんぼふで困つて居る處だから行ってさう云へば女も悦び升が何か証據があれば當人が厚敷もので堅から眞實は仕升めへと存やすが何卒か金を二十兩遣つて下さい賤生が夫を持って往て尊公の眞實を先方へ見せやすから 素「ソリヤア出来やしねエ足下よ初御目係た御方で温飽屋の内義の兄さんか伯父さんか何だか少しも知ねへ御人よ二十兩の金を贈與して仕舞跡で先方へ行って見てなんでもねへと云

れりやア我がハ馬鹿見なければあんねへからよ 九「成程是ハ大きき道理りれでい斯しませう尊公が亭主の手が切れたら此方へ引取らふと云ふ寸箋を遣つて御呉させエお素「うれりやア不能得ねエ其寸箋を証據よ姦夫見付たと云れちやア大變だからねエ 九「一々道理夫じやアあの御新造の處から寸箋を貰つて今夜旦那の御泊の高崎の大黒屋迄持て参りましたら夫で御疑團あり升めエ 素「成程うんから何分御依頼升ナンよしろ御近付一杯差上やせう」と酒酌交し長兵衛のりれ程愚那人でいありませんが惚た女の事故實と心得悦びまして高崎の大黒屋へ歸り升と九兵衛の藤藏の女房お坂とハ玉村ハ旅女郎で居た頃ハ深き中故人目を忍び密會あつて居り升が町内で知らぬハ亭主斗なりハ川柳にもある通り藤藏の少しも知らずお坂の家内の首尾をして潜水屋の奥座鋪へ通り 坂「チャ情夫かハ内ハ容もあるのよ度々呼びよよこされると困るよ 九「ハテ用があるのだからよ宿六の内か坂「内よ居るけれど虚聲で出て来たが内のいあんお老實だが奥よ居る夫婦連の客の目から鼻へ抜ける様な惨憺的だから了得れない様にしてお呉よ 九「其泊り客の御新造は附て三百兩の金儲か有から来たんだが宇都宮の素封家で高崎で年を越と云ふ商賈上の廣い旦那がアノ御新造よぞつこん惚込んで世話をして呉るなら三百兩の出すと云が我ア手が出来ねへからお前よ擬筆尺牘を寫してもらつて持て行のよ其文面は眞實ハ奴家の様るものでも亭主

よ別れた其上では女房よして下さるから確か御返事を下さい外又便のない身の上ですから
 力も成つて下さいませと何かと有りこり甘く書て呉ねエ 坂「オヤ奴家のやうな悪筆でも
 い、のかエ 九「ハテ先では女の墨痕の知らねエから書ねへ」と云われ坂の女郎あがり
 丈ソンの事は得意ものですらくと書認めて九兵衛と與す九兵衛の直は高崎の大黒屋へ持
 て参り彼素封家と偽贖を呈すと大層歡び水天宮の御札でも頂いた様も三度も拜いて封を開
 き讀下し當人が全くさう云心あらこれ丈盤費を遣て置ふと三兩與す九兵衛の受取自分遣
 て仕舞又坂は尺贖を書せ過日にお金三兩御贈下され御蔭様で凌ぎましたどうか御見捨あ
 き様よなどよき文句を書て遣ると貳兩五兩と數度長兵衛より贈す金を受取九兵衛の白面
 ッくれて遣て居ましたすると其年も果て享和三年二月十一日又ありぬの初産あれと玉のや
 うある女の子を分娩しました夫婦の歡び大方あらず山中は梅花を見るの心ありとて梅の四
 徳を具すと云成熟するの貞たりと云は成長の後所夫よ貞をつくす様よといへるを祝しよて
 名をばお貞と号ました藤藏も初孫でも設けし心よてよく世話を致しますが半三郎の彼是出
 費が續き貯金も手薄なりました所から舅與住の方へ頼状を送り金圓を用ひ貰んと藤藏よ
 使の義を頼むに藤藏も委細を承知し左様なら明日よも發足致ませうと云ふを坂は早くも
 是を九兵衛の許へ通じましたれば九兵衛の彼ありを金をよするよ何よ付ても邪魔よするの

のアノ藤藏だから明日一時早く發足してくれ途中は待受踏違あたりで殺して仕舞へハ跡の
 どうともなる事だから其方氣をきかして遣つて呉とお坂に頼み兩人密に喋し合せし事の神
 ならぬ身の藤藏のいかで知る由の座イませんから其夜のうちに旅の支度を致常より早く
 眠り升とお坂の明ぬうち藤藏を立てやうと存じまして明七ツ前又膳立を致して藤藏の枕元
 よ参りまして 坂「ツイ起よ〜 藤「マヌ早くわねへかエ眞闇で鳥が鳴あいやうだぜ
 坂「少しも早い方が好じやアないか早く行ば早く歸られるじやアないか兼惚ちやアいけ
 ないよ 藤「今日の十八日だから親音様へ御参詣の人があるから聞しいよ 坂「聞しくつ
 ても一人で澤山だよ顔でも洗つて眼をお覺しよ」藤藏の顔を洗ひ終りて 藤「旦那様御新
 造様御早う御座イ升 恒川「大分早いノ 坂「御茶が出来たから喫り 藤「白糞のやだか
 坂「白糞も和糞も出来て居るよ加之今日の旅立だから乾者でも頭付を附てそれに梅干よ
 砂糖をかけて置たから喫りよお客様の様だろ 藤「こいつア難有イ」といそぎまして喰
 事を致ますと恒川の認め置たる書面を出し 恒川「夫でい足を以て行て吳若御城中へ這入
 れなければ眞鍋の列林と鼓藤張りの茶棚があるから其家の爺を頼み岳父を呼出して貰ひ書
 面よも添敷書ての有が猶其方より申て呉よ嬰子が産れたり何やかや失費が續き貯金も僅少
 よ成りましたから三拾兩程拜借致し度此乃首の作も能く拵へも宜いから賣拂度も此地でい

目利がふければ其地よて賣拂ひ下さる様よと申て是を証據よ持て行き御咄しをして呉る
 藤「畏りました左様なら行て参り升夫じやアお坂や留守中能氣を付て上てくんやよ 坂「
 大丈夫だよ氣を付ておいでよ 藤「お坂い、かエ旦那様御機嫌宜しう 恒川「夫ぢやア何
 分頼む氣を付て行な忘れ物ないか 藤「御傳言の義の確と承知仕つりました左様ならば
 と藤藏の白張の小田原挑灯を附て八丁斗り段々とおだれを下り水澤から踏違へ出て参りま
 した一方はずつと榛名から水澤迄の山續き峯村までの松林高崎と前橋へ出る岐路よて極物
 淋しき所で御座り升夫だ夜明け明きらず真闇で御座り升から藤藏の挑灯を振照しトボくと
 遣て参るを最前より大石と根笹のあります凹の所よ忍んで居升八呎鳥の九兵衛の長脇差の
 目釘をしめし藤藏の來るを待て居ます扱此方での半三郎が但見と火打袋が取殘してありま
 したので 恒川「お坂や藤藏が火打袋を忘れて行たから我が持て行て遣ふ」とッれてお坂
 の胸の中行れちやア大變と思ひ舉動を悟られまいと 坂「チャ極で輕尻しひ人だよナニア
 ノ奴家が持て参り升からよう御座イ升 恒川「ナニ我が持て行て遣るからお前の産婦と頼
 むよ 坂「ア、申奴家が参り升からサ 恒川「イヤ、我が行て來ませう」と恒川の火打
 袋を懐中よ入れ小刀を差て取速ぎ藤藏の跡を追懸て参りましたが是から如何相成ますか話柄
 の跡へ返り草三郎ハ土浦の鷹匠町の官衙へ自訴致しましたから段々の調べよ成りましたか

久保田主従三人を殺し又森田屋金六方へ忍び込込五十兩を盗み取たよ相違御座いません早く
 所刑を願ひ度と申トンと下調のみでい坪が明ぬ所から奉行長谷川又左衛門様が出席よ成
 りました 長谷「恒川半三郎の下僕草三郎頭を上ゲニ其方今朝訴へ出たる証旨の片列林よ
 於て久保田主従三人を切害し刺さへ久保田宅へ忍入百金を盗取り森田屋金六方よても五十
 兩を盗取りし夫よ相違のあいか 草三「ヘイ夫よ相違御座イません 長谷「其方上を詐
 るか 草三「イエ詐りの申ません 長谷「休言其方の草三郎の分際でありながら御側近く
 を勤める右職たる久保田傳之進主従三人を殺害さすとい思ひもよらぬ事御者か外よ殺せし
 者有つて其者の頼みを受け其方が成り代り訴たへ出たよ相違あるまい今朝片列林の死體檢
 使の公人より申立よの行方を檢査見るよ頗る本主人の様子中々其方如き者よ漸に建進のあ
 ひ何れ隠すとも口實、相立んぞ有様速かよ白状しる 草三「小可のモウ白状して居り升
 殺した者が殺しの致せせんよ申せバ悪う御ざいませしやうが殺したよ違ひないよ申ので御座
 り升亦草履取だつて膝さへあれば右職でもあんで斬れ升わけで御座い升へイ、御主人
 半三郎の柳生流の奥儀を極めた名人です小可も主人の家よ三年奉公して居る間御衛を練習
 れて卒業生の腕前ですから久保田の様を腕のよぶい者のボカ、斬れテ末熟不殺球な久保
 田傳之進が八百石を取り小可の舊主人の様を名人が五十石で居るとい上の頭職、盲目です

あ 長谷「休言其方の何等の意恨あつて殺害致したか速よ夫を申せ 草三郎別よ小可の意恨の有りませんが小可が恒川様も勤て居つた時分久保田が不執行をして罷職せる様な事をしたり非道な凌虐やうをいたしましたからアッ者者活して置いての主君の御爲よあらず亦摩下大勢の爲にあらないから小可の盗人を致してどうせ首のさい身の上故きびくど斬て遣ました八殺の上よ百五十兩を盗んだ大罪小可の首さへ御切成されば宜いので御座イ升から早く御切被成て下さい 長谷「其方如何程陳じても口實に相立んぞ昨夜百五十兩の金圓を盗み今朝訴へて出て見れば一錢も遣うべき問合が有るまい賊を働く奴の十成丈け知れぬ様逃隠てもいや天網遁がたく彌々進退極つた時訴へ出るもの成るよ其方の所行の是と相違致し何分奉行の胸も落らんぞ若や其方恩義を重んじて其者の代りよ名乗出し事あれば正直よ申上ろ左すれば其方の勿論恩を受たる者の罪迄軽く取量ふが上の慈悲じや何分罪なきものを罪よ落す譯よい参らんから正直に白状よ 草三郎「へい有難う御座イ升長谷川様の御情け御奉行と聞て居ました唯今の御言葉恐入りましたが久保田を殺した相違ありません金圓の遣ふと思ひました跡で能く考へて見ましたら道ならぬエ事をして濟さひ事だと気が付きましたから訴へて出たのですから早く首を切して下さい 長谷「扣へる飽まで陳ずれば吟味中入牢申付る 草三郎御申付けがあくても小司の方から入牢申付けられよ参りましたの

で御座イ升」ともどより命を捨てる覺悟で御座イ升から御奉行も致方なく立ませエと是から草三郎の入牢致ました官衙からの直よ人を馳て段々恒川の様子を調べるよ昨夜行衛知れずよ成りし由おかれバ奥住方へ聞合せてもトント分りません故必定夫婦の者が意恨よ依て久保田を殺害し此所を立退き下僕草三郎の共器よ代り名乗出た相違あい不便なものだ手當をして遣れど長谷川様の御聲掛りが有りましたから草三郎の大層樂よありました此牢よの別よ半伍長と云ふものい有ませんが年久しく牢内よ居る稻石村の京五郎と云ふ者が長を振て居ました其年も果て翌年の二月五日又此牢内へ新入よ来たものい妙義無宿の白藏と申緯名を白雲と呼れ歳ハ二十四歳色白く鼻筋通り眼申すやかじて女の様な優い容貌の男だが牢獄が五度もある強悪のもので御座イ升 京「ヤイ新入り坐邊へ出る汝何んで獄へ被繫で来た 白「エ、賤生やアつまらぬエ博奕場の間違の意氣張づくから金太よ由藏と云ふ二人をた、き切た所から捕縛こんで来た者です江戸へ御差立よあれば最二度と娑婆を見る事の出來ねエ體だからどうか手當を願エやす 京「此奴の顔よ似あひねエ事をしたを坐邊へ來て乃公ア脚をた、け、と云れ白雲の心の内での牢法も知らぬ無法な奴だと思ひましたが新人なれば仕方がねエと頻よ足をたしいて居ると京五郎より二問斗離れた所よ草三郎が御手當があるから邊の上よ坐つて居るを見て白雲の小聲よて 白「兄イさん何分御頼み申し升



草三「ハイとんだ所へ御出なすつたねエ 白兄イさん足下さんの何で被繫で來のだ 草三「ナ喰ハ込んだと何も喰アしません毎日く一度大きな飯團が一個香薷薊が一切りれも多八分米二分ですからゴツくして喰ませんよだが長谷川様から時々御膳とお肴を入れて下さるから幸福で御座イ升 白喰のじやアねエよ足下のをんで來たのだ拘摸かエ博奕かエ 草三「イ、へ小可の此御城中の御側御用を勤める久保田傳之進主從三人を殺し其上百五十兩を盗んだ盜功だよ 白エ、足下ハア何歳なるんだ 草三「ハイ小可のいつて十九よあるが去年の九月から此牢に整居て居り升のさ 白十七や十八で人を殺し金を取どいていした本罪だよア 草三「ア、小可の柳生流の卒業生だからね 白柔和を貌をしてい、悪黨だよア 草三「貴兄さんだつて盜賊をしううもさい優い貌をして居るじやアないか人の外面よりよらさいものも互だアね、白雲巖を密め 白時よアノ京五郎と云奴の牢法も何も知らねへ奴だなア 草三「われハ一番古く居るのだが時々内からドンナたおかしな差入物が來るだろう去頃も芽黄木綿の裏の付た濡衣を入たり蜀黍餅や蒸藷が來るよ百姓で博賭漢だとねエ 白「あんぼ新入だつて足を擲といあんまり非道や江戸の傳馬町の御牢内から足をた、くの猫のする役だ 草三「アノ猫が足を擲のかエ 白左様じやアねエ巾着切の小僧などがする役だと云事よ賤生癩よさわつて最一遍娑婆が見たくさつて來

た 草三「備あんざア見たくつたつて迎も這入事いから見られやアしねエヤ 白「さうじやアねエ外へ出てエと云事よして足下ハ何所の生れだエ 草三「小可の信州前田原村だよ 白夫じやア花形の薬藏宿禰の所だ賤生も弟の宿禰の處より厄介よなつて居た事が有のよ 草三「うんなら彼處よ四十六斗の女で女の子と親子二人暮しの者が有るかエ名のちばると云のだが貴兄さん知つて居るかエ 白「さうく、元ハ武士の御新造さんだとか云て裁縫をして居るが賤生もアノ婦人よ濡衣を縫て貰つた事があつたツけ 草三「ううかエありや小可の阿母だよ 白「どうりで能似ていらア 草三「似て居るくつて本統の子だもの達者で居升かエ 白「所が息子が悪事を働き人を殺したと云事が聞へたもんだから邑長がうんる太イ子の有親の村方へ留事い出來ねエから出て行けど云はれたもんだから婦人の仕方よく女の子を背負て小包を抱へ泣ながら何地へ行様子だから段々聞と今の始末賤生も氣の毒よ思つたから金を遣ると悦んで觸りの俸が悪事をした爲に村を放逐れ路頭よ迷ふ因果者で御座イ升と泣ながら別れたのが去年の十月廿八日の事だ 草三「エ、うんなら村を放逐はれましたかエ誠よ濟い事をしました阿母さんの何も御存じがさいから、と云ながら涙を拭ひ、草三「壹人の母を路頭よ迷はせ嘆を懸る不孝の罪も旦那様の事からは非なきわけで斯なりしと聞せ申は母親も事の道理のわかりし人ゆへ亦親父が死期の遺言よも

御主人は使へて忠義を盡すに親はない物と思へど仰しやつたが濟ない事を致したと、辱を忍びて泣沈むを
白「誠は感心だ親孝行だのう 草三「どうかして最一遍あつて一ト言
咄しを仕度が其筋とか見たいものだあア 白「足下ほんどうは娑婆が見てエか腹生も最
一遍透てエものがあるのだ 草三「又是親かへ 白「ナニ北條の伊勢源と云料理屋の娘だ
草三「エ、人が泣て居るの又情語るものもねエもんだ 白「娑婆を見てエなら見せて遣
ろうが少し耳を借せ」と何か呶く草三郎の驚き 草三「ナニ牢を破るんだと 白「止々静
よし下地の腕前が力だよ、と兩人密かよ喋り合せ時を待つて居り升と三月廿五日の日暮
れより風吹添へて大雨降出し盆を返し車軸を流す斗り稻石村の京五郎の草三郎に足を搦か
せ心能き儘うとく遣て居る様子故白藏の今夜此嵐ゆる夜廻りの監官も歩行かれず八ッか
ら七ッの間をはずさず牢を破らふと先京五郎から先へ片付て仕舞ふと密と獄板を持ち來り
心持能く眠り居る京五郎の咽喉をひ上るよ京五郎の驚きあがら其手とりつき苦しき聲よ
て何をするのだと云はせも立す草三郎の驚て期したる事なれば罪と思へど仕方なく同じ
く獄板を逆手よ取り肋のあたりをズツンと打ば京五郎ワット斗り又悶へ苦しむ其板を白藏
の再々獄板を正よ取り京五郎の頭上を目懸けて撲付るよ頭腦を打たれて倒れ升と此有様よ
廿四五人の小盗人等の驚き慌て總立よ立上り升と白藏の京五郎の死骸よ片足を踏かけて獄

板を右手に引さげ仁王立よ立上り眼を怒し聲を暴らげ 白「ヤイ此奴輩の神妙よしろシマ
ハタ騒ぎやアがると撲殺して仕まふからさう思へコレ乃公の名号を聞て懸ッ玉を天上に飛
ばすな妙義無宿で白雲の白藏とい乃公の事だ下手アまごつくと不殘擲を殺して仕まふぞり
れども最一度娑婆を見る氣あらず乃公と一所此牢を破るか不享と云やア命のねエぞ、と云
れて小盗人等の白藏の勇相よ恐れてへエ破り升くと爰に一同心を合せ牢を破る事よなり
ましたが其破牢よ付て工風を白藏が致ます一段のあまり長たらしく相成升から後よ御開よ
入ます

第六回

扱引繼いで御開よ達ます八呎鳥の九兵衛の藤藏の土浦へ出立致ます道筋の前橋と聞て踏違
と申す別路に待うけ藤藏の後より飛掛つてもものをも云いず切倒し苦しむ所を又一ト刀脇腹
へ突通せば其まゝ息の絶えたる様子をを見て藤藏の衣服で血を拭ひ靴よ納め旅費が有るかど
懐中へ手を差入れ探り見るよ小包の手よ障り升から引出して見升ると臘色靴で金の丸龍の
出し目貫で結構な短刀あれは是の金目の品物と懐中へ入れ猶懐中を探して居り升所へ誰と
い知らず此方へ人の來る様子に驚き慌て峯村の方へ逃去りました跡へ來ました恒川半三
郎藤藏の忘れて行きました火打袋を持ち提燈を照し早足で此所よ到るとズルリツと滑る血の

跡見ると無慘や藤藏の何者の仕業とも知らず斬殺されて居り升から恒川の驚き憫れ様子を
 見る懐中物も有りませんから物取りの仕業と心得どつて返し坂よ此由を咄し升るとね
 坂のマア飛だ事で有りませした何したら宜う御座イませうと口よ云へど腹中でい首尾能く
 いつたと歡んで居ましたが恒川は早速届ける所へ届け出て檢使も濟み死骸を引取り村方の
 寺院野邊送りも濟せましたが有りる産所で此事を聞き便り思ふ藤藏の殺されました
 を歎き餘り愁傷致しました故か血が逆り氣色が悪くなりませしたから半三郎の心配を致して
 居り升と九兵衛の此様子を聞き自分の手下同様の彌太郎七藏と云ふ二人が峯村に小隠れを
 して居り升から九兵衛の半台羽は長脇差脚半甲懸草鞋のき振分の小包を擔け土間口から
 九七藏の内か 七イヤア兄さん誠は御無沙汰をして濟ねへ 九彌太も居るか 彌
 マア此座へ御上んさせエアレサ土足の儘で構いねエのサ疊もねエ此始末サ 七彌太茶を
 進ねエか、と猿江りで持へた煙脚盆を出す 彌信州の相の川で危ない所を兄さんの御蔭
 で助かつて夫から二人ツキが廻り彼方此方漂泊して居やしたのサ 九手前ツちやア此節の
 プヘア儲かると見えるな 七ナニ儲かるものか是が暑い時分から伊香保へ湯治に行く客
 を乗せて行ヤア随分仕事も有が二人が身隠の爲よ人行のねエ時又駕擔だから今の仕事もね
 エのさ 九何だ爰よ二十兩儲かる仕事有るが己の腹へ乗つて遣つて見る氣のねエか

彌ナニ二十兩だとヘソイツの難有へが兄さんよの是迄種々御座よ成つて居るから働いた
 つて御禮よの及ばねエが下さるならお賃へ申たへのサ 九コウ水澤よ上州屋と云ふ温
 屋が有るだらう當家の女房の坂と云つて前よ玉村よ居る時分からの買馴みの娼妓だが
 七さうか亭主の確か諸事老ねへ正直さうある爺さんだつたが此頃踏違で殺されたとねエ
 九夫よ就てあの女を己の女房よして高取をするよの金が費から金策をしてエと思つて居
 る所めの上州屋の内よ厄介になつて居る夫婦連の客があるのだがりの御新造の滅法美女だ
 からは是を玉遣つて三百兩計の仕事有るんだが手前達を眞事目御籠屋よ仕立其亭主を
 誘き出し途中で殺して呉りやア宜んだ 七兄イの又大きな事を考へるねエ夫じやア二十
 兩位の價のあらア一体其亭主の何者だサ 九士浦の浪人者だ 七武士かへそいつア
 往ねエ武士と云ふ奴の些とも由断をしねエからねエ去年九月沓掛の原で武士を遣うと思ふ
 と其武士が刀を駕籠よ立懸る時柄を握つて居てイヤと云へば抜く丁簡だから由断がねへ
 ので手出しも出来ず惨めな逢つたが其武士の些どの劔術も出来るかへ 九劔術の柳生流
 の名人で師匠よあつても恥しくねへ腕めへだとも 七そりやア無駄だ何して勝ものか
 九そこが仕事だの御新造が産後で氣色が悪いのだ所で己が行て伊香保の小暮金太夫の
 家に江戸から好醫師が来て居ると誰くらか其亭主を誘き出し手前達の駕籠よ乗せ黒澤の

窪み邊で手前達が油断を見て息杖をする時、後から横ス腹へッスリ遣りヤア山駕だから
 蒲團を敷て寝て居れば容易に起る事の出来ねへから何者手者でも大丈夫だよ 七「こいつ
 ア甘く考へたねへ成程駕蒲團を重ね倚係つて居眠りでもして居る所をやりや後、眼がねへ
 から手間非問入らずに擔ぎながら其武士の胴腹へエイト遣んだが彌太郎の腕よ力が有るから
 手前やれ。彌「よし、私たちが遣やすとも 七「夫じやア己の先棒よなつて居るから、
 こりやア後棒の方がい、か知らん自分の後が見えねエ所で武士だから一本位じやア死ぬ氣
 遣ひのねへから後へ手廻らねへ所で苦し間切前居る私達の横ッ腹へくつと遣られ
 ちやア大變だから矢張後棒よあるうよ 九「臆病な奴だなア息杖をする時よやアお互よ肩
 を抜きながら向ひ合せよあるだろうから後から彌太が一本突込んで疲む所を前からも七藏
 其方も一本突込み力よ任せてゑぐり殺せば譯いねへのサ 彌「兄さんううするよや肝心の
 刀を一本貸して御呉なせへ 九「好刀のねへが是を持っていけ、と九兵衛の懐中より取出し
 一本貸して遣り升と側から七藏 七「ナイ、兄さん私も一本貸して呉なせへ 九「
 已だつて二本も三本も有りやアしねへが大切に持て行け」と藤藏を殺して取つたる短
 刀を渡す七藏受取り 七「大層びか／＼して芝居のお姫様でも持さうお刀首だねエ 九「
 うんから女房子のある堅氣の駕やの積りよなつて行くんだよ」と喋り合せて支度をさせ上

州屋の土間より這入り升と兼て打合せのある事故お坂の飛出して 坂「チャ兄いさん誠よ
 能御出あすつた子 九「已ア高崎で聞けば當家の藤藏殿が殺されたとさア氣の毒な事であ
 つた 坂「本當よまア私しも夢の様を心持でまだ其處よ温飩を打て居るやうよ思はれて死
 だ心持よのありません能來てお呉だねエオヤ彌太さん七さん苦勞さまマア此方へお坐
 んささいよ」と云ふからお坂は奥へ参りまして 坂「モシ旦那様あまたよのまだ染々ど汚
 晒の致ませんが有りやア私の實の兄で坐イ升が此間中信州の方へ参つて居り此回高崎へ
 歸つてから藤藏の殺された事を聞見舞よ來て呉ました貴所一寸お逢あすつて下さいまし
 恒川「ナ、左様か 九「是の旦那様御初よ御目よ係りました私の信濃屋九兵衛と申不調法
 者では見知り置れて下さいまし不思議御縁で獨りの妹を藤藏どんよ縁付ましたが私ちの
 藤藏より年の下でも兄とあり藤藏どんは分別のある人で汚座イ升から何事も力よ思つて居
 りましたが此間踏違で殺されたと承はり實よ片腕でも扱れたやうよ落膽致しました藤藏の
 旦那様よの御厄介よあつた者だから連添女房にも遣張御主人此後とも何分お坂も藤藏同様
 よ力よあつて汚遣んをすつて下さいまし 恒川「ハイ私の恒川半三郎と申不骨の浪士是迄
 お坂よ兄のあると云ふ咄しもあかつたが實の兄かへ定めて落膽した事であらう 九「ハイ
 御同前よ御力落して汚座イませう夫よ承りりますすりやア去頃汚産があつたらうでお目出度



恒 駕
川 嘯
要 受
り け
て
す



御ぜいやすオヤオヤの嬢様誠にお美しう可愛らしい事今は笑ひ成さるやうな事つたら如何で座いませうチ御産婦様の御機嫌能御血心も御座いませんか 恒川「何も氣色が悪くつて困るよ 九「夫の御心配な事で御乳でも出なく成ると往ませんか 御醫師も御見せ成さいましたか 恒川「何も好醫者がないので困つて居るよ 九「丁度宜しう御座い升伊香保の小暮金太夫の内下谷の三枚橋の川島良悦といふ先生が来てお出なせエ升が頼も往べどんな貧乏人でも見て下さる貴公の貧乏人でないが頼みよ行てやらんすつたら何ですエ 恒川「銘人の聞こへある川島が来て居るか夫の幸だが爰からの伊香保迄どの位有るだらうのふ 九「へい左様サ一里九丁と申升が何近へ路で御座い升から分りありません私ちが乗て来た駕屋が能路を知つて居升からあの駕籠へ乗て御迎へに入來しやい向ふの老人だから直又其駕よのせて御歸りの御徒歩で御歸宅もありやア御都合が宜じやア御座いませんか 恒川「夫の辱けさいが大層又刻限が遅るが今から往ても暮ない内は歸れるだらうか 九「直又入來しやれバ大丈夫で御座い升 恒川「誠に御心切又駕迄下すつて千萬忝あいらゑ一寸醫師を頼み伊香保迄参つてくるから淋しからうが少しの間を待て御呉より 九「ア、申旦那様今日の大層刻限も遅くなりまして殊山道で有り升から日が暮ると狼が目るなぞと云升から私に誠にお案事申升から何か明日は遊して下さいまし 恒川「案事

のい尤だが殊に歸りの大勢だから心配よの及ぬ事さ 九「モシ御新造様御心配のあなませんよ火繩を振て行ば大丈夫で御座い升うこらの駕屋が馴て居るから案事成さる事御座いません 九「且那樣達て御出遊ばすなら母が片身に遺して貰ました此清龍の御神鏡を体よ付て居り升と何様か災難も遭升との事御邪間でも御持をさつて下さいまし 恒川「お前の信心者だねエ案じるなら持て行ませうよ」と支度を致升うち駕を椽先まで付升から 九「夫じやア何分頼むよ 坂「彌太さん七さん氣を付けてあげてお呉よ 彌「モシ旦那何か其大小を置て行て下さる譯よの参りませんか山路でござへ升から荷よあつていけやせんから 恒川「コレハ置て行事の出來んよ侍たる者が山道を越る時猶鯉口を切て乗る位奇物だ」と云れ二々人の駕屋の目と目を見合せたりやア御香だと思つたが色も見せず 二人「左様さら行て参り升、と是からギシ／＼擔出し水澤の觀音山を後よあし段々まただれ上り山路を下りての亦登り亦下り升と黒澤の大窪みへ掛り兼て合圖の息杖を致折の駕の中よ恒川が好意持さうさうとくして居る様子彌太郎の懐より刀首の鞘を拂夕日にきらめく短刀を逆手よ持半三郎の後より横腹を突ふと狼ひを付ましたが何如相成升が鳥渡一息のきまして申上り

儲は噺二ツも別まして前申上ました土浦の浮半内にて白藏草三郎の牢破りの所で座イ升が三月廿五日大嵐の夜で座イ升から時刻のよしと白藏の牢名主の京五郎を打殺し合牢の囚人共一ツも寄て小聲も成り手前ツちやア外も仕様がねへから自分ちが支度をするうちけたばの下土臺石の水で寛で居る所を獄板で氣永も音のしねへ様へ外へ突き出せ石が山りやア穴があくから其穴を大きく掘て其處から出るんだから奮かり遣れ」と睨み付られ囚人の震へながら是から大勢掛つて石を漸々突出しましたが斯る時にも抜目みさ白藏の京五郎の懐中を探り八十兩の金子を奪ひ取腰も巻付け 白「サア、是から皆んなの所へ差入物よ来た手拭や細物を茲へ出せ、と取集め是を一ツ宛輪も結び繋合せ階子の様も拵まして小脇も抱へ 白「石を突出したか 囚人「へいやつと突出しやした 白「出たら其處から手前達先へ潜り出 囚人「こんち些小穴から出られましねエ 白「手前の身体が大きいから我慢して潜り出しやア跡のものが樂よ出られら我慢して潜附ろ」と云れ一人が四ツん跋よ這て出様とすると泥水がガット鼻へ突入しましたが我慢して漸く向ふへ潜り出ましたから續て白藏草三郎も潜り出しあたり寂然と致雨の盆々降砂利を掴で打付る斗りの大風で御座イ升故白藏の牛窪無宿の八藏といふ囚人の手を取て 白「手前此方へ来て肩を借と白藏が肩車も乗て作矢來の大太丸も細物も繋し細階子を懸草三郎の手を取て登りつめ丸太よ

手を懸け草三と共一一生懸命も飛下りて外の囚人も構はず無暗も逃出し外堀の淵へ近寄りました堀の水の渦を巻浪ざり立てドラ〜と石垣も打付凄じき水勢あれば何よも斯よも向ふへ渡り越事が出来ません 白「草三此堀へ飛込んで水成り泳で御役所の側の水門を潜り抜て首尾能出抜れば櫻橋の下へ出られるから夫から潜手から上つて小田の没間山を裏通しよ笠間へをつ走る了簡だが何だ 草三「自分の泳を知らぬから氷へ這入ることが出来ねへヨ 白「エ、仕様がねへ野郎だナア 草三「うんあら跡へ歸らうか 白「馬鹿な事を云ふ夫じやア斯仕様」と云ながら手拭もて獄板を二枚縛合せ 白「コレ草三此板も捕つて一生懸命も泳で向ふの水門まで泳ぎ付ろ」と云れても泳ぎを知ぬ草三郎獄板を抱へ迷々して居向ふから見廻りの役人が提灯を合羽の間も下ゲ 役人「火の廻り〜」と云聲を聞付雨人の艸原の中も身を潜め居ると役人の段々近寄 役人「本留も役と云ながら向も此大雨も廻らねへでもいゝ晩だが亦廻らねへのが御願に知れると退職から無據さじに斯違て廻つて居るのだが難澁至極だナア火の廻り〜」と云ながら片邊を見ると何か向ふも潜伏して居る様子も薄氣味悪く震へ聲を張上て 役人「其處も居るの何だ」と云れて恟と仕たが最叶のんと白藏が獄板をおツ取り物をも云ず突然も役人の引屈の邊を撲ると不意を打れて役人のあつと云聲諸共も前も堀へ逆節斗り打てドンぶり落入りがバ〜と流れる様子

よ「サア此間も早く」と白藏の草三の手を取り無理に漲る氷の中へ飛込抜手を切つて泳ぎ行草三郎の泳ぎを知りませんから一生懸命浮つ沈みつ稍どの事で水門際迄泳ぎ付け水門よ抱り付アツトヨリよ息をつき 草三「ア、苦しい兄イ自分最嫌だよこんな苦しい思ひをした事いなきい寧ろ歸つて首を切られる方がましだよ 白「大丈夫だよ此水門を潜り直だ静よしなよ役所が近けエヤ」と云ふがら脇を見ると最前の夜廻りの役人が水門の石垣よ抱り付水を吹きかから 役人「ア、驚ひた何も變な晩だ斯いふ強雨の時ば廻り出来ねへ何物かむくくして居たから何だと云と突然又足を止めて投げ込だが何でも古い堀だから頼が人間の形よ化て来たよ違ひなきい驚ひた」と獨り言を云て居り升と此所よ白藏草三がかたまつて居るを見て 役人「何だへ其處よ居るの又化物ではないか」と恠々よ聲を懸られ白藏がそつと役人の側へ泳ぎ寄襟首を取てグウート水の中へ突込此間も早く二人の潜々水門を潜り抜け櫻橋から這上り濱手の方へ逃行すると跡から大層提灯を持って追懸來る様子よ此方の二人の夫は驚き田畑畔路の嫌ひかく小田の淺間山の根方迄後をも見ずよ逃て参りました此時よ夜いしらしく明ヶ放れましたから二人の無暗よ葛蔓を獄板よて拂ひ除小田山の洞穴よ駈込ましてやうくく息をつき段々よ穴の奥へ下り升と少し小廣ひ所がわりました山の上の天然の岩穴が有りましてが朝旭の差込升ので顔見合せ 草三兄イこん

所ろへ潜入蛇でも居ると大變だよ 白「心配するおよ十年斗り前よ手下の五六十人も有る北條彦五郎といふ盗人の隠れ家だつたが露顯して土浦様から御取方が來て捕縛と成て今じやア明穴よ夫見ろ其處よ二三でふ疊が腐て居たり此方よ土窟が有だらうサ茲よ隠れて居りやア知れる氣遣ひいあから少し煩熱の覺る内隠れて居やうと三日斗り立と草三郎が 草三「兄イヤ何も喰ねエンだから腹が減て溜らねへやア 自我慢しる手前よ母親よ逢たいと云つて出て來たんじやアねエか親の爲よ二十一日も斷食する者もあらア三日四日喰ずよ居たつて死よやアしねよ 草三「斷食と思やアさうだけれどさうの思ひれやアまねやナ腹が減て溜ねエや金が有るのよ物が食ねエと云のよ遺張天罰だらう 白「出りやア直に御用だ 草三「酒屋のかへ 白「おアニ紺房の十手が降よ 草三「何が降とエ 白「捕縛られて引れるヨだから少しの煩熱の覺る内隠れて居るだ一と云ましたが白藏も空腹故到底耐へ兼ねる夜密と穴を抜け出しての百姓家の物にへ這入り御や櫻海老の紙の袋よ入て有るを盗んだり間合のい、時の米代や鱈魚節を盗出し徳利へ清水を谷より汲んで参り生米を噛んで水を呑三月廿五日より五月廿七日まで忍んで居ましたが今の最瘦衰へ腮骨高く脚の窪み二人共憔悴して仕舞ました 草三「兄イヤ腹が減て仕様がねエ 白「己も疲たが一昨日の晩段々様子を見れば大ききよ手配も緩た様子だが若抜出してから御用と來た時長物があつく

ちやア往ねへから此筑波下の神郡村の名主石井文左衛門の刀を數多買て置のが道樂だから
 不斷床の間の刀懸けは幾本もかけてあるのを見たことがあるから彼家へ這入つて盗まうじ
 やアねエか 草三「また泥坊か自分の嫌だよ泥坊をするのの大嫌だ 白「そりやア盗人の
 仕ねエでも手前の劍術が上手だから外は見張て居て若や人が來たら切拂つて呉れぱい、の
 だから己が這入て盗むから只一所は行て呉るよ」といやがる草三を無理に引連穴を出て破
 れた手拭で頬冠をし段々と神郡村迄参りましたが草三郎の氣が氣でいありません腹が滅た
 のを耐て遣て來たからひよろ／＼として足も地よつかぬ位で座イ升 草三「兄イヤア茲
 迄來ら猶腹が減た様だ人が來ても逃る事も出來ないから自分の中への這入ないよ」といふ
 間、白藏の生垣を破り中へ這入ふとすると片傍の小座敷の女の聲が致しますから跡へ下り
 て様子立聞升と老婆の聲よて 婆「オイお前の正眞は分ない事斗り云じやアないか死ん
 だ爹さんの借金の形よ來たんだから否も應もねエヤア十七や十八の小娘でいさし最二
 十を越して居る身じやアいか些たア跡先の考へも有さうな物だお前が餘り旦那の云事を聞
 ねエもんだから先刻も旦那が怒て内へ出なすつた已ア是から筑波町へ女郎買へ行があん
 ん女を寄きて妾どころか厄介物だ何を云てもツンケンして一ツ兼もしねエからおささど歸
 すから明日早く貸て遣た七十兩の金を返してサツ／＼と連て歸つて呉ると腹を立て御内の

男衆を二人連てお出なすつたよ夫よお前の常陸の御重役の久保田様の所へ妾よ行て傳坊と
 云子まで出來たのよ其後重役が切殺された所から傳坊を連て手振編笠で歸て來でいねエか
 自分のお前への義理のわる母親些といわいらの云事も聞てくても宜じやアねエか夫に去
 年の暮内へ來た信州の糸商人と云て泊た客で白藏と云奴は野合たのの私も知つて知らぬ振
 彼奴の大泥棒だよ其白藏は義理を立る積りかお前へ知るめエが彼奴の泥坊をして土浦へ
 護送たが此間半を破つて逃たもんだから人相書が廻つて殿しい兪議だよ今よ私の内へ白藏
 が來るよ遂ひあエと思やア倦去して居るのだアン者者の事い思ひ切て此方の旦那の云事を
 聞ナ 白「何と云ても夫斗りの否ですよ爰の眼のわるい御内義がア、遣て旦那に嫌れて
 藏の中へ押込られ其上よぶち打擲 此間も私しよ御新造さんがお前何か旦那の云事を聞て
 おくれ左様しさいと私しが撲たり叩れたりして困るからと被仰と私しや氣の毒でなりませ
 んよ義理としても爰の家を妾よいふられませんから何お所でも堅い翠公よ外へ遣おくんな
 さいよ 婆「堅氣の奉公で七十兩からの金を出す者があるものかよ正眞は意工地のさい女
 だよおいらさんぞ若い時江戸の淺草の茶見世よ出て居た時分よ旦那の十一人もあつたも
 んだ何如しても云事を聞かれねエかよ云事を聞なければ了簡がある」と云ながら捨り倒し
 拳を上けてニツ三ツ打叩く 白「そんなよ打あくつても宜じやアないか 婆「ハテ親の



芳春画

暗夜
風雨
二
囚
子
乘

云事を開ねエ娘だから當然よと亦打擲するを白藏ハ草三郎を小聲で呼 白「兼て半の中
 で咄た伊勢源のお里だ此家の妾よめれと婆が云のを自己は情を立ち袋よ打て居るんだが可
 愛さうだあア 草三「ウ、痴言どころじやアあいやナ」白藏ハアノ婆ア助けてい置ねエ殺
 して仕舞との思ひましたが大物がありませんから様の下から士を平す鑊を探し出し密と様
 側よ飛上りズツと中よ這入突然婆アの鬘を掴と播がペロリ取ましたが取る譯で御座イ升油
 で附てある鬘白藏焦つて捻倒し彼鑊を逆手よ持腕も通れと婆の喉へ突込み升からお里ハ驚
 き逃出しますから 白「お里は白藏だよ」と云れてお里ハ さと「エ、あれまア嫌だよ
 私やほんよ如何しやうかと思つたよ人相書が廻つて来たから茶じて居ましたのねエ 白
 「お前よ逢ひてエ斗りだよ さと「お前さん能マア達者で居ておくんあすつた正真よ私し
 やア神信心をして居たんですよ何所よ隠れておいでなすつたの 白「此間迄小田の洞穴山よ
 潜んで居たんだ さと「左様と知たなら逢よ行たものを 白「来たつて仕方ない洞穴だか
 らよお里や何んしろ腹が減つて耐ねへから飯を持って来て食して呉ねへ さと「アイ今直よ
 持て来ますよ」と臺所へ出て行跡よ 白「草やくく来ねエよ大丈夫だから 草三「自分
 ハ嫌だよ歩けねエヤア 白「飯を食せるから早く来ねエ 草三「ナニ飯だと左様か」と直
 に歡び勇み飛上つて参り升とお里が飯櫃の上へ膳を乗せて参り草三を見て驚き升を 白

お里や是ア和牢の草と云もんだサア飯を食ねエト是から二人ハ手抓よしあい斗りよ食ま
 して十分腹を拵へサアお里是から高飛をするのだから長物を二本無地の單物を二枚男帯を
 二本と幾計か路金を算段をしてくんねエ さと「アイトお里ハ立上り奥土藏の網戸とか
 タ〜と開て中よ入 里「申し新造さん分き旦那がお腹を立て出て出でなすつたが亦は
 歸りよあると刀物をば着替なさるから出して置度ハ座イ升から簞笥の鑊をば借なすつて
 下さいナ 妻春「ア、此所よ有升から召を盡んで居てお呉夫よお前よ世話をして貰ひあ
 けられ私ハ此通りの俄音旦那の機嫌の好やうよ面倒を見てお呉よサア此所よ」ト鑊袋を
 渡せばお里ハ受取まして簞笥曳出しを開て手招をするから白藏草三土藏の中へ入ましてこ
 そくと盗み出して無地の單物に若代銅金作りの長物を差て半合柄を上へ着て身支度を致
 し白藏ハ此家の金百二十兩を盗み懐に入れお里よ向ひ 白「お里やバアお前よ信州の方
 へ身を匿し少し熱類の覺るを待て江戸へ出てエと思ふが夫迄ハ已の姿ハ見せられねエから
 お前ハ江戸の根岸の伯母さんの所を便り已の出て行のを待て居な遊くも來年の三四月頃迄
 よ何よもして江戸へ出る積り又今夜我等が三里も逃延たと思ふ頃手前ハ表よ断出して大
 聲上げて泥坊が這入ておッ母さんを殺し衣類や大小を持て行たど怒鳴立て北條の家へ歸れ
 ば多人數出て騒いでモ三里も行た跡あらば己の身の上ハ大丈夫だ氣を利して遣て呉 さと

「夫じやア左様しますがどうせ親母が死で仕舞は北條の家へ建られぬいから直に江戸根岸の伯母さんの處へ行て待て居るから隠れ遂せて遅くも來年の三月迄は急度來ておくれ私しやお前の無事で通れておられるやうに神信心をして待て居り升よ」と云ひながら草三郎は向ひ「さうか白藏さんを頼申升よお前さんも浮遊者で左様なら」と余波「借滲座イ升が心焦故是から二人の手拭よてスット冠をして神郡村を立出て保木村から長束の小あげへ掛おだれは筑波下より大抜村に出中須村より洞下宿を横よ見て寺小原と云ふ小松原よ掛ますと此處の筑波と北條の別路で御座イ升が夜の白みか、り升と北條の道より三人連の旅人が孰れも菅の三度笠廻し合羽は長物を打込し合縞の脚半甲掛小包を振分よ擔し身輕の拵へ先よ立たる出振太りたる大體の人が早くも草三郎白藏の風体の怪きよ眼を附ケたも道理此方の二人の頰冠りをして居ても長い間の山籠りよ髷月代の森の如く生亂れ髪よて半合羽は長脇差を差あがら脚半甲掛もかく草鞋も穿ず素足でヒョコ、歩行て行怪き風体男「コレ若者おそこへ行二人を捕めエろ」と云れて跡ある二人の男體をふり立て二人「若エのチ、イ、若エの」と云れて此方の驚となし是ア爰らよ張込があつたかと逃出さうよも寐足よあつてあり升處へ聲を懸られ猶歩行おく成りましたからもう是迄と白藏の長脇差の柄へ手をかける折から跡より駈來る若者白藏が襟上を取て引戻す此三人の旅人の何

着で御座イ升が次回よ申上り

第八回

御退屈も願みず上り恒川半三郎の山駕よ揺れて水澤より伊香保よ參る足高道おだれを下りて向ふへ登り恒川の駕の中より彼方此方を見渡せば誠よ其日の長閑よして山さへ笑ふ寒野の道日はや西山よ傾き左手の遙と水澤の山續き南の方の一面よ赤城山の峯に霞て麗のみ見え遠山の見分りませんが近く男子山子持山の兩山が見え其間よ日光芦尾庚申山道向ふの白川の流れに夕日の輝々映る景色の實は圓朝の言葉よの言盡されませんが恒川半三郎の駕よ揺れ眼氣さしうととして參りましたが餘りの退屈で御座イ升から懷中より女房ありゑの渡したる彼の清嚴の神鏡を把出せば思はず寫る我面を熟々よ見て「恒川ハハア思ひ出せば去年の九月土浦を立出しより長らくの旅住居力よ思ふ藤藏の非業の最後亦其上女房ありゑが産後の惱種がの心勞致せしゆゑ我ながら衰へたる事かな」と余念もかく鏡を見て居り升うち早黒澤の凹みまで參り升とオンと息杖を致し兼て巧んだ事で御座升から後椽の彌太郎が合口を抜出恒川の後より助を突ふと狙ひましたがあで恒川が殺されて仕舞へば神も佛も圓朝の御断もさひ事よ相成升が又正當のお方の自然と助かる事よ相成升もので何れも不動様を信心したからと云て忽地金加羅童子が飛出して鴛鴦を投て恒川を助け

ると云ふ例もあゝ事で御座イ升が今恒川が鏡を見て唐升と己を突殺入と振上る又映れく夕日の影キラリと鏡へ寫りましたからハツと驚き恒川が振向く途端に突出す刀早くもひらりと身を替し彌太郎の利腕把て捻上り此時又前からも力よ任て七藏が鋭く突込む一刀を符合ました神鏡もて先留にカチンと受留る途端又驚のどつさり下るを幸ひ飛下りて彌太郎が腕をば恒川肩へ懸け身を沈ませて投付ければ七藏の驚て、小山又逃登るを後ろから恒川が抜より早く一足飛込み袈裟懸又切付る名も負ふ恒川半三郎の柳生流の真儀を極めた腕まへおれば肩口より乳の下懸て切込みましたで七藏の悲鳴を擧て倒れました彌太郎も同じ起上つて騰登らんと拵れども中々急登られず迷々して居る處をバ恒川の怒り任せエイト斗りよ聲をかけ頭腦から背筋へかけ貫二ツ又割付ました恒川のホツと息をつきイヤハヤ此奴輩の怪しからん奴成程旅の油断のあらぬものだ何等の意恨があつて我も切付たかトント様子が見えぬ事と不審りつ、駕屋の粗服で血を拭ひ又紙を出し上拭ひを致して鞘を納め恒川「私の一休信心嫌ひで女房の鏡を拜んで居るのを見ての笑つた事があつたれど成程輕蔑ごとの出来んものだ若此神鏡がかりせば悪人輩の手も掛り空く此場死を遂げる所であつたが全く御嶽権現の我を助け給ふなるかア、釋有や」と砂を拂ひて鏡を懐に入れ傍よ捨てある刀首を手も取り上げてつくつく見れば先達て藤藏も持せて遣つた國光の刀首な

れバ恒川御思ふ様此短刀を所持する上の藤藏を殺害したるの此奴輩二人は相違なし心も掛し刀の在所の分れども解らぬ者のお坂の兄の九兵衛の事あり藤藏存生のうちお坂又兄のあゝる嘶もあければ又容貌も似もやらず兄弟と云ふに信じ難し是の切切九兵衛めが疾よりお坂と密通し九兵衛の陰謀で藤藏を殺せしよ相違なし其上又駕籠等と謀し合せ又我を殺害した其後女房りゑを女郎もでも賣ふとの陰謀違ひあいコリヤ斯しては居られんと刀首を懐中し人知れず死體を谷へ投げ込み急ぎ水澤の上州屋へ取返す此方のお坂が今頃の必ず殺された時分と思ふ所へ恒川が無事歸て来たのは驚き坂「オヤマア貴所の何して御歸り遊ばしされた 恒川「牛憎な事でノウ伊香保へ行たらバ小暮金太夫の所へ河島貞悦の不在でノウ仕方があゝから空しく立歸つたのサ 坂「オヤマア左様でしたかしてアノ駕屋の如何しましたエ 恒川「アレの澁川まで仕事があるからと云つて伊香保で別れたよ 坂「オヤソウ」と云素振の怪きを見て取り半三郎は倍のと思へども素知ぬ顔をして色も見せず奥へ通り入りるに向ひ密やか前始末を語りましたればありるの猶更心配の増し血が上り夫からドツと重き枕を付ましたからお坂九兵衛のありるの重き煩ふ三百兩の玉が死ぬと言ふ所で大よ心配を致し種々深切らしく介抱を致しましたが更には甲斐もなく次第く又衰へて参り升から半三郎も大ひよ心配し 恒川「りゑや藥の二番が出来たから氣を確り

八十九

と持て是をお香」と言れぬりぬり重き枕をやつと上げ半三郎の膝の上は兩手を突き漸々と首と上げて半三郎の顔を繁々とする見る眼一杯涙を浮べ虫の様な聲を出し　りる「旦那様誠に濟ませんが度病氣の死病で御座い升から迎も助かる事は出来ませんと諦めて居り升れど乳兒を残り良人は御難儀を懸るが黄泉の障り併私のない後ハ定めて後新造を御持参さいますようが費て此子が五ツか六ツは成さずる迄後妻を御入ささらぬ様は御無理な事で御坐升が御願ひ申升御不自由でも良人の御手でお育て遊ばして下さいませ又國許の親父への良人様から御様は御恩も送らず先立つ不孝の罪を御詫を承すつて下さいませしヨヨ旦那様」恒川泪だを拭ひながら　恒川「其様を狭い心で成せせんよ旅よて乳兒を死しお前又死なれての私が困るからうんちを私に心を出しての如何は譬死ふと思つても命懸の盡ぬうち死されるものでないよ心を丈夫に持たさい　りる「旦那様誠に恐入ますが此世の別れは坊を抱して下さいませし體かき、ませんから何か私を貴所の膝の上へ抱起して歸終の身修めは坊を抱て死なう存しませと云つ、ハツ」と泣く妻の心を察して恒川も地へ舞てはらりと落ちる涙の顔は横よし　恒川「餘計な事をいふ言であいの抱たいなら抱して上げ様ア、これお坂や鳥渡来て手を貸してくれ　坂「ハイ」と氣軽く此座へ来りおるの後に廻り抱起す　恒川「ソんち急ますると體が痛むから静にして遣りな自己の體は皆掛り

九十九

を」と膝の上は病み勞たありを抱上げ前から赤子を抱せ升とありぬり今も死ぬ身でありますが流名の親子の愛情ゆる乳兒を抱上げ瘦たる頬を摺付けながら　りる「坊や私の死後ハ必ず婆さまに御世話焼せさい様は何ぞ達者よ成長してお呉よ坊や」と云聲も次第くは瘦て息遣ひも絶へなるは驚ひて急に赤子を抱下す内情ない哉グツと込上げる息と諸共は二十一才を一期として貞婦のありぬり其儘息と引取ました半三郎の驚き大方から歩途方よ暮ましたが仕方がありませんからありぬり死骸の村方の寺院へ野邊の送り濟せましたが九兵衛の落膽し是迄半三郎を人事にしたるもありぬり見當で其肝心金壘は死おれて見れば半三郎より用いから退出して仕舞ふと密に示し合せ九兵衛が遣つて参り　九「モシ旦那様誠は御愁傷事でございますませう乳兒を御残し御新造は先立れ無マア御困りかことで御座ませう　恒川「ハイ難有う段々厚御世話ありましたので野邊の送りの濟した跡々の所實は弱つたよ　九「ハイ御尤で御座へ升附まして申上げやすが藤藏の旦那の御厄介なつた事ですから何様も旦那の御世話に致したう御座へやすが此家は居らつしやつてヒヨツと旦那の御體は細でも付様な事があると死んだ藤藏へ對し私もお坂も濟ませんから誠に御氣の毒で御座へやすが出て行て下さいと云ふと何か愛敬がない様ですが何か早く御出立を願たいものでござへやす　恒川「ハイくお前の方で居ると云つても私ハ

百 長く居る氣のないから直も出立もするが聞かぬならん私に體は繩が付どの一體何云次

第だ 九「旦那へ一々御咄を申せば愛敬が毀れ升から御咄のしやせんが死んだ藤藏の位牌へ對し貴所の腰へ繩が付かねへ内へ追出す様だが立エお貸て申てへ一々申すの面倒だからマア云升めへ 恒川「面倒でも宜しい何云ふ譯か其次第を聞たいナ 九「イエ申されませ

ん 恒川「申さんければ何時迄も此家の動きません武士たる者の身は繩の掛るの此上も赤い耻辱であるぞ何云ふ次第だか夫を申せ 九「旦那へソッから私が云やすよイヤサ云なけりやアならぬへ 恒川「アイ聞ませう 九「モッ旦那へ生空ア遣つちやアいけぬへよお前

さんは此間彌太郎と七藏と云ふ私の子分二人の駕屋は何處で別れたのですへ 恒川「あれは伊香保で別れたのだと申よ 九「旦那へ空ッ寢てのいけぬへよ私がアノ明日澤の窪を通り掛ると流の中よ二人の子分が血だらけなつて切殺されて居から私やア驚き可愛さう

赤事だと思ひ跡片付のして遣つたがありやア云のすと澤前さんが殺したと違ひぬへやア 恒川「兩人の此半三郎が切捨てた違ひぬい全く切ましたよ」と云へバ九兵衛の狂り立 九「全く切ましたどの何の事だ胡蘿蔔や牛房じやアあるめへし譬へ武士でも人間を無暗と切られて掛るものか主人の權を振つて私等を見縫つて澤馬鹿なされちやア此儘よやア濟されぬへ 恒川「切たが何致した 九「ハテ云ずと表向よするのさ私だつても子分の可愛もの

だ彼奴二人の女房や子を跡へ殘し殺されたから私も氣の毒で堪らぬへが義理を思つて堪へておたが左様ふて腐れを云ひささるなら仕方がねへ表向よするから恨じやアいけぬへよ 恒川「勿言此方から表向よするぞ左様申募らバ云ひ聞して呉ん過る日黒澤の窪よ於て兩人

の者不意よ白刀を持つて我を突撃よいたさんとあす故手前止を得ず兩人を切捨危き所を助かり跡よて見れば七藏が死骸の側よ是なる刀首の在し如何ある事だ此國光の短刀の去ル

十八日十浦表へ藤藏よ証據の爲よ持せて遣りし刀首あり然るよ藤藏の途中よ於てあの如く非業赤死と卒しのみならず此刀首迄奪ひ取りし事なれば此短刀を所持する上の藤藏を殺し

たる曲者の其方の子分兩人よ極まつたりサア親分子分よ有からの知らんどの云いせんぞサア何た」と云はれて流石の悪黨九兵衛も憐れとして面色變り息詰り 九「へい夫の私やア知

らねへやア 恒川「勿言唯知らんと申て濟かへ只今何と申た子分だから子の様よ可愛と申たらうがナ手前も存じて居るよ違ひない眞直よ白狀致せ 九「私やア知らないよナア坂

坂「どうもねエ其刀首の何處かで借たのか知らん何して持て居たかねへどうもねエどうも 九「何様したつて私やア知ませんへい知ませんわナへい存ませんよ 恒川「只知らん

で宜しいか手前も此間より申聞けようと思つたが其方達の腰よ繩が付くのも氣の毒と思へへこそ何事も旅の事佛よ免じて穩便に致し居たが又藤藏の殺され様も甚だ不審く驚と實



否を調べあへ手前達の首は係る大事殊は拙者が隠藏を殺したる敵を取て遣りしも同様あれ
 弟の仇亭主の敵を討て下され千萬 忝いと一言位の禮も有べき事を暴立表向よして
 拙者は繩を懸様どの何事だ此方より表向よりれへ訴へ様か何だ」と言れて二人の震々し
 ながら兎角の返事も急よの出す 九「誠まどうも些とも存じませんで 坂「本統よマア左
 様どの知りませんで詰らない事を申上げて恐入り升亭主の敵を討て下すつて難有ふ御ざい
 升お前さんも能御禮をお謂よ 九「へい誠ま難有ふ御せへ升 恒川「禮を申お許して遣
 すゆるすと云ふも乳兒のある身故かゝる汚れた家よの片時も居る譯よのいかん直様出立を
 致す 坂「御膳でも喰つて入来いまし 恒川「飲の喰ません毒も入れ兼ぬ可恐奴等だ」と
 云ひ放つて身支度を致し乳兒を懐に入れて出て行跡は九兵衛の思案投首 九「アノ國光を
 七藏は貸たの此方の誤り國光との知らあかつたがあの刀首の金よある代物殊は已を四まし
 やアがつた怨の仕返し生しちやア置れねへ」と種ヶ島の鉄砲を柏木村よて人よ借玉返あし
 て一目散は半三郎の跡を慕つて追懸けました實は憎むべき者で御座イ升

第九回

御咄替りまして白藏草三郎の兩人の神郡村より立出夜明ぬうちよ急ぎ寺子原まで参り升
 と後つよりチ、イくと追かけ来る三人連の旅人の信州相の川の又五郎と云ふ親分で御座

イ升大戸の喜三郎吾妻の清治が側よより 喜「オイ若男用が有るから待ねえと言ふのよ泡
 ア喰ちやアいかねへヨ相の川の親分がお前ツちア犯罪身の上だらうから力よなつて遣らふ
 と言ひあさるから待てと云ふ事ヨ 清「我輩やア八州でも何でもねへやアあ」と云ひれて
 白藏の兼て咄しよ聞て居ました相の川の又五郎と聞ひて歡び直は冠を物を取兩手を突き
 白「こりやア御見誤申ました相の川の親分様で御座へましたか兼て傍名前の存じて居まし
 た御初は御目よ掛ります親分どの知らず失禮致しました私に驛出しの若もので妙義無宿の
 白藏と申す者で座へますは見知り置れて浮心安く傍顧み申す二人共犯罪い身で座へ
 升から何分共は傍顧み申す 又「其許ツちの脱亡氣だらうがうんを月代髭だらけで行と
 直は探索が付きやすうれよ小貝川の渡去場よの見張が付て居やすから此處で夜の明ねへう
 ち姿を變へ私と一所へ行から助けて遣りやせう側よ居るのの供送でありやすか 白「へい
 此者の半の者で座へ升草三は挨拶をしねへか 草三「へい、私の沈坊でも何でもあ
 りません只此人と一所よぶらくと歩行て来たもので座います 又「コラ喜三や手前ち
 やア此人達の髭を剃て遣つてくんさ 喜「へいようござへやす」と柳行季の中より剃刀を
 把出し草の葉よ溜し露を取て顔をしめし是から松の木の下まで髭と月代を剃落せば 又「
 夫れでい、清治喜三二人ながら脚半草鞋を取て此人達よ遣れよ」といふよ三度笠よて面を

かくし是れから五人連よて信州相の川へ歸り暫らく救護借外出をするナと云付かりました
 扱其年も果て翌年三月迄外出をせず居ましたが白藏の頻にお里が戀しくあり草三郎は向
 ひ 白お前の朝母の江戸は居るよ違へねへから一所いかねへか」と草三郎を頻と頼ま
 すと元より母は途度斗りで牢破をする程の孝の草三郎白藏と共に竊し逃出し書伏れ
 て夜の歩行忍びくく日數も重なり漸く七月の下旬江戸へ着し根岸へ来てお里の居る家
 尋て見ると些いと葎子張の懸茶屋よて鰯の足や淪卵子菓子のおいち、みぢん棒、豆捻、狸
 の糞どといふ穢い名の駄菓子箱よ入て列べ側へよい塩煎餅の壺がありまして入り口よ
 人來鳥と書たる懸行燈を柱よかけお歌と云て今年十七ある娘か老母の手傳いをし頻と
 子を拵えて居る其脇にお里が針仕事をして居るを見懸け白藏の脚寄り手招きを仕ながら小
 聲にありて 白「オイお里さん」と言れ此方の今日来るか明日の便があるうかど付倦で
 居所へ白藏の聲よ驚き飛出して 里「オヤマア能来てお呉たつたねへ 白「我も迂闊よこ
 られる身でいねへがお前よ逢てへ斗での 里「サア私も何か首尾よく助つて逢れる時節を
 待て居ましたの伯母さんよいやりよ咄してあるから宜よ伯母さんあの毎度咄しよす
 る爹ッさんが北條で死去時泊り合せて種々世話よなつた信州の糸商人の白藏さんが尋ね
 てお出なすつたよ 婆「オヤマア能入来いしましたマア此處へどうぞアノ歌や鹽へ水を汲で

お出アノ夫からお茶を入れてお出サア、此方へ御出なさいませし 白「ハイ是の御初よ御
 目よ掛りませ私に信濃屋白藏と申不調法者で御座イ升どうか御見知り置れ升やう 婆「里
 の親父が死去しました時の丁度貴所さまがお泊り合で死水まで取て下さいましてそれよ多分
 の金子を下さいまして葬式も出ましたと承りましたが色々御心切よ難有存んじ升不調法者
 尋り申て居ましたが能御出向よ成ました御一所よ入来いしましたの御運さまで入来いませうか
 白「イエ是の私の従弟で草三郎と申未熟者で御座イ升 婆「オヤマア左様で御座イ升か
 ら若様は二人でおやくお商業かた、オ、左様能マア入来いしました御二人様ながらお奇
 麗でお優しさうあお方で入来いませうお歌や早く御茶を上げ」と云うち白藏の懐中より金子
 を取出し紙よ包み 白「お里何か買て来るんだがホンの土産の印だから伯母さんよ是を上
 てくんねへ 里「アイヨ伯母さん白藏さんがお金を二十兩上げるとサ 婆「オヤマアどう
 致さう本統よマア貴郎二十兩あんぞ飛でもあの中、戴き升る譯の御座イません 白「ア
 、申さうでもありませうが是から御厄介よなる積り宿屋へ行ても旅籠賃の拂いなければあ
 りません只と云譯のありません同泊るあらお前さんの所へ長く泊て貰いたいもので私達の
 年がいかねへから友達よ誘れて女郎買でもして持て来た金を遣て仕まつての國へ濟あいか
 ら此處よ御厄介よなつて居りやア伯母さんの前へ對ても遠慮がちよ成り自然遊びも出来あ

六百 い様になり升からどうぞ御内へ置いて下さいまし 婆「チ、御感心な事で御座います今この御若

方御利發で本統もマアこんを所でも宜しけりやア御遠慮なく居つしやいまし 白「御湯

さん御湯の遠ふ御座いますか 婆「此邊の宮様方の御宅が多く皆御内へ御湯が立もので

すから湯屋が出来ても繁昌致しませんよ坂本か金杉へでも往かければ御座いますせんハナ此

間も此先へ出来ましたが直焼半屋なつて仕舞ました 白「ソッるら五人這入程お坐風呂

を買て立やうじやアありませんか二分か三分も出しやア買へませう端たが三兩出て居るか

ら是で坐風呂を買て来て下さいましナ」と金儲を切ての氣前好サ大した商人と思ひヤレコ

レと世話を致し白藏と百里の北條も居る時分から密情の有事と伯母も推し知らぬ振で見

居ましたか産でもお歌の今年十七白藏と百里の撒痴を見て何時か色情の動く折から草三郎

の優き姿も想を焦しどうがなして云寄らんと草三郎も心切を盡す所から草三郎も木竹の身

でのありませんから忠義の人も此道の別段のもの見えお歌の情に引されて何時か割なき

契りを込ました扱生業もあく斯て八月の末まで此家も居る内は段々金が赤くなつて参りま

したからある日小雨が降りまして人通りもありませんから 白「ナイ草や手前金があるか

へ 草三「ありやアしさいよ 白「だつて少たア持て居たじやアねへか 草三「少たア有

たんだがお歌が黒緇子の丸帯がしめたい縮緬の半纏が着たいと云つたから買て遣つてしま

つた 白「お前の親孝行の堅い者だが女の味をしめると此情の父別だあアお歌さん斗り用

愛がつてゐるぜ 草三「そりやお前だつてお里さんよ色々お物を買て遣るから全仕事じや

アあいか 白「金がなくつちやア長く爰も居る事も出来ねへから何處へ盗人も押入うじや

アねへか」草三郎の驚き 草三「あよしよ私やア泥坊は大嫌いだ泥坊と聞と身の毛が栗立

ほど實も否だ 白「只あれと一ツ所も附着て行きやアい、んだ中へ這入ておれが仕事をす

るから手前の只側も居さへすりやア盗むのハ已がするから怖い事ねエヤナ只神妙よし

と一言云やア五百や六百兩の金を盗のハ譯のねへ左様すりやアお前も可愛お歌さんの側も

も居られるじやアねエか只おれも附着て来りやアい、のた」と云はれ否々あがら草三郎の

草三「夫ぢやア只附着て往く斗りだよ」ト是から二人の支度を致し其翌日七ツ下りから

用達しよ行と内を拵へ坂本から屏風坂へ出て車坂から御徒町へか、り新し橋を渡りよ係る

と向より細の小田原張燈を提たる供の者を連れ二人ながら黒の御羽織も呂色袴の大小紺足

袋雪駄穿跡から雙子揃の着物よて麻裏草履を穿ました男の御用聽と見へ白藏のこりやア八

丁堀の御定廻りよ違エねへど疵持跡へ下りて體を屈め一散も驅出ししましたから草三郎の

なんだか様子に分りませんが白藏の跡を慕て同じく驅だしました白藏の跡から大勢よて退

罪來る足音よ愈々慄て無闇に柳川町ある廣い路次へ飛込ましたが天命あるかお披露と思ひ

きや突當りの板塀故狼狽廻り急ぎ片邊の雪隠の中へ驅込みました草三も全じく雪隠へ這入り
 りましたが 草三「ナンダ兄イ出たくもねへの雪隠へ這入たのか解ねへ白藏の小聲もて
 白「静よしろエ 草三「あよか兄イ真中よ這入てぬの歎へ 白「騒々しいやア此畜生」
 と云ながら耳を立て様子を探ふ足音も止だ様子故ソツと雪隠から首を出し邊を見廻し
 白「草三饒舌ツちや困らアナ 草三「兄い橋を渡る時あんで驅出したんだ 白「半間あ奴
 だ手前アレを見ねへか 草三「何を 白「じれつてへナア小田原挑灯を提た黒の羽織も大
 小で紺足袋雪駄穿の二人の人の人云のずと知れた八丁堀の旦那衆も相違ねへから逃たんだお
 の通り追懸て来たらうじやねへか 草三「追懸て来たの徳利を下げた酒屋の小僧が犬を
 けしかけたもんだから犬が三疋に小僧と追懸て来たんだ 白「ソッあら人間じやねへのか
 草三「酒屋の御用だよ 白「左様か膽を潰した」と云ながらホツと息をつき路次の入口
 を見るとまだ人が立てぬるようよ見え升から側の板塀の三尺の戸樞が明いて居ましたから
 中へ這入ますと椽側も煙草を呑んで居りました人が驚き 亭主「ナンダへお前へ」と云
 ぬれ驚いたが白藏の自分の身形が旅人体故直も田舎者の假聲も成りて白面ツくれ 白「少
 々ものが承りたう御座りやす 亭主「何方を尋るんだか此裏に家いさいよ 白「ヒエ
 此お長屋よ六郎兵衛さんといふお方が御座り升かねへ 亭主「ないよ 白「りりやア難有

うぞんじ升 亭主「無闇も爰へ這入て来ちやアいけませんよ 白「ヒエ難有う御座りや
 す」と云ひながら内の様子を見渡す廣庭があり庭は向つて小奇麗な坐敷椽側續き長廊下
 よて見せまで見通し横手より藏の二マ戸前もある故大家と家内の様子を見極めて其夜更よ
 草三郎を連れて此家へ押入ます是が白藏天命で御座り升

第十回

借恒川半三郎の乳兒を抱き水澤を立出て高崎より新町へ出で本所宿へ掛り升と日ノトツナ
 リと暮ました故宿はづれの懸茶屋よて貰ひ乳を致し段々宿の中央迄参りますと雲が降出し
 ました路金が乏い故間の宿の木賃宿へでも泊らんと思ひ一里でも先へ踏出さんと小坂を
 登り本所宿の臺町へ差掛る折の益々降が強くなりましたから空屋の軒下よ這入雲を凌いで居
 りました恒川獨り熱々と思案致し升るも何も此乳兒を抱いて江戸へ参ればとて武家奉公
 を仕儀も足手廻ひの此小兒醫へも云ふ通り子を捨る數の有とも身を捨る數のあしと云
 へど始めて設けた嬰兒を是非ない事故人知れず此軒下へ捨て往んと思へども若此事が顯
 れれば捨子兇状の輕からずとの云へ連てり参られずと思案よ暮て左右を見れば雲が降ので
 往來の人も絶まして家々の雨戸を閉切赤城下風の寒風がピウ〜と膚を貫く斗りで御座り
 升から寂然として開きを幸ひ恒川の脊負ふて來たる柳行李の中より女房ありゑの縮緬の縫

天を取出し嬰兒よ着せ夫を柳行李の葢の中へ入れ空家の軒下よ拾置き往よ懸ると無心無識の嬰兒をれど父に別れを惜み升かオギア、と啼入ます故馳戻り又抱上ぐればハツマリと啼止よぞ、恒川「イヤハヤ無心の嬰兒で有るけれども誰に別れる事あれば自然と知つて啼事か免て呉れよ一所よ連れて行きたいけれどナ左様する時私身が立ぬゆる亦其方も生れて間もあく母よ別れ續いて父親よ捨られると手前のやうな運命もものが復と世間よ有る事か捨ずと事が濟なれば何様よしても育てやり度ナ里よやり度思へども里扶持を贈る手當もあく何分我身の立ぬ故りれでは非あく捨る事なれば成人の後私を捨たる親の情ないものじや親何國の人ある歎非道の者と思はふがよくく、な事故必ず恨んで呉るあよ何國の人よでも拾ひれて育て、くれた其人を實の親と心得て生長の後孝行を盡せよ」といへど無心の嬰兒あれば是が親子の恩愛で御座イ升故煩をめて抱き、て男泣よ泣て居ました又犬よでも咬殺されて、のちらんと思ひ返し抱上げて見、たもの、何も連れて参られず致し方がある事と泣ながら復柳行李の中へ入れ武藝よ卓れし恒川も心迷ふて躊躇ましたが歌よ「捨し親の嘸捨かねて捨ぬらん捨られし子の哀れ啼聲」實よ半三郎も捨棄ましたが斷念つて國光の刀首よ清瀧の神鏡を添て柳行李の中へ入れ 恒川「是の母の遺物の魔除の鏡又國光の刀首を入れて置いたから拾つた人もよもや乞食の捨子で有るまいと目を懸け育て

、呉る事も有らん免して呉ヨ」と云ふがら後をも見ずよ二十歩三り早足よ参る處へ跡の方から飛して來ました山駕で御座イ升今の人力車で御座イ升が其頃は山駕で桐油を深く懸け若い衆の此宿が泊りと云ふので意勢能馳て來る 客「ナイ若い衆く何處で赤ン坊が啼様だぜ 若「へイ啼升よ往來だから赤ン坊が啼譯で兩側よ家が有りやす夫婦者も有るから啼升ども 客「イヤサ外で啼て居る様だぜ 若「へイ啼升ども子守りや乳母が居りやすから外でも啼やすよ 客「イヤサ捨子じやアないかと云ふ事よ 若「成る程旦那那の眼が早いではあゝ耳が早いのだ桐油の中から開附たのだが成る程捨子が有り升と抱上げる 客「コラ、桐油を上げて早く抱せよあや、是のママ何も不思議だよ 若「拾い子などをして掛り合よでもなるといけませんぜ 客「オイ若い衆開る自己の此年よあつて子が無から何か子供が欲しいと信心して私が木曾の御嶽講よはいつて居るのだから此間月割の焼上げの時よ普寛様が下りよ成て詫宜よの我慕参りよ來る道よ捨子が有るから拾つて養育致せとの詫宜本所宿よ子が捨てあると云ふの實よ信心の徳神様の御授けだよ是の只の子でいふかい神様だよ 若「へエ神様と見へませんなど」柳行李の内を改め旦那申こんな物が有り升よと出したるの鏡と劔 客「夫だから只の子でないのだ此神鏡の八呎の御鏡此劔の艸薙の御劔だ」と歡びながら受納めて早く宿屋へと抱たる儘駕を速せ行を恒川陰で様子



子奇思

子奇思
八咫鳥



を見て睨び子が欲いとて神信心をする位も人あればよもや悪く育ての呉舞と安心の仕
 したが流石は此の宿の泊り兼て彼時半町斗り驛を抜けて桑畑の處迄参ると突然左右か
 ら飛出した板鼻の流太原市の若藏と言駕擔で胡麻の圃あるが八吹鳥に頼まれて恒川の來
 るのを此處に待伏て居たので二人共鎗てのをれど刃物を持って不意に切込刃の光り並大抵の
 者なれば斬られて仕舞處あれど流石は恒川半三郎柳生流の奥儀を極めた銘人なれば隙さず
 後へ飛下り一刀引抜き身構へて何者なるぞと云はれて此方の劍術も知らぬ奴等では座イ升
 から氣合は隠して後へ下ると最前より後の方の八吹鳥の九兵衛が鉄砲の火繩を吹々恒川
 半三郎の脊筋を狙つて居ることい流石の恒川も氣が附ず只前のみよ心を掛て居ました退
 ひても進んでも鉄砲弾丸は恒川の脊筋を打貫處あれど茲で恒川が砲殺されての圓朝のお嘸
 しもあくなり升るが如斯危き處へ幸ひ通り掛りましたの木の曾の御嶽の行者で名を一心と
 申す道心堅固のお方で講中の皆駕で参り升が行者の杖をつき先へ立て参ると其後より魚平
 と云先達が行して参り升と向ふ火繩を吹て狙つて居る者が有り亦一人の武士は二人惡
 者が打て蒐る様子中一人の武士は今危きと見るより一心行者は弾丸が着て若や先達の魚
 平も當つてのあらぬと思し召法力を以て印を結び「臨兵闘者皆陳列在前」と眞言を稱へあ
 ら精神を込て心念を致升と法力と云もの恐ろしいもので梁を馳て行鼠も切て落すと申事

が有るさうですが一心行者が御白洲で御調の時何云法力歟雲切の法と云つて雨を拂つて講
 中を通すなどの魔法で有らう又法力の力あれば白洲の砂利を奉行の面前で一つ處へ寄て見
 ると御奉行の仰は一心行者の畏り心念を致し白洲の砂利が山のやう一つ處へ寄たので益
 り疑ひを受賣僧坊主とて佃島は流刑よあつた位の一心行者で御座イ升から鉄砲位を打落す
 りあんでも御座イません今一心行者が心念を致し九兵衛へ感じましたか思はず鉄砲を抛り
 出す機みは引金がパチンとありましたから彈丸の原中へ飛行しました其響は二人の惡者の驚
 ひは桑畑の間へ逃げ込ました九兵衛も鉄砲を抛り出したまゝ、逃て行恒川も刃物を持つたな
 り俯伏して仕舞處へ一心行者はづか〜と半三郎の傍はらへ参り、行者は旅人御怪我のあい
 かお前さんの後鉄砲で狙てる者が居ましたから私が心念をしたら、隣村に惡者共の皆
 逃て仕舞たが先御怪我がなくつてよいノウ 恒川夫の誠は有難ふ御座る後飛道具を持
 て狙つて居た事トント心付んで御座イ升たが貴僧様の御通りがなれば脆も一命を落す處
 御通り掛り有つて危き所何共御禮の申さう様御座イません何か御尊名が承りとう御座イ
 升 行者「ナニ名を名乗様なりん者でない食切主同様なものだから構はず心配なく
 行なさい 魚平「貴君の仕合せものだ一心行者様がお心念をあすつたから鉄砲を落たので
 只のお方でいよいよ 恒川「一心行者様と兼て御名前の承り居る道心堅固のお方様で御

座イ升たか 行者「マア御怪我がなくつて自出度から氣を付て行かさいよ」と云われ恒川も心急旅すれば御別れ申升ると其宿を越合の宿泊り夫から段々日敷を重ね漸く三月四日又江戸表へ着しましたたが外へ便る處が御座いませんから御屋敷へ御出入の植木屋で根岸よ喜平次と云棟梁が有り升から其者を尋て参りました喜平次も心能く 喜「能く入来いませぬ御心配なく緩り居つしやいませ承れば貴殿の何云事で御國許を御立退り成りましたか御屋敷へ居らつしやる時分御最負預りましたから何様も御世話を致ませうから御心置なういつまでも居つしやつて下さいと信實云から恒川も慨び何分頼むと上屋敷へ知れぬ様よ此家へ厄介よ爲て居ましたたが恒川の性來器用で有り升から拵込をその手傳を致す牽牛花の手でも拵へて見様かど夏の始より後で聯は扇子の懸てあるを作り或井戸は釣瀬のある形を編み是へ牽牛花を懸せましたたがこれが牽牛花の手の上等の始りよて恒川手と云て其頃大層流行ましたと申升が斯て其年も越まして今恒川も本職あり喜平次も大きき歡び喜恐れ入りましたたナア貴殿の編み方別ですよ」と云はれて恒川も感み半分養生もある處から諸所の庭作りの手傳も参つて居ましたすると八月の中旬より新し櫓の取手屋と申呉服屋へ喜平次と共に底作五六日も参り升と雨が降ましたから三日程休み又恒川の印半天よ三尺帯花鈿を腰に狭んで取手屋へ参り蔭日向かく精出して拵込をして居る處へ此家

の乳母が赤ん坊を抱て参り 乳母「申植木屋さん誠に毎日御苦勞でがんすヨ 恒川「毎度の茶菓を戴きまして有難ふ存じ升 乳母「貴郎の恒川様だね 恒川「イニ中々左様な者では御座いませんヨ 乳母「アレサそんなあ隠さねエでもよかんベエ私等が初り貴郎が来た時何も能く似て居ると思つたけんと半天腹掛だアから真逆左様でいあんめへどをもつたが側へ寄つてよく見りやア何しても恒川様だよ 恒川「エ、マアお前の誰だへ貰の世を忍ぶ身の上だか誰だへ 乳母「ホラ常陸の土浦の片並木に久保田傳之進様と云御重役があつたつけへ賤婢うけへ居た中働きのあそよでがんすよ誠にマアどうも御久しぶりでかんすヨ 恒川「左様で有つたか 乳母「ソレあんでもハア能似てゐるから恒川様よ違へぬへと思つたけれども装束が違へやすから側へ寄つて面構を見れば貴郎だよ 恒川「面構といぞんざいなことを申さ 乳母「ア、いつも替りがよく貴郎がうれエ勤めて居る時分久保田様へ顔出しよ来ると女どもやアノお里と云は妾さんが大騒イやつて障子へ穴メドを明て覗やして恒川様ア本統よい、男だと思ふが惚たんマエじやアねエかへ貴郎の男が能から半天を着ても矢張似合だよ 恒川「お前の何して茲へ奉公よ来たのかへ 乳母「お前さんが御屋敷を出た跡で久保田傳之進様主従三人三年間の九月の節何の早出の時片並木で斬殺されて死去だよ夫から大騒よあつて久保田様の家の打潰れて仕様がねへから私も宿へ下るわけサ

恒川「何者が殺した事か未だも浮上でも浮手掛りのさひ事かノウ。乳母「夫がア貴郎の處
 るよ奉公して居た草三郎と云十八よなる浮草履取が殺したんだとよ呆るじやアねへか左様
 しては役所へ名乗て出ては奉行様に向ひ云ひ様か烈やアねへ私イ久保田主従三人を斬殺し
 て百五十兩の金を竊た泥坊だから早く私しの首を斬てくんせへと斯云つて出たとサ何と魂
 消べいじやアねへか」と云い恒川の心の中よ我人殺しの罪を身よ負ふて家臣草三が身代
 りよ名乗て出て吾を救掩の志ざし不便の者やと思ひながらも知らぬ振にて 恒川「ソウシ
 テ草三郎の最早死罪も行われたことであらうノ 乳母「死罪どのなんだかへ 恒川「モウ
 斬れて仕まつたかへ 乳母「ナンザとよ半を破つて何方逃たさサ 恒川「ナニ破半を致し
 たと歎 乳母「ナニサ左様じやアねへよ半を破つて逃たのさ去年の三月廿五日嵐の晩の
 ことサ夫から人相書で捜索ても未よ知ねへと聞やんした」と云い恒川の吾を救掩て名乗
 り出て呉し處の神妙されと半を破つて其身の罪を重しとの心得違ひお奴でいあると内心よ
 思ひ 恒川「未よ草三郎の行衛の知れぬかノウ 乳母「知んねへとよ貴様よねへマアお耻
 しい譯だがお嘲しいしなけりやア解んねへが久保田様の下役よ佐泉勘二郎と云奴が居たつ
 けねへ彼人と私が野合をしてサ 恒川「ハ、變態を云のだナ 乳母「夫も私の方から手へ
 出たのじやアねへのだよ佐泉が酔ばらつて女部屋よ偏入つて来て一所よ寐ぶらせると云か

ら戯事をしていけましねへ主人が有る身だから一所よ寐ぶる事へ戯だよと断つたら
 佐泉が私も一人ものだからお前を御新造よすると云もんだから私の様お者を御新造よして
 呉るとい有難てへこんだとい欺騙れやして身を任せたが運の盡よサア胎子をおつ姪やし
 て九月が丁度帯で何分奉公が出来やしねへから連て脱走て呉ると云たら私の様お者連て
 の逃亡られねへと云から此狸野郎め連て脱走おけりやア首イ釣つておつ死ぬと云たら魂消
 やアがつてりんなら連て逃亡へへと云譯で荷物を背負て早川様の板塀よ階子を懸て忍び返
 しの竹を取らふとすると其處貴郎の御家臣の草三郎殿が泥坊よ還入らふとして居たもんだ
 から佐泉が魂消やアがつて下へをりべへとすると階子から足を踏はずして忍び返しが喉へ
 づッ立てもつ死んだよ 恒川「フアン成程フアン 乳母「夫から貴郎の處の草三郎殿が中
 へ這入つて来て私が持て居た金を取つたから私も仕様がねへから國へ歸りやしたら親父も
 母親も大腹立で御武家様へ奉公させるのに行儀作法を覺へさせてへからだよ行儀も覺へね
 へで胎子を出かしておつ姪で歸る様お者家へい置ねへと云たのを村の衆が中へ這入り詭
 言をして呉たから漸く家よ居られる事よ成りやして産落しやした赤子の直よおつ死んだか
 ら乳が張て仕様がねへから何處かへ乳母奉公でも仕てへと思つて居ると茲の歌の下總の取
 手の出だが私も取手在の小山村でござへやすから其縁合で爰へ去守の三月から乳母奉公に

参りやしたのサ 恒川「左様か 乳母「御嬢様が貴郎を抱れてへとサ 恒川「是の愛らしい御子様でサア〜お抱申し升よサ、良御子様でサア〜一ツ御笑ひあさい可愛らしい御子様でノウウ 乳母「サア放尿が出るといかねへ此處へ御出なさいよアレ否と云てお前様に抱り付よ 恒川「御當家よ御子様の大勢のない様ですが御一人限かへ 乳母「是の拾ひッ子だとサ儲中仙道の本庄宿で拾った子だとよ」と云に恒川の心も驚き 恒川「ナニ武州の本庄宿だとへ 乳母「ッウサ不思議な譯で此家の旦那様が子供を欲いと云て神信心をしたら普寛様の夢の御告で本庄宿の驛頭は柳行李の中へ赤子を入鏡と脇差が有たから旦那様の此子の神様の御授け者だと大事よかけて育て、居やすよ」と聞て恒川ホット息をつきあがら 恒川「左様か」と云ささ黙々嬰兒を見れば見る程眼もと鼻筋あんで見忘れませうか現在娘のお貞親の手元は居るよりも商賣柄との云あがら結構な絹布ぐるみ夫は乳母の様赤澤山出る乳を香で居る仕合者くり〜肥満し事の實は親のなくとも子の育つと譬の通り斯私を抱り付の無心無識の乳兒でも自然と虫が知らずる事か 乳母「ナニ虫氣なんぞ此子に有りやアしませんよ少し鹽梅が悪くつても直醫者の三人位に呼やすよ」此時後の障子を開て出て来るの此家の亭主取手屋久兵衛 久「オイ植木屋さん毎日御苦勞ナことで 恒川「へい〜是れの日那様先達ての御心付を戴いて有難ふ存じ升 久「夫の私の娘だ

が好子でせうね私の當年四十三もあるが何しても子が無處から欲々と思ひ無理な様だが神頼み不思議の靈驗顯われて夢の御告は此子を拾ひとりしましたが其時側は清瀧と云神鏡が添て有りましたから段々聞てみますと普寛行者と云人が木曾の清瀧よて荒行の時龍壺よて授りし鏡だと云事の一心行者の御断しで聞きました私に神様の御授け子と云處で大事よ懸て育て升から御案事であいよイヤナニ其捨た親の能々を事が有ればこそと思ひ遣り手厚く致し育て居り升捨た親の身よなれば善よ附け悪よ附け忘る暇有り升まい若虫でも出やア仕舞か乳が足りないことのないかと案事するの総ての親の當然其處を察して親の身よなれば今の身の上あらどうしていも育られぬ事いから取返したいと云心持が有るあら野暮を事い云ん何時でも親の方へ返して遣つて宜しい育度心があるなら直よ渡前よ渡しイヤナニ渡前の方々を歩行から又捨た親よ逢たらば左様云て御呉あさいヌが當人が直接よ來惡ひなら人を以て咄しよ來ても宜と渡前からさう云て渡呉よ 恒川「御心切なる其言葉誠に忝さい事で其捨た親が承りましたあら實よどの位悦びませう親も捨たのあり升まいが捨た自分の身が立す據なく捨る次第で夫を拾あげて斯迄よして下さり升れば親の手許よ居るよりも結句仕合で御座イ升何か他人の子と思召さすは實子と思召し御目懸られて下さらば捨たる親も陰ながら何様よ歡ぶ事か知れません中々持まして只今よあり取返し度あぞ

と云様お心得違ひな事ハ聊か書物でも見たものハ決して無事で御座らふかと存升どうか御
 目を懸け御育下さいましトサ私が其親も成り代り御願ひ申上升誠有御事で御座イ升」と
 涙あがら頼む恒川主人ハ見てどり涙を拭い 久「誠も感心だ御前さんハ只の植木屋で
 ないよ隠してもいけあいの初て這入て来た時半天腹懸股引の野飾を拵へたが私が植木屋
 さん御苦勞と云たらお前ハ今日ハよい天氣で御座ると云たつけ士の言葉だから只の植
 木屋さんでないと思つたが今の一言で承知しました今夜私の處へ泊り此子を抱て寐あよ
 アレサ遠慮をせずは夫も何も上げる物ハあいが結城の本場があるから着物を仕立て上げ度
 が寸法が分らあいか非御宿りナ棟梁宜だらふ 棟「へい」久「ナンマ
 返事ナリじヤア分らあいアノねへ此植木屋さんを今夜私の處へ泊ても宜らふね 棟「へい
 く是ハ誠ハ有難ひ事で、久「夫も着物を上げ度が寸法が分らあいか泊度いのだどうだ
 へ御前ハい、傭工を持たねへ棟梁も泊度いが姉さんが待つて居るだらうからねへ 棟「へ
 イへ、あんな婆アが承り升れば石物を下さい升と貴殿ハ仕合せものでナニサ仕合
 る男で御坐イ升折角ア仰しやるものだから泊り遊ばせナニサ泊るが、ハニサエ旦那
 様ナニと（久兵衛ハ指差をして）アノ旦那様がサト」云紛す是から恒川を奥へ通し馳走を
 致まして夜も更ますから二階へ上げ床を敷て寐せましたが誠ハ氣詰りで寝付れせんする

と真夜中ハ小僧が潜足で上つて参り揺起しながら小聲で 小「申あのおねへ泥坊が抜刀で二
 人這入て和助どんや榮次郎どんを縛つて仕舞私ハ中間ハ寐て居たけれども小さいから見
 逃して置て泥坊が奥へ入つて刀で旦那様の頬邊を敲いて金を出せ金を出さないと斷て仕舞
 と云て居るよ何も大變だよ 恒川「イヤ夫ハシテ外ハ同類でもあるか 小「何だか知らな
 いが表ハ大勢待て居とサ 恒川「夫ハどこんだ處へ泊り合せたが併ハ恩を受た旦那様ハ怪
 我が有つてハ濟ないから私が泥坊を生捕りして呉やう 小「植木屋の癖ハ生意氣な事を云
 て向ハ刃物を持つて居るぜ 恒川「静な仕あよ」と云ながら坐傍を見廻すと見世二階の欄
 間ハ木太刀ハ半棒六尺棒の懸て有るのを見とめ早くも蛤及ハ削たる赤檜の木太刀をおつ取
 踏足よて階子を下り中圓の障子の透より内の様子を覗ひ觀ると中の眞闇壹人の強盜ハ威文
 句も嗣のすはらし様子面部を包みて眼斗り出し沈着はらひ反身もあつて威かけ 白「ヤイ
 神妙もしろシマバハ騒でも仕方がねへ是丈の家裏骨を張て困る身でもあるめへ手前の處の
 金を取て貧乏人ハ施して遣るのだモウ斯あつちやア仕方がねへ觀念て出して仕舞へ」と云
 る亦獨りの極優い泥坊で 草三「早く出してお仕舞あさい」と小聲で氣の毒さうよ云ハ恒
 川の家來草三郎で座イ升が今一人ハ妙義の白藏もて草三ハ余義無這入が久兵衛ハ顔々聲
 で 久「命斗りの助け下さいまし」と云折恒川ハがらりと障子を開かから飛込さ白藏



の腰骨を力任せよエイト打打れて白藏の倒れた儘起るもあらず不意に打れて草三郎の慌たしく庭へ驅下り堀を乗越んとすると松の枝よて冠し手拭がとれて表面とある所へ恒川追ひ来る最早耐らんと踏止まり一刀振下身構へますと恒川も全じく木太刀を取て中段よ身構へて居るうち椽側よ盜賊が出て置たる行燈の火影よ見合す顔と顔 草三「ヤア旦那の恒川「チ、手前ハ草三郎か」と小聲で云よ草三郎も顔曇りて 草三「おあつかしい旦那様實よ暫く」ととんだ處で挨拶を致しました恒川も家來どの云ながら恩ある者故此儘純よ懸られずどの云へ繩を懸かければ取手屋へ義理た、ず如何のせんと恒川が暫し思案よ暮れましたが是から何相成りますか次よ診聞よ入升

第十一回

借申續きました草三郎の妙義の白藏と共に取手屋方へ強盗よ押入ました白藏の打倒され草三も庭口まで追詰られまして主人とは知らず刃向ひましたか臆して切込ひ事が出来ずツリ、くど後へ下つて參るうち椽側の行燈の火影よ見合す顔と顔 恒川「草三郎で有るか草三「オヤ旦那様誠よ暫く 圓朝云「ナニ暫くもあいのもので御座イ升」恒川の飛込み草三郎の手首を逆よ取て捻り倒し直ぐ繩よ懸て引ふかどの思へども思ひ出せば三年跡久保田主從三人を我手よかけて殺害したる罪をば其身よ引受けて我身代りよ名乗り出しが其後土

浦の半を破つたと聞く左すれば今是を繩よ懸て引出せば必ず獄門の兇状は免れ難し家僕との云へ思ある草三郎何も我手で繩は懸られんと云つて繩よ懸ねば恩義を受けたる取手屋へ義理た、ず如何はせんと暫し思案よ暮て居ましたか屹度思慮を定め 恒川「各位でも此處へ御出あさる事ありませんと泥坊は刃物を持って居升から御出あさると怪我を致し升ぞ」と聲をかけました取手屋久兵衛の出る處でいな最早腰が抜けて居升草三郎の面目あき儘只潜々と泣て居升を 恒川「コレ草三郎心得違ふ奴め」と云聲も他へ漏さじとする半三郎の心遣ひ 草三「旦那様貴主は何處よ居つしやい升へ 恒川「左様な事聞くと耳のあい早く行早く」と三尺の扉を開て表へ突き出す主人の厚情草三郎の伏拜みつし路次を乗り越し一散よ逃出しました其暇よ小僧さんに見世二階から下りて見ると泥坊が打倒されて居升から先番頭若者の繩を解ましたから番頭の奥へ参り倒れし泥坊よ繩を懸けながら番「旦那先御怪我のなくつて御目出度御座イ升た 久「御前達も怪我があつて先宜つた、番「何處から還入ましたらう 久「ナンデモ庭から還入たよ違ひない植木屋さんが泥坊を打倒して下すつたから無事よ濟だのだから宜御禮を云なよ 番「誠よ有難ふ存じました植木屋さんよしての強人で御座イ升す 久「だから己が云あいな事ではない植木屋様だど云のよ 恒川「一人逃しましたん残念で私が庭石で滑りました間逃しました 久「一人逃し

ても一人生捕ば宜しいノウ榮次郎 榮「へい左様で御座イ升ヤイ此奴め頭を上る此畜生め」
 と云ふがら唇を握で引上げ見れば年齢二十四五にして色飽迄白く眼すしく眉毛濃して鼻
 筋とほり青髭の生た極好男なれバ 番「旦那様御覽あさいまし斯な虫も殺ささい様な面ア
 して此奴が泥坊とい誰も氣附ませぬエ 若「此畜生め抜刀で僕の鼻を叩やアがつたを毒
 命の一度は五六年も縮ませやアがつたあサア同類の何處へ逃たか夫を云へ」と云ながら木
 太刀を以て白藏を打ち 若「サア云ねへか此畜生め 白「アイタ」ア申私共の貧の盗み
 で據あい譯が有まして盗みを致ましたが向後吃度悪い心の止て堅氣より升から何卒御勘
 辨をなすつて下せへやし 番「嘘を吐先刻金を出さねへと殺すと云して刀で己の頬べたを
 叩きやアがつた此畜生め同類の何處へ逃たか夫を云へ 恆川「御腹の立の御光で御座イ
 升が左様洗ひ立をあすつては却て宜しく有升舞」と云のも聞かず同類の何處へ行たサア云
 へ」と木刀で縛し腕を逆と捻上れば白藏の堪へ兼怒れる聲を振立て 白「アイタ」ヤ
 イ何をしやアがるんだサア撲て殺せ手前の處へ盗人入ても何一葉取やアしねへのよ何
 で撲ちやアがるんだ 番「オヤ此奴盗人猛々しいどの手前の事だ 白「縛つたら早く突出
 して仕舞撲れても絞られても弱へ音を出して同類の名前を云様か木葉盗人じやアねへや此
 度捕縛こんだら再と娑婆を見る事の出来ねへ妙義無宿の白藏と云肩書のある盗人だ御上よ

の撲役人も擲く役人も有らア何をしやアがる手前ん處の物を何一葉取つたんじやアねへや
 早く突出して明日己が御仕置も成た時にやアいゝ氣味だと笑へ無法赤事をする獄門首で
 此家へ轉け込で汝輩の前席へ喰い付ぞ 久「オヤ此畜生劍呑な奴だ此様奴の喰付兼ません
 と震聲も成る 恆川「御腹も立ませうが私も御任せ下さいコレ貴様の悪口を申の何事だ手
 前の賊を働くを好事と心得て居るか亦悪い事と心得てするか 白「いゝ事だと思つてする
 奴のねへ如何馬鹿だつて悪い事知つて居るよ己も止度と思ふが何も止る事が出来ねへ
 のよ 恆川「夫見ろ悪い事知り止度と思つて止る事が出来あいの我心で心が自由よ
 あらんと云ものじやアないか然を汝が悪事を致せし故撲るゝも殺さるゝも當然で有るを人
 を恨む道理のあいぞよ向後ふつとりと悪事を止ると云事から御當家から繩付の出し度かい
 と思ふから旦那様願ひ裏口より逃して遣るから先程逃去たる同類の者も向後必ず悪心
 の止る若向後改心をせぬ時に見當り次第許さんと植木屋の半三郎と申者が左様申たと云
 へ、ヨ、ヨ 白「滅法界強ひ植木屋だナア此後悪心の止やすから何か逃してお呉あせへ 恆川
 「旦那様別に何も御取られあすつた譯でもあしお家から繩付を御出あさるも跡で御心持の
 能有りませんもので御座イ升から免して御遣なさる方が宜らうやうよ存升」と云へば久兵
 衛も尤もと思ひ直裏口を開て表へ突出す折柄御用聞が通行致し怪き奴と見認め直裏口を

六百十二

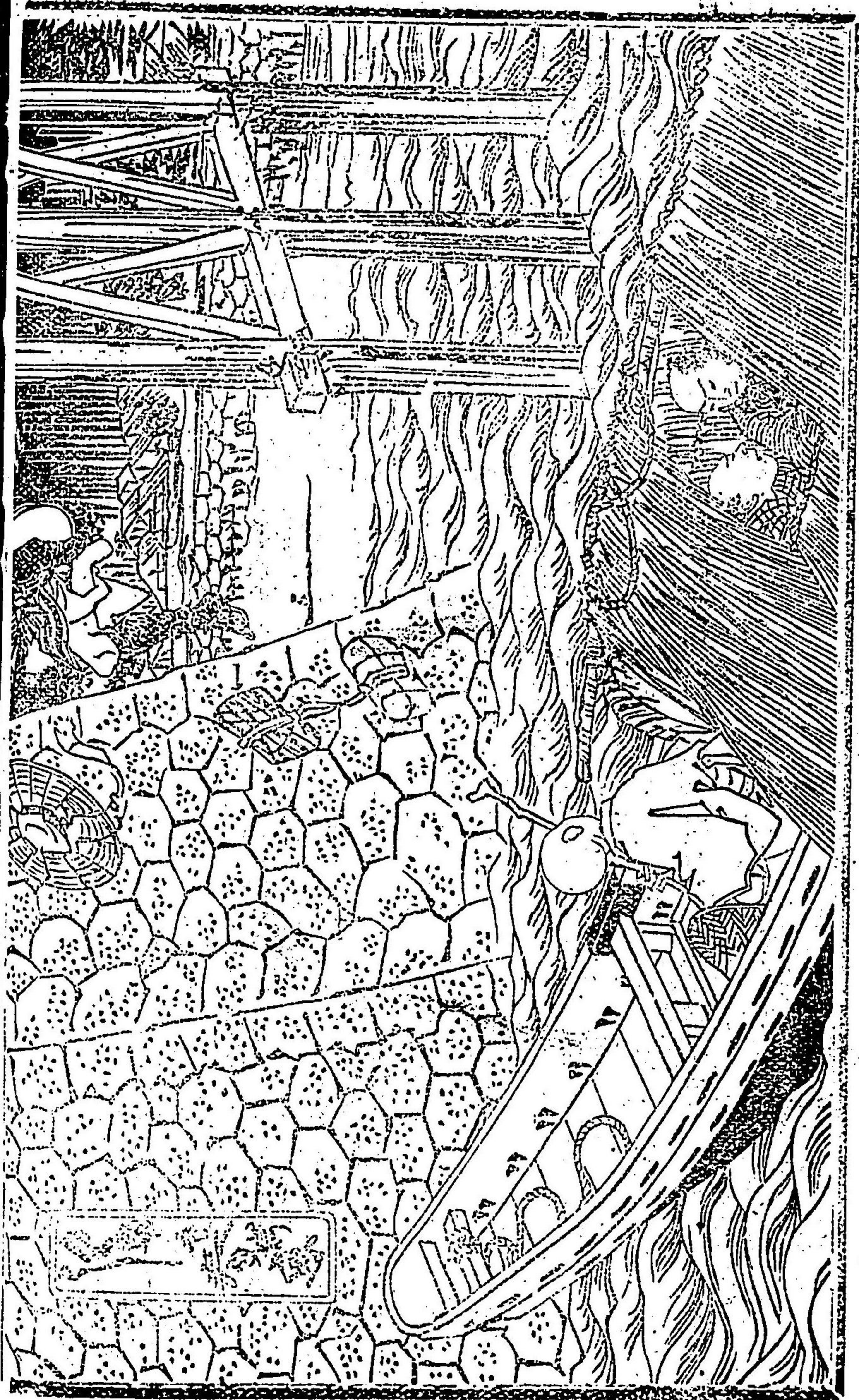
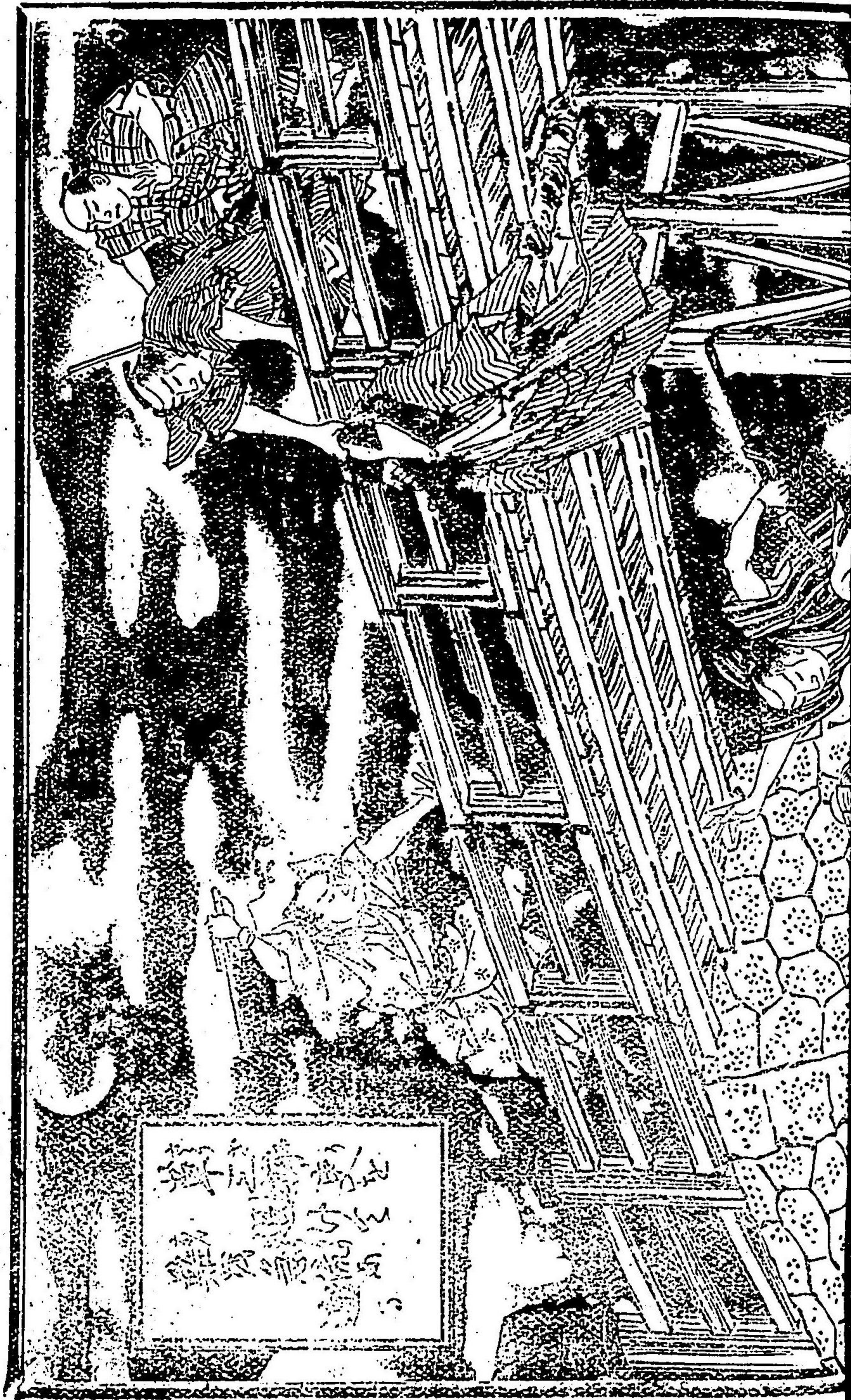
悪て南の御役宅へ送られましたたが亦草三郎の狼狽の体よて根岸の人來鳥の家へ逃歸り戸を叩き 草三「お歌さん早く此處を開てお呉よ」と云よお歌の草三郎の歸りを待兼て居た處へ草三郎の聲おれば兩戸を開 歌「大層通かつたねへ姉さんと今迄寝すも待て居たが餘り歸りが遅ひから泊つて来るかと愚つてありましたのに能御歸ん成つたねへ兄さんの何したの 草三「アノ兄イのね」と唱々云さして 草三「氷を一杯お呉 歌「マア青い顔をして何をあしたへ 草三「上野の廣小路で信州の人よ逢たが兄イも私も世話に成た人だから何か御馳走を仕様と云ふ其人が江戸へ來てまだ吉原を見たいと云から見せて遣ふと直よ連れて行たが兄イの何しても居あくつちやアいけあいから跡へ殘て私丈け先へ歸つて來たのだよ 歌「チャソウ姉さんも左様云つて居たの遇から眩度御女郎買ひ行たよ逢ひあいが草三さんい往やア仕舞が兄イさんが無理又誘たよ逢ひない餘まりな人だと云て居ましたたが能御前さんの歸つて來て下すつたマア泥だらけよ成て向したの 草三「是かへ是ハアノ泥坊よ逢たのだ 歌「チャマア何處で 草三「アノコウ山が有つて寺が有つて敷の有處を逢てから歸る道さ 歌「チャリんお所は吉原から歸る道よいあいが大恩寺前じやアあいかへ 草三「「ア」然く其大恩寺前で泥坊が刀を抜て自己の目先へ突付て金を出せと脅迫た時よやア驚ろいたのサ 歌「怖い事ねへ本統よ泥坊と云奴は悪らしい者だねへ」あどと談り合其晩

七百七十二

は床よ入ましたたが草三郎は寝付れず翌日白藏の様子を聞かんと思ひ居ると朝からの大雨車軸を流す斗で御座り升たが日没よ至り漸く晴ましたたれハ草三郎は故意旅姿とあり根岸を立出新し橋際の夜見世よて喰度あい鮮な立喰を致或は夜鷹蕎麥を喰などしあがら段々白藏の様子を聞き升よ夕べ取手屋へ這入た泥坊の内一人の送られたが一人の何處へか逃失せ御尋ね真最中と聞くより草三郎のこりやア迂闊して居られんと取て返し露のうちの知らぬ態をして居り真夜中頃又起出狐鼠く旅仕度を爲居る様子を歌の見附 歌「草三さん何處へ往くの 草三「サア私し急よ國へ往おければならあい事が有つて立升から姉さんや親母さんが眼が覺たらお前から草三郎の急よ故郷人よ逢つて是非歸る事よあつたから夕べ立たどさう云てお呉私ハ又來年の秋よあれば出て來る積りだよ 歌「チャマアいけないねい白藏さんの何したの兄イさんが歸らないと姉さんが怒ていけませんよ 草三「兄イとお里さんとい北條よ居た時分から懇情たがお前と私ハ此方へ來て初めて遭ひ温順い一人り娘よ疵を付け阿母さんが嘸お恨み成さるだらうがお前から宜様よお詫言をしてお呉よ 歌「ナニ阿母さんの恨む處じやア有ませんよ悦こんで居升の口頭社ハ出して云ませんが草三さんの様を柔和い人ない何かあ、云人を家の蟹よ仕度が此方よ林家督がないから來て下さるまいがお前が最少し働きがあれば蟹よなつて下さるだらうが何時迄も子供の様だから

往きいと私に謎をかけて居る位だから腹の中での悦こんで居るのですよ 草三「サアヨリ
 ヤア私を並の人間と思つて出だから左様云のだが私を何んと思ひだ 歌「草三さんサ
 草三「ううじやアあい私しの商賣をサ 歌「お前さんの信州の糸商人だと云じやア有ま
 せんか 草三「うりやア悉皆賤だ私に實の御尋者肩書のある泥坊だよ 歌「エ、草三實
 の白藏兄いと二人で常陸の土浦で半破りをして逃げて来たが兄いの縁で永々御世話よ成ま
 した又お前も泥坊とい知らさいで斯云譯よ成つたも互の悪縁私の身の上を知らさいから阿
 母さんも舞ふする氣だらうが兄いも私も夕べ新し橋の取手屋と云呉服屋へ泥坊よ這入た處
 兄いの護送自分の漸く逃げて来たが探案が嚴密と聞き斯して居られさいから信州へ歸つ
 て身を匿す積り今迄の事何か夢と斷念てお呉お前も是は懲て此後口身分の知れない者と
 無闇野合をしていけいけいよ何でも堅氣お聲を取り阿母さんよも安心させ孝行をお盡し
 ヨ、ヨ」と云顔をお歌のしけく見詰て眼は溜涙 歌「草三さん何卒私を一所又連て逃げて
 お呉んなさいナ 草三「一所又連て逃げられる位なら此様は苦勞のしやアしさいよ一所又
 行と直は縛れてお前も首を斬れるよ 歌「私しや首を斬れても宜う御座イ升のお前さんが
 行た跡で聲なぞ取る氣有りません一所又首を斬れませう 草三「そんな事を云てい私が
 困るよ一所又連て往ハ早く足が附て直は縛れなければならぬ男一人なら運能逃のび命さ

へおれば亦逢事も出来るから待ておいでよ」と云はれ娘氣の心弱さよ只泣斗り様々涙を拭
 ひ、歌「アイ、草三さんのお邪魔なるなら私しや残つて居てお前さんの助かる様神信
 心をして居升よ」と云ながら泣伏を草三郎の何時迄居ても名残の盡ぬとキツと身を起し長
 刀を帯みおさらばと云捨て立出で三河島田浦を横は突切り熊野權現の裏手から千住の大橋
 の橋際へ来ましたかまだ夜が明けされせんすると向ふの葎子張の徹夜見世の前一人の
 男が半合羽の麻裏草履千種の吸引尻からけて立て居る故草三郎の疵持臍先後を見廻し急ぎ
 大橋を渡りかゝると彼男が後より付て来る様子草三の早足よて橋の中央まで来ると又赤兒
 半天を着て紋羽の頭巾で鼻冠りをした男が前より摺寄て来るゆゑ草三郎のこりやアツキが
 廻つたかと油断せず刀の柄よ手を懸けて國俊の鯉口切廻し合羽の紐を解折から紋羽の頭巾
 を冠りし男がすつと草三郎を摺寄る草三郎が右方へ避ると赤兒半天を着た男が又右方へ摺
 寄り左邊へ去ると左邊へ寄る後から半合羽の男が近寄つて後より突然御用と聲かけ草
 三郎又細付バ 草三「御免あさい 捕方「神妙よし手前もい、悪黨じやアねへかツマバ
 マせず御繩を戴け熊ヶ谷無宿の藤四郎と云のの手前だらう 草三「イエりんを者じやア
 御座イません私草三郎と云者で御座イ升 捕方「ソノ草三郎が御用なんだ」と力よ任て
 阻付かれしが草三郎の何があしてタツマ一目母親は逢主人の爲よ人殺しの罪を負ひ泥坊を



働いた事を話し度逃れる丈の逃て見んと突然御用聞の首へ手が懸かるが早いかグイと前へ引倒す後ろの一人が木刀よて草三郎の脇を拂へば草三郎の身を軽く飛び上りながら國俊の一刀すらりと引抜けば手並驚き捕吏の二人の隙を見て橋の前後へ逃げ出せば草三郎も一息つき逃れ去らんと思へども橋の前後の早手が廻り捕吏が大勢群集居り今の草三郎も進退維よ谷り川中へ飛込むより外逃げ道に有ませんが草三郎の泳を知らず殊も先頃土浦の牢破りの時堀の中よて水よの懸て居事故如何のせんと躊躇所へ天の助けか一艘の船是の武州熊谷の手前久下村より出る乗合舟よて橋の下を通る中よの一心行者先達の魚平、吉原町の角海老樓の主人其外花川戸の講中達が本庄宿の普寛行者の墓参りより歸る夜舟の乗合も昨日の大雨よ水増て落すも早き戸田川より矢を射如く下り來橋間を抜ける久下舟を見るより草三の左右へ目を付け欄干よ手を懸け刀を抱込みドブウリと死者狂ひよなつて川中へ飛込ました激き急流あれ川下へ殆二十間程も押流されるうち漸く彼船の舷の所へ攀着くと水勢が早い故船のズン〜と鐘ヶ淵の方へ落して參る大橋の上よは大勢の捕吏が立て居り船を返せ〜と連呼升れど水音の激きよ此方へ聞へませんから舟頭が只楫をする斗りにて船の余程隔れました其間草三郎の舷より道上市り中の人達の勞て寐て居る所へ這込み升と 魚平「何者へビシヨ濡で此所へ這入て來ての不宜よお前何だ〜 草三「へい何でも

御座イません決して御氣遣ひの者で御座イません 魚平「身投じやアねへか 草三「へい私は泥棒で御座イ升 魚平「何だ泥棒だど氣遣ひのあい者どころか夫より氣遣ひの者いねへ何だつて此船へ這入て來たのだ 草三「只今私が大橋を通る時御捕吏よ出合ひ逃路を失ひましたから一生懸命御船を目的飛込みましたが悪し事を致した者故捕縛て首を斬れるの當然で御座イ升が私よ一人の母が御座イ升る故夫よ逢た上期ふ云義理合が有つて悪い事をしたと只一言話しを致し得心させた其上で名乗て出て私の御仕置を受る積りで御座イ升何か御情よ見逃して向ふの土手邊へ御上げ下さいまし申御願ひで御座イ升 魚平「さうの往ねへ然し大橋から飛込む時御役人の見て居あかつたか 草三「へい返せ〜と吐鳴て居升た 魚平「ういつは往ねへ已達が係合よあるから困るよ 一心「宜の助て遣れ若いの此處へ來い」と暫くの間草三郎の顔を相して居ましたか 一心「お前ハナ泥坊をする様か人でのないが何して賊よあつたかノウ向後決然悪い事を止て堅氣よあらんければ一人の親よ逢れんぞ堅氣よなるか如何じや 草三「へい私も深い義理合よて致した事向後悪いこと致しません何卒御助け下さいまし 一心「三の輪の魚平どん私が承知だから助て遣んささい 魚平「係り合よの成りませんか 一心「大丈夫だ皆少し宛餞別を遣んなさい私も遣ると」行者が云よ黙つても居られず 角海老「是の面白い盗人よ餞別どの新らしい」と金

二百二十三

を多分よ出しますから外の講中からも恵み與ました 草三誠は有難う座イ升此涉恩の死でも忘れません貴僧様の御仰を守り生涯堅氣よ成り升から何か母よ逢れまする様どおた様も心信をあすつて下さいますし貴僧の一心行者様貴所の角海老の旦那御前さんの魚平さんで御座イ升か 魚平「チイ名を覚えて他へ嘶しちやアいけねへよ」と是から船を漕寄せ押上堤の邊へあげて呉ましたから草三郎の無闇も逃出し四ツ木の舟通りより龜有の渡しを渡り金町へ出て流山から花輪村へかゝり例幣使街道へ漸く出て朽木へ懸り犬伏天明梁田八木戸崎より塚へ出是より前橋よかゝり實政の渡しを越へ惣社より大久保よ出で漆原の駒寄より野田村を越えて水澤山を横又見て漸々日敷もかゝりましたが九月十二日伊香保へ着致し日いつぶりと暮りましたが月の中天よ牙渡る草三郎の福田屋の龍藏親分の處を尋ねんと 草三「免下さいまし福田屋の龍藏親分の處の此方様で座イ升か 丑松「誰だ上がんねへチイ熊や草が来たぜ 熊「ヤア草か能来た手前の事の事皆あで案事て居たぜ江戸へ逃たと云から何したかと思つて居たが能来た草ヤ手前の親の事斗案じて居る感心お男だから相の川の親分の處を逃たのの白藏が連出したと違へねへと云て内の親分も草三の何したかど云て案事て居るぜ侍やア親分に云から早く上んねへ 丑松「申親分へ相の川に居やした草三が尋て來やしたよ 龍「エ、騒々しいさんだ草三が來たと馬鹿野郎め此方這入れ馬鹿野郎

三百三十三

相の川親分汝の事をあの位迄心配をぶつて藏匿ておいて呉たのよ江戸へ遁走りやアがつて白藏の捕縛込んださうだから手前匿れ處があくあつて復逃て來て藏匿てくれろと云ても今度の置れねへ馬鹿野郎前橋様も高崎様も近し榛名様の側だから此方への置れねへ安中の角田駒四郎の所へ行て福田屋の爺様がさう云たと云て能頼め金が有るかナニねへと夫見ろ馬鹿野郎様を呉べエ五兩遣るから持ていけ本統よ何時も世話へエやかせやアがつて憎しい奴だが又顔を見れば可愛い奴だエ、熊藏丑松二人で草三を榛名の表山迄送つて遣れ 熊様名よの御番所が有るから往れやせん 熊「うんから摺白峠か湯の澤の裏山を下りて送つて遣れ」と申故是から二人の若い者後鉢巻尻からば銅金作りの長刀を差しサア参りやせうと出よ懸るを 熊「コレ馬鹿め其形なんだ喧嘩よでも行様お形でよ獺目標て悪ひから提挑灯をさげ三人連立て静よして行」と云ふと若い者故松明を燃して此家を出ましたを送る二人の面白半分で 熊「草や來やく」と意勢よく向ふ山を登り平原よ出是よりおだれを下り摺白峠へかゝり升ると三人の鼻の先へ見上げる様お大きな狼か出ましたから 熊「ヤア大變なもの居らアいけねへやいつも寒くならおければ出たいのよ何して出やアがつたんだらう 丑「モンく行て仕舞よ 熊「何してモンく往れるものか鼻の先へ大きな狼が居るよ此畜生め」と三人立止りましたが其頃此摺白峠の下の谷穴よ大いなる狼が二頭居まし

て幾許の星霜を越たるものか腹の白き毛が脊中より回りて白くなり居る白狼よて寒氣より向ふと往來の旅人懸る所から寒い時分高崎より大戸へ通ふ往來の止り旅人も所の者も困難を致ものが多く有ましたが其白狼の子が三頭ありまして其子狼が此處へ出ましたので御座イ升名々持居る松明三本を立掛け狼の前へ置ました狼が驚かず此方を見るよ松明の火影の狼の眼も映て恠心彌増し熊藏のよせば宜のよ一引拔狼へ切付けると狼も怒つて熊藏へ飛付き頂上へ咬付かれて熊藏の悲鳴を上げてドツと倒れましたから草三郎の自分を送つて來た爲よ斯る災難も逢せて誠氣の毒と思ひ腰よ差たる國俊の脇差を抜き放ち彼の狼の鼻頭目懸け力よ任せて切付る狼の不意を打れグル〜ツと二三度廻つて其儘其處へ倒れました所へ乗掛り一刀助へ窓込内何時か丑松の方へも一頭の狼が立向ひましたから丑松の長脇差を抜はゐして切らんとするよ狼の足よ飛付咬倒すを草三郎は亦も彼狼よ立向ひ助を目懸て切付る狼の倒る、所を踏躓て刺通せば此際一頭残りし狼が谷間よ臨て哮々と遠吠を致ますと其聲のあうろしき事實に身も縮まる斗り草三郎の前面をきつと見升と九月十二日の月の皓々と牙渡り山の凸凹もあり〜と見ゆるよ彼白狼が二頭とも谷間よりノソ〜と出來るよ草三郎の是よ見て、草三郎ハハア傳へ云ふ排ならん我所行惡事の罰でかゝる猛獸の爲よ一命を此地よ落す事なるかと云ながら一刀を取り後へ下り摺臼の岩窟を小橋よどり死者

狂よあつて身構へを致ました是より狼退治の次よ御開よ入ます

第十二回

席を重ねて申續き舛る狼退治の御断で御座イ舛借て草三郎の國俊の一刀を抜き死物狂ひよあつて二頭の狼を斬倒し助へ片足踏かけて一刀を逆手よ持直し力よ任せ貫通せば残る一頭の狼が後裏を臨み時々と吠る聲がピンと溪間へ谷響致しまして其物凄きこと身の毛も慄立斗り此時摺臼の溪間から白狼と申て腹の白い毛が脊迄まはり餘程年経りし故小馬程もあります二頭の狼が眼を怒せ草三郎の前へ立ました草三郎の狼とい知らず噂よ聞く深山よの排々と云ふ毛族ありて人を喰ふと聞しが是の大方排々にやあらん斯る猛獸の爲めよ喰殺さる、も皆我惡業の報ひよて天罰あるか併し逃れる丈の通れ出で一度母よ逢せたまへと元より孝心の草三郎あれば一心よ御嶽権現を念じながら摺臼の巖窟を小橋よとつて狼よ敵對ふ齡いまだ二十歳でのあり升が名よ負ふ柳生流の免許の腕前あれば氣合が違ふので狼も少し應して飛付事が出來ずヤリ、〜と後へ退る其内一頭が草三郎の頂上を飛越して後の山へ登り前後よ草三郎を合狭みて飛越らんと致ます故草三郎の前後に心を配り身構へて居りますと上の狼が頭上を越して飛下りると下なる狼が亦後の山へ飛登る斯すること度々なれば草三郎の上下よ目を配る其うちよ今早身体も勞れ最早危ふく見へ額から汗を流し居り

升と天の助けよや何處からかドンと一發鉄砲の響も但見れば斯る猛き狼なれど前足の關節を打貫れ一頭前へ倒れると又も續ひて一發の鉄砲は山なる狼も命中是も同じく倒れまじたれハ草三郎ハ無二無三も切付け残る一頭の子の狼が溪裡へ向て逃げんとする處を飛込で横ッ腹へ一刀を突込こどり上げホット一息つき何處から砲丸が來たことか草三郎ハ獨語つ四方を見れば九月十三日の月ハ皓々と牙渡り高崎の城下も一ト眼見見へ南の方ハ赤城山うしろハ相馬二ツ嶽山々の凸凹もありと見渡す處へ山また山此際摺白の岩間より立出る男ハ枯艸色染あげたるを二重三重茶糸よて刺たる筒袖を着て夜具縞の山袴よ下よの股引を穿鹿の前面の皮よて作りたる臙當よ前よ山猫の皮をあて羚羊の毛の半肩衣を着鈍刀作りの一ト腰よ山岡頭巾を冠り一貫三百目の鐵砲を擔で静々と出で來りまじた此人ハ上州伊香保温泉元村ある永井喜八郎と申者よて俳名を一郎と呼び殊よ武藝に達して力があり亦砲術の名人で御座イ升から彼白狼を打留て衆人の害ハ拂ひ除かんと毎夜摺白の岩穴ハ隠れ居たるが今宵思ひを遂て悦び草三郎に向ひ「喜八郎」若いのよハ怪我ハなかつたカナ」ト云れて草三郎ハ地上よ手をつき「草三郎」誠ハ難有う存まじた何處の何方か存じませんが御蔭様で危き所を助かり何とも御禮の申やうも御座イませせん「喜八郎」イヤ貴公ハ中々達人だのウ是丈けの豪大狼を對手よするるとハ剛勇ものだ私ハ此狼が出れば好ど此摺白の岩穴へ五

日附て居たが容易よハ出ない所が今日の好場合ハ此白狼が出かけたも御前さんが通つた故手易く打留たが猛狼が居ちやア高崎から大戸への往來の妨げ斯して置やア何百人の助よあるか知れやアしねへ「草三郎」足下ハ何方の獵人様で御座イ升かへ「喜八郎」自己ハ獵師でいねへのサ伊香保の永井喜八郎と云ふ者だが汝ハどこだへ「草三郎」うんち宿屋さんで御座イ升か私ハ草三郎と申者で今晚福田屋の親分の御世話ハあり子分衆を借まして上の原まで送られて行途中此狼ハ出會つたので丑松兄イモ熊さんも狼ハ喰殺されまじたから福田屋の親分へすみません「喜八郎」ナニ喰殺されたとへ成程オヤヤとやられたおア併結構々々此位ハ狼を退治するよハ二人や三人の人の死ねよ夫で大衆が助る事だから二人位死んでも仕方がねハ宜から早く往なせへ二人の死骸ハ自己ハ福田屋の親分へ届けて宜様よして遣るよ見れば汝へも犯罪ハ身の上的様だから早く往ねへ好男だなア若けへハ胞前がいハのウ豪雄もんだ「草三郎」左様おら仰よ隨ハ升御免下さいまし」と夫から別れ漸く上の原へか、り中室田から神山へ出で三里余の雉子峠を越してやうくと下秋間村迄參り升と夜ハしらとと明離れ田甫路よて前ハ川があまりすが橋ハ落てありませんからさぶくと歩行渡り致まして安中へ出やうとするど草三郎ハ此程より夜道を懸野ハ伏し山ハ隠れ種々心痛を致ました故初て覺へた痲痺が腰より腹へきりくと差込んで腰が拘つて歩行れあいが我慢を



白狼退治



招白狼
白狼退治

しむがら一町半斗り参ると向ふの田甫中よ茅嘗の一軒家がありましたして其脇よ水車が仕懸け
 てあり爺いと婆アが早く起て焼付て居る様子を草三郎の是を見付け少し苦痛を休めんと胸
 先を手で抑へながら 草三「御免なさい私しの旅の者で御座イ升が疝癪が發つて難澁いた
 します何か御助けなすつて下さいまし」 爺「如何してねへチャヤ」夫の御困りで御座イま
 せう癪が發りましたか御寒いからねへ何しろ御難儀で御座イませうマア草鞋を取て此方へ
 御上りなさい 草三「ハイ有難ふ存じます」 爺「婆アさんや何か藥のあいかな何でも苦物が
 適だが黒丸子か御嶺山の御百草が有たつてアレを持って来よ」と爺い婆アの深切ある介抱よ
 少い落付きましたたがまだキヤヤ差込み迎も歩行ごとの出来ませんから草三郎が何か御泊
 らすつて下されと云ふよ爺い婆アがこんお穢ねへ所でも宜ならお泊りと心よく承諾それか
 ら夜嘸しとありました 草三「御蔭様で助りました」 爺「大きよ落付た様子だねへ併御前
 の何所へ御出なさるのかへ」 草三「ハイ安中の角田の親分の所迄参るもので」 爺「チ」駒
 四郎親分かへアノ御方の豪勢者だ 草三「何も此様子でい迎も立も引も出来ませんから病
 氣の治る迄御宅へ御置下さりませんか私に此所よ御金を五兩持て居升が此内三兩進上しか
 ら何卒御世話を願ひ度もので御座イます」 爺「コレサ意外ない事を云さる三兩有れば立
 派な宿屋で二の膳付二ツ返事で泊ることが出来るよこんな穢い家へ泊るに三兩の五兩の

といふ金を出しとい意外事だ 草三「左様で御座イませうが病氣の事故何時平愈か知ませ
 んから何か此金を御受あすつて下さいませんか」 爺「うれだつて此金をノウ婆アさん 婆
 「デモ折角下さる物だから遠慮するのい却つて失禮だから戴いて置き薬の良のでも上た方
 が宜でありますせんか本統よ柔和お方でどうぞ寛々と御泊りなさへよ」 草三「有難ふ御座
 イ升マテ貴所方の誠よ愛憐くどうも御言葉の様子で此土地の御方でいあい様で御座イ
 升が江戸の御方でいらつしやいますか」 爺「エ」江戸ツ子で何も若い内よ馬鹿アやつたも
 んたから如斯山の中へ引込まましたから若い人の面を見ると思ひ出し升よ故郷忘れ難しと醫
 の通りお前さんの様を若い柔和な兄いさんを見ると昔のことを思ひ出し升よりれい左様と
 婆アさんや温飩でもぶつて上げなさい 草三「貴所方の江戸の何處よ御居なさいましたか
 爺」江戸かへ私しやア元本所の番場で實に河内屋重兵衛と云つた米屋で藏の二た戸前も
 持て居て米舂も大勢置ましたが若い内い了簡が定まらんもので彼品ア趣味の此物ア着られ
 ぬへのと贅澤を云つて居たが終に冥利よつき果て罰が當つて子御前さん夫から相場よか
 つて地面家土藏悉皆人手よどられ家名を潰し詮方があいから元店で遣つた米舂が信州の本
 山よ居るのを便り七ツよある悴を連て親子三人江戸を出かけたの十九年前の事ねへ旅を
 踏で辛々と此先の松井田の宿の真々田と云旅亭へ泊つた晩から疝癪が發り苦しむの苦しま

ねへのと云つてノウ婆アさん 婆うれいモウ薬よ醫者よと種々介抱をしたけれども病氣
 の愈らず一月半斗り旅亭よ逗留して居る内よ小遣の遣ひ果し病の募り藥禮の嵩る私しやア
 ンも困つた事いなかつたよ 爺「サア何分旅亭を立事もあらず替を残らず賣拂つたが二
 東三文で幾錢よもあらず赤裸で道中が成るものかと云諭の通り眞逆信州まで親子三人赤裸
 で行れねへから且云つて跡へ歸る事も出来ず困り果た所から寧ろ一ト思ひよ雄水川へ身
 を投げて死ふよと覺悟を窮め婆アさんも共死をふと決心したがすると七ツ又成る小僧が
 側から阿彌さん阿彌さん坊が今又大きくあると御奉公をして御給金を貯て樂をさせるから
 何卒死んでも呉でよいよと私の袂を押へて泣から何も引切つて死ぬ譯よもいかず實よ苦し
 かつたノウ婆アさん 婆「然々あれを思ひ出すよ本統よ身の毛が慄立様だよ 爺「さうあ
 ると死ぬより外よ分別の出ないものだが小僧の心よ幸されて身を投げることもあらず夫婦
 で泣てゐると隣座敷の紙襖を開て出て來た御方の妙義山の三妙院と云ふ法印様でお前邊の
 何金有れば此家が出立と深切よ云はれ其頃の宿錢も廉かつたが十三兩有れば宜しう御座い
 升と云つたらうんなら拙僧が遣ふが其代りよ此悴を拙僧よ縁切で呉ると云はれたが死ぬよ
 り勝と覺悟を窮て遣つて仕舞ふといふと婆アさんが不承知よ 婆「うれよ子悴の女の様を
 優姿故妙義山の山野管轄と聞いたからもしや妖童にでもしやア仕さいかと考へたが女の千

あら女郎までも賣ることもあるからと觀念め思ひ切て十三兩の金を貰つて悴を渡し其金で
 宿賃を拂ひ何やかやで遣ひ跡よ壹分一朱と端た錢が残つたのを持て宿の出立が是ばかりで
 の信州へも廻れず江戸へも歸られず一人の悴の金の爲よ人手に渡し途方よ暮れて居た所へ
 安中宿の丸田屋清五郎と云ふ饅頭屋の旦那と逢ひオヤ重兵衛さん何して此所へ來たと云ふ
 から身の上を嘸すと元江戸へ來た時よ少し世話をした藤でマア自己の家へ來ねへと深切よ
 云はれりれから此所の水車の番人がないからといふので此家へ住居て雨露を凌ぐ所の出來
 たが肝心の資本がさいので仕方がないから何でも是から一生懸命よあつて働ぎあの時死ん
 だと思ひ其苦しみをしたあら復元の身の上よもあらず夫婦共よ力を協せ微塵も積れば
 山の嶮へ今での前だけの田地の私が手よ入り此家も私の物よあつたが住都と云ふが恰
 ど今年で十九年數へて見れば二タ昔思はず住慣て今の身の上最段々と超歳で依憑き子の人
 よとられて死水をとつて呉るものもあく誠よ心細い老の身サお前の様も可愛い人を見ると
 悴のことを思ひ出し升よ」と泪含ますから 爺「種々此苦勞をなさいましたねへシテ其
 息子さんの妙義山で法印さんをあすつて出なさい升かへ 爺「兄いさんお前もお若い
 決して放蕩を申しでさいよ悴の結構な妙義山の法印様のお弟子よあつたのだから謹慎くし
 て居れば宜のよ男振が好所から妙義町の女郎よ戀慕込とろく三妙院を勘當され今での盜

賊よなつて居るとサ 草三「エへ意外事よ成りましたねへ 爺「うれがサ朋友が勸て御前の質の親父や老母が秋間道に居るさうだから行て遣れと云ふと悴が自分七ツの時十三兩の金で賣られたのだから最親子の縁の切れて居る實の親の所へゆけば是迄養育てくれた三妙院へ義理が立ねへと云つて面も見せねへが其位義理を知つて居るあらバ盗賊などを仕あければいゝのよととう／＼大盗人に成つて此迄迄も人相書が廻つて来たが子土浦の牢を破つたとか嚴い探索親子の縁の切れてゐるが血を分けた一人の悴が盗賊あると全く私か若い時養澤をして罰でこんを悲みをする事かと婆アさんと二人で佛様に向つて此身の懺悔をして居り升のサお前あども決して放蕩をして親よ昔勞をかけたい様よしあさいよ」と昔語を聞くより草三郎の胸は答へる我身の上 草三「シテ息子さんの名は何と云升へ爺「うれがサ馬鹿な奴で妙義の御山を白雲山と云ふからうれを自分から名も附けて妙義無宿白雲の白藏と云ふとサ 草三「エ、ナエ白藏兄イ 爺「御前の悴を知つて御出でのか草三「ナニサアノ私知りませんからんか話ヲラト聞ひたことが有り升がりんから貴所方の白藏さんの御兩親で御座イ升か」と口より云へど心の中で思ひがけあき事なれば實に吃驚致し土浦の牢内で兄弟分の義を結び殊より其草を破り相の川の親分は助られたを江戸へ逃たばつかりで白藏兄イの纏めの罪此身のやうく逃延たれと廻々て計らず此

家よ泊り合せ介抱受たる其人の白藏兄イの兩親との神あらぬ身の知らざりしが如何ある前世の因縁なるかア、悪い事の出來ぬものだと草三郎の全身又冷たき汗を流し今の夢の覺たる如く眞もつて改心致し何卒是より人たるもの、行ひを致し此兩人を實親の如く兄弟の義を結んだる白藏兄イも成りかはり孝行を盡して遣つたから此身の罪も何時か消年來搜る母親よ逢れる事もあらんかと額の汗を拭ながら兩人に向ひ 草三「祖父さんお婆アさん貴所方の正直な御方で始て會た私よ何ととも隠さずうち明て御子息のこと迄よく御断し下さいました私よ一人の母親が有りますがそれを尋て信州へ參る者ですが必然逢れるか會れないか生死のほどもしれませぬ母で御座イ升が殊も只今貴所のお断しよの子がなかつて困ると仰しやいましたから私の様も愚か者でも貴方の子として下さるならは是からの猶聖氣よなり何様も商ひでも致しまして御二人さん方の死水がとり度と存じ升がナント子としては下さいませんか實は私の御願ひで御座イ升 爺「マアこれはお前さん本統かへ 草三「本統どころで有りませぬ如何も孝行を盡し正當なつて働き老夫婦さんよ屹度安心をさせますよ 爺「マアこれ有り難い婆アさんや此人の可愛ひ言を云なざるぜ何か依憑のない爺イ婆アだから此末目をかけてお呉なせへオイ是さ婆いさんや早く爺御でも拵へて進な」と老夫婦の大悦びでうれから介抱し手を盡しましたから追々氣分も愈りましたと

十月三日の事で御座イ升が爺い婆々アハ農業も出た跡も草三郎ハ一人縁側へ出て田畑の景色を眺望して居り升と板倉藩の重役尾崎直右衛門の家来栗山佐平と云ふ江戸武士此日の主人の代参として榛名の不動堂へ納める御供米を二俵と錫の神酒徳利を箱入よして是を馬に擔け栗山佐平の容の柄袋を懸たる大小小紋の脚半と紺足袋切緒の草鞋身輕の行装をれど此先は峠の有ると聞て草臥を厭ひ其馬へ乗つて來ると此處は枝川二筋ありて雄子峠妙義碓氷の山々が見ゆる風景の宜しい所で御座イ升 馬士「やイ馬鈍の様な生度のねへ畜生のねへナアハアよく石や木の根もべイ跋きやアがるぜ 栗山「馬士や馬よ小言を云ふのハ止よりんをことを云つても解るものでない 馬士「ハア貴所馬といふものハ恰恠ものでよく解りやんすのサ心持イ宜ときやア可愛らしいもんだよ 栗山「馬士やどうも大層山斗り有るノウ向ふは峠立かつて見へるのハ何と云ふ山だ 馬士「アリヤア妙義山でがんすよ白く大の字又見へるのハ注繩が張て紙イぶらさがつて居るのが大の字山と云やす其此方が碓氷峠で其向ふの赤へのが淺間山でがんす 栗山「ハハア成程煙りが見ゆるノウ其此方の高い山の何と云ふノウ 馬士「あれが信州から上州へぶち跨つてゐる大い山サあの山が有るので富士の山を隠して見へねへから富士かくしと云やんすのサ 栗山「ナニ處を云へ上州ハ富士があるものか 馬士「ナニ富士じやアねへ淺間隠しサ 栗山「それで淺間隠しで富士か

くさずかな 馬士「アレエ洒落を味く吐露がるぜ 栗山「コレこきやアがるとの失禮を奴だ」と戯言を云ながら段々參り升と石橋がありまして二片石が懸つて居る所どう云ふ事か二片の石が顛覆ると馬がはづんで横さまよドット川中へ落入る途端栗山ハ早く飛べよかつたのハ鞍へ固り抱り付いて居たものだから馬と諸共逆筋斗を打て川中へ落入りまして頭を破傷しがババ氷を呑み漸々土手へ這上る馬士の詫れハ宜の罪を馬に負て自分の鹿角にはしあいで馬の口を取て引上ながら 馬士「ヤイ起ろこの鈍馬め川の中へ顛倒がりやアがつて何だ御客人を見ろ落しやアがつて此生度あしめ 栗山「コレ馬士馬よ小言を云ふのハ跡よ致せ怪からん奴だ是見る此様は頭を破傷し是を何致す心得だ不埒な奴め 馬士「どうするたつて馬が悪いのだもの仕様がねへや 栗山「コレ手前が落して置き仕様がおいで相濟ふと心得て居るかなせ川の中へ落した 馬士「おらが落たじやアねへよ石橋イ覆たもんだから馬が横に顛倒げへつたんだお前様が早く向ふへ飛べハ宜又鞍へ確り抱着つて居たもんだから顛倒げたんだ御武士の癖は馬に乗がハア拙劣だアねへ 栗山「此奴不埒な奴だ自分が不注意より馬を落し且又何も辨へんとの申ながら其方の當御城下よ於て其日を送る馬士でハあいか御領主を何と心得て居御領主の重臣尾崎直右衛門が代参栗山佐平であるぞ然るを馬より落して詫も致さず只馬よ小言云つて自分の罪を逃れ様どの不埒な奴だぞ



草三
傾計を用ひて
佐平を打つ



朝倉

馬士「自分へ落したじやアねへよ橋ノ顛覆ただから仕様がねへ貴所早く飛べないよ確り鞍よ抱着て居たから落つたアよ何も仕様がねへやハア 栗山「斷言仕様がねへどの何だ水の呑み頭の如く傷破して代參も行れぬ様よ致し謝りもせで其うへからず無法を申不届至極な奴だ其分での免さんア」と刀を引抜き振上げるを馬士のなかへ承知せず

馬士「私イ落したアねへよ馬が落したアから仕様がねへと云ふのよよ 栗山「また左様事申すか不届な奴め手打よ致す」と益々怒氣をわらひし己よ飛びかゝらんとするを最前より草三郎の彼有り様を見て居りましたが武士の腹立大方ならず今少しの間も捨置ハ馬士の命も危ふく見へましたから草三郎の側へ有り合た粗朶の小長いのをひつ提げ彼武士の側へ馳寄り詫をぞしての間よ合んど思ひましたから突然武士の手首を劇かに打つ不意を打れて武士の持たる刀をポロリと取落すと見て居るうちよ忽ち手の甲が紫色よ腫上りました其痛ひこと實よ堪せせんから武士の手首を押へて居りました所へ草三郎の地上へ兩手をつき 草三「何卒御勘辨を願ひますナイ馬士さんお前が惡ひからだナせ御詫言をしさいのだモシ且那此通り何も知らない者で汚座イ升から何卒御勘辨下さいまし馬士よ替り私がお詫を申し升 栗山「コリヤ手前いあんだ 草三「ハイ私し此邊の者で馬士の塵勿を見兼まして鳥渡は詫言は這入たので汚座イ升 栗山「コレ詫言を致たすものが突然人の手を撲

ておいてから詫を致ものがあるかりれで宜しいと思ふか是見ろ此様よ手が腫上つたぞ 草三「何も誠よ相濟せせん撲氣での汚座イませんが汚詫言を申て居ての馬士の首が前へ落さうで間合せせんからなんでも側で私が打込み升れば貴殿が汚承なさるで有りませうの時よ實の馬士の詫言を申上様と存まして居ました所が貴殿が御承なさらないで苦もあく撲れてお仕舞あすつたので御座い升 栗山「勿言ナニ苦もなく撲れたどの何のことだ馬士と同意致て拙者を愚弄致み此奴勘辨の罷りならんぞ不届至極な奴だぞ城中へ勾引て參り主人の命を受縛り首よ致か左もなくバ籠巻よして谷川へ抛り込か主人の存じよりよ任ん左様心得よ 馬士「旦那何卒堪忍して遣つておくんませへよ自分を助けべいと思つて仲へ入つた者を不憫さうお貴所か早く承れべいよ承ねへもんだから撲れたんだ」と云へバ猶又武士の立腹致し草三郎の髻を櫻掴みずるくと引ずつて板倉伊豫守の城中の方へ參りましたが此跡いどう相成升か先一服致しませう

第十三回

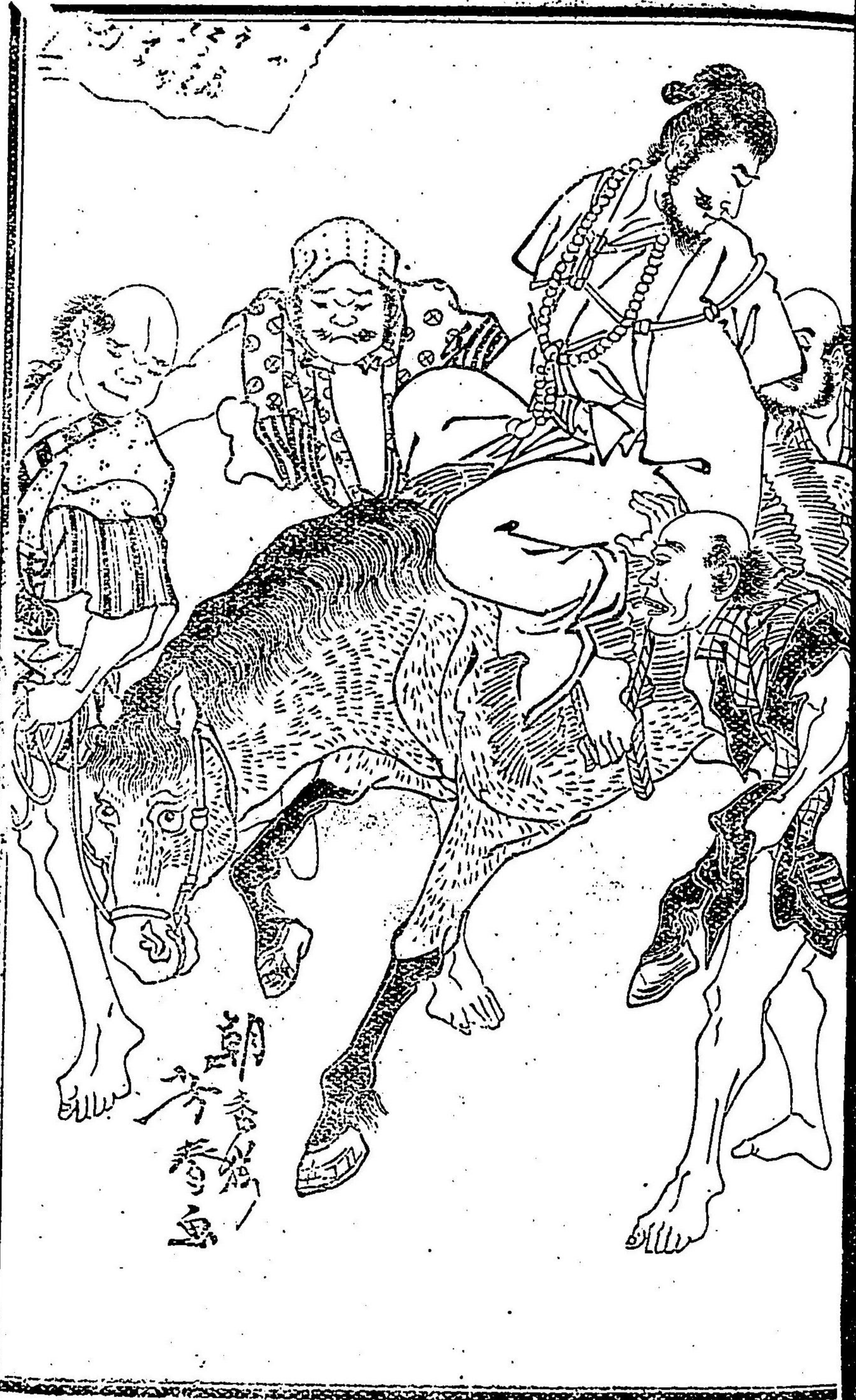
借申續ました妙義無宿白雲の白藏の新し橋の取手屋に於て恒川半三郎は打倒され直ぐは捕縛とあり南の御役宅へ護送られました草三郎の白藏の送られたことを聞き歌よ巨細ことを打明て云ひ聞かせ他言のせぬ様よと呉々云含め名残惜くも心急故夜明ぬうちよと涙な

がらよ振り切て出行跡をお歌に見送りワット斗りよ泣伏て居ります所へお里は寝衣のまよ
 よ起で参りまして 里「チャお前のお歌じやないか何泣を泣て居るの左様して草三さんの何
 したの」と問れてお歌の顔をあげ 歌「アイおのね白藏さんと草三さん」昨日上野で御
 國の人よ逢て急な信州へ行様になり白藏さんの先國の人と一緒に行き途中草三さんを
 待て居等たどサ左様して草三さんも今朝早く出立ましたがお暇乞をして居ることも出来な
 いから阿母さんふも姉さんふも宜しく云つて呉ると私しよ云置て行ましたり」と断すを聞
 ひてお里の涙ぐみ 里「アアア白藏さんも餘まりな人じやアないかあれ程迄未掛て云替
 した二人が中醫へ急なことにせよ國へ歸るなら斯々の件と妾よ一言打明けても宜りうあ
 もの餘まりお人だ」と云ひながらお里も其儘泣伏て初めの白藏を恨みまたの慕い今日の音
 信があるか明日の便がある事かと其日〜と待読て居ましたスルと其翌年の極月廿六日
 お里の久保田傳之進の胤なる伴善太郎とお歌を連れ深川の靈巖へ佛參を致しました其歸り
 途に兩國橋の傍の葎簾張腰をかけ休んで居りますと其前を通りますの根岸の植木屋の
 棟梁喜平次で今三人の休んで居るのを見て言葉をかけ 喜「チャお里さん何處へ往たね
 里「オヤ親方さん今日の終めの御寺参りに行ましたお前さんの何方へ 喜「自己も方々懸
 の歸りでチ、お歌さんも一緒か 歌「チャ伯父さん足休めよ鳥渡御懸るさいよ 里「

マア御懸なさいました 喜「夫じやア一服遣ふかチ」と云ひながら中へ這入腰を掛 喜
 善坊の大層大きく成つたねへ夫は器量がいこのウ女の子の様だから宮様師の秋田さんでど
 んちよ欲しがつて居るか知れやアしねへ左様だから遣れべいよ 里「先様が大層いよさ
 うだから妾も上げ度と思ふが何よしろ一粒種だからねへ 喜「夫のさうと今日傳馬町の御
 店へ懸廻りよ行て忌な物を見て来たよ 里「忌な物どのさんですへ 喜「アノ引廻しをさ
 里「チャ引廻しと云ふ物の何おものですかへ 喜「ナンダお前引廻しを知らないのか
 里「妾しや知りませんよ 喜「引廻しを知らねへ奴があるものかお前引廻しを見た事あるの
 か愚鈍赤芝居でも能く演るじやアねへか白井権八や八百屋お七の狂言でよ 里「ア、芝居
 ですもの知つて居ますが好もんですねへ 喜「芝居のの好が本統のを見ると忌な心持が
 するよあんでも泥坊に二十六七で傳馬町の裏門から引出されて馬の上へ乗せられた所を見
 たが何もお男だつてエ、何と云つたツケヲ、ソウ〜妙義無宿の白藏と云ふ奴だどよ
 里「エ々妙義無宿の白藏ア親方戯談斗り云つていけませんよ 喜「ナニ戯談を云ふもの
 かマツタ今見て来たのだからよ 里「親方鳥渡本統ですか 喜「コウお前知つて居る人か
 へ 里「イ、エお歌や變な断したが何したのだらうねへ 歌「姉さん實に隠して居ました
 が去去年の八月わアやつて草三さんが急に國へ歸りましたの白藏さんの細付よあつて送

られたから私が茲に居ると運累にあらむといけなからお里さんとお母さん打明て云ふな
と云付られましたから今迄隠して居ましたが白藏さんの全く送られた相違ありません
と云はれてお里の仰天し涙も曇る聲を密め 里「ソナラ左様と彼時早く嘸してお呉な
ら何か仕様もあつたもの妾の信實國へ歸り今に便りの有る事かと今日が日迄も知らあんだ
夫も悉皆妾故だから妾の鳥渡行て逢て来るから申親方さん其引廻し何方へ行ましたへ夫
から何ありませうね 喜「直に御處刑よあるのサ 里「御處刑とい何のことですへ 喜
ナンマが子様の様を事を云ふあア獄門の兇状だと云ふから首を斬られて小塚原か鈴ヶ森へ
其首を梟すのさ 里「さうして引廻しは何處の方へ行ましたか教示して下さいさ 喜「さう
江戶中引廻しだから小傳馬町から日本橋通りへ行たらうよ 里「うんなら親方誠な御氣
の毒ですが善坊を預かつて下さい善坊や植木屋の伯父さんと少し待て居あよ親方鳥渡見て
來ますから何ぞ御頼と申升よ、と云ひながら狂氣の様もありお歌もろ共奔出だす 喜「サ
イ狼狽て馬鹿な奴じやアないか何處へ行のだコレサ引廻しの處の數多い人で見られるもの
か」と云ふのを耳よも懸ず奔出すお歌も續いて奔出す故島田天窓と丸鬚の二人の女が泣き
がら徒跣よて耻も外聞も構はず飛走り引廻し何處へ行ましたか行ましたかと戀の情との
云ながら他から見升ると恰で狂氣の沙汰でありましたが借此罪人の御處刑も昔と御維新よ

相成ましてから御處分が相違致ましたが昔の引廻しと申て二々通り有ました江戶中引廻し
よ五ヶ所引廻しと申て其五ヶ所引廻しと申の縁類知人の者の前を通る斗りよし亦江戶中引
廻しの方の東京府内一般引廻しので有ません傳馬町の牢屋の裏門より出で小傳馬町を通
り石町より室町三丁目日本橋を渡り四日市から江戶橋を通り本船町の自身番が休息所よて
是から傳馬町の御牢内へ歸るので御座イ升今本船町の自身番よて休息を致して居る故表て
の黒山の様を人立よて見物致して居り升扱罪人白藏の栗毛の馬よ乗り結城紬の小袖五枚重
ね淺黄の御仕着せを上つ張よして紺献上の帯を締め月代森の様よ生へ年の二十七で色おく
まで白く鼻筋ツンと通りギョロリと見る眼よ涙味があります美男で御座イ升半紙を石疊よ
致して作りたる數珠と珊瑚珠の玉が付けてありますのを胸よ掛け夫の本統の珊瑚でいあり
ません牢内の金昆羅様へ上げた御備へをどり是よ赤膏と云ふ膏藥と練交ぜたもので御座イ
升懐ろへ半紙を幾拾帖も入れ非人が四人先拂ひをし南北町奉行の檢使與力二人が騎馬よて
同心衆の其罪人の數よ寄すと申す拾札が先へ出ますが長サ六尺厚つサ八分巾一尺三寸の
板を横よ致し九尺三寸の柄を附け惣樞の木にしてうれへ罪の次第を書立て手代り共非人三
人よて持ち次よ紙帳を押し立て是も手代り共非人三人にて持ち紙の紙の西の内立九枚横が四
枚四九三十六枚乳共よ紙數四十枚同く罪の次第を書立まして跡からの狼牙棒鐵棒などを擔



ぎこれの谷の者手代り共四人鎗二本手代り四人其跡から非人小屋頭が二人附添ひ幸徳谷の者二人騎く行列をなしさを拂つて自身番より出る處へお里お歌の兩人が走付け入を押分け役人の制するものも聞入れず矢庭に鞍の鳴へ走り涙聲よて 里「白藏さん」と云ながらハツマリ鞍へ取付き泣伏ましたのが今鼻の先へ夫婦約束までしたお里が来たこと故強悪の白藏なれども其實意を感じ胸迫り落す涙を隠さうよも身の儘ならぬ細目の絆し静し優しき聲を出し 白「お里か何して知れたか能來て呉たナお歌も来たか自己も最う是か名残だから種々咄しがしたいが何時迄も其處に居ると叱られるから二人とも早く家へ歸去ねへよお歌や阿母さんよ能左様云つて呉ねへ亦お前も是からの最う斯に懲ての堅氣な人を亭主も持た一人の阿母アだから苦勞をさせず孝行をして呉んやお里やお前も心得違ひをしなさんなよ 里「お前が斯云ふ姿よなつたも悉皆妾故の事實の今日迄斯あつたとい知らなかつたが先つき途中でお前の咄しを聞き亦お歌も姉さん實の斯々と云ふから直ぐ馳驅付けては來ましたが今迄斯とは知らぬいでお前が不告で國へ歸るとい余りお人だと恨んで居たのが濟ません知らぬこと故何か堪忍しておくんささいヨ、ヨ 白「今よなつちやア最う仕方がねへから何よも云ひおさん何か御處刑よあつた跡で香花を上げお題目を頼むヨ夫斗かりがお願ひだコレサ長く咄しをして居ると叱られるから早く彼方へ行なよ 里「アイ夫でも是か

顔の見終めだから最う少しの間話しをさして下さいアレサうんなら何でも御處刑よあるのかへ 見物「何でげせう女が二人飛込んで來て 見物「ありやア大方盗人の親類か姉妹でせうよ 見物「ナニサ親類じやアあい同類は違ひないお前の代よ妾が名乗て出るから馬へ乗らうと云つて居るのだ 見物「女でも大した者だねへ 見物「鬼人於松以來の悪婦で何でも手下が五百人もあり舛とさ」あどと種々の事を云て居升其内よ休息も果ましたから元の通り列を正し先を拂つて行く後姿をお里の見送り後を慕ひまして傳馬町の牢屋舖の門前まで参りましたが致し方がありませんから急ぎ根岸の我家へ取て歸し泣かばら今日の譯を叔母よ話しを致しましたが三人の顔を見合せ途方よ暮て居りました亦白藏は獄門の兇狀ゆへ斬首よあり小塚原よ梟首れた跡よてお里は白藏の首を貰ひ寺へ葬むり厚く回向を致しましたが白藏の己の悪事を余所よして彼の取手屋よて撲倒され捕縛よなり御刑罰よあつた故久兵衛を恨みまして其崇りをあす所から妙縁よて此お里が取手屋久兵衛の妾とありましたが久兵衛の妻が死去の後するくべつたり後妻と成り濟す所より取手屋も滅亡致すと云ふ御咄しの次よ御聞よ入れます

第十四回

階御咄し二ツ又別れまして草三郎の栗山佐平よ髻を把られブル〜と城中へ引て行れ升栗

四十五百

山佐平の草三郎も手を撰れたを憤りまして是非とも主人の命を受け縛り首にするかさも
なくば篋巻よして川へ投込殺して仕舞ひなければ腹の癒と猛り立何程説ても聞入すズル
ル引ずつて下野尻から安中へか、り升と玆い海道故往來の人が喃々と騒ぎ立て見て居ると
ころへ通り懸りましたの此安中宿の角田駒四郎と云ふ親分で年の三十一ある此邊にて
ハ勢力のよき人よて情ふかき俠客肌の男故彼の騷動を見るより驅寄て 駒「御武士様マア
待てお呉なせへ若輩のがア、やつて地へ頭を付謝罪て居るから勘辨して御遣りなせへナ何
云ふ辭かハ知りましぬへが此者よなり代り私が御説をしやすから申御武士様御勘辨下さい
な私の此御城下よ居る角田駒四郎と云ふ者で御座イ升 栗山「ム、お前が駒四郎とか名前
ハ兼て開て居がナ何も勘辨の相ならんかせならバ此者が出すとも能のよ余斗き處へ出で拙
者よ對し酷しい無禮を働いた奴おれバ勘辨の相あらん拙者今日主人の代参として榛名へ參
る途中これなる馬士の進めよて止をえす馬へ乗て參りし所秋間口の用水の中へ馬より拙者
を落し是此通りズ濡れ致し殊々榛名山へ納める錫の神酒徳利までも破損して置ながら馬
士の詫も致さず却つて小理屈を申張馬よ小言を云て己の罪を免れ様とする不屈なる奴故
拙者手打し致さんとする處へ此若輩が飛で參り横合より不意に粗朶を以て我が手首を撲ち
是の通り紫色も腫れあがつてをるハ斯る無禮を働いた奴故是非引ふと云のだ其方が如何

五十五百

様に詫入れても拙者よ於て了簡の罷りあらんから左様心得るよ 駒「成程さうで御座イ升
かコレ若輩のうりやアお前が悪いから仕方がねへ 草三「へい貴所ハ角田の親分さんで御
座イ升かとんだ處で御目に懸升私しハ草三郎と申升が伊香保の福田屋の親分から手紙を貰
ひ角田の親分を御尋ね申て參りました者で御座イます夫ハ私の御武士様の手を撲つどの何の
と云ふ了簡でハ有りませんが瞬間でも猶豫致して居り升ればこれある馬士さんの首が前へ
落ると云ふ火急の場合で有りますから御説を致して居りましてハ間合しませんから私し
が打て掛れば旦那様が必ず御承なさらうと思ひ打込ましたら御承あさらいで撲れて御仕
舞なすつたので御座イ升から私しも御説を致すので 駒「左様かりりやアお前も宜ねへが
旦那もどうか勘辨して遣つておくんをせへ若輩もア、やつて謝罪て居り升からコレ作四郎
汝やア此馬を牽たのか 馬士「ハイ親分へ已へ此馬ア牽たんだが石橋イ覆たもんだから馬
が横又川の中へ倒たんだから旦那早く飛べバ怪我アねへの又アンダツて後生大事ハ鞍へ取
着まつて居たもんだから馬と一所ハ轉倒返つたんだよ御武士様よしチヤア馬の乗り様がカ
ラ拙劣だからよ 栗山「だまれアレ彼如き事を申故容赦ハならんだ 駒「成程重々相濟
ませんかどうか御勘辨下さいまし此者達ハ代つて幾重も御説を申上 栗山「イヤ、
何程申とも勘辨罷り成らん貴様も當此城下よ於て飯を喰つて居者あらバ何と心得て居る第

一は領主と對し相濟んでいゝか斯る無禮な奴を捨置いての主君への恐れ貴様が何程ですと
 も勘辨相ならん 駒「うれでい程迄手を下げ譯を多咄しやては詫致しましても多勘辨が
 ありやしねへかへ 栗山「エ、重言わい勘辨の相成らんと云ふのよ 駒「ア、夫じやア何
 思ても最う仕様がねへはあし切れた 栗山「コレ何んだと 駒「サア私も安中の角田駒
 四郎だ斯やつて人の中裁へ入りすれが和解ねへと云つて指を唾へて退去事の逆もなりやし
 ねへサア仕方がねへからお前さんと一所の城中へ参りやせう尾崎様も目には懸り多咄しを
 致しやせうがさうして咄を表向よしやすとお氣の毒だが貴所の退職となりやすからマ
 アお覺悟をなさへやし私が兩方も宜やうと思つて下から出りやア好氣よあつて付け上り
 領主を笠を着て跋扈ちらし何んでも下の者と見ると無闇な凌虐からサア一所へ往やせう
 栗山「ナンマ我の退職とソリヤア何云ふ譯でイヤサ何云ふ次第だか早く夫を云つてみる
 駒「モン貴所の武士さんでいねへかへは武士さんあら知つて居あけりやアあらねへ答
 だ能く勘考てお見なせへは主人様の仰を拜承て後代参り行く者がナゼ馬に乗かつて來なす
 つたか夫が聞たいね 栗山「ハテ馬に乗て來ても宜しいでいはいか是から先よ昨も山
 坂道で足が草臥るからよ餘計な事を咎め立をする男だナア馬士が頗る乗れくと勸めるか
 ら此方も乗り度いゝが據無く乗つて來たのだ何も不思議の有るめへ 駒「さうサ主人

様から馬に乗ても宜と云付けられて來たかへは主人の仰付けがあければ步行て趣かざアな
 り升めへせ殊も奉納の多供米や神酒徳利を土足と懸け其上よ自己の足を愛ひ我儘馬へ乗
 り落馬をして疵を負たのを馬士と冤罪付け馬士を斬るの突のと威し又町人風情の者よ自己
 の持つる刀を叩き落され腕を撲れると何の始末だへすれでもお前さん武士と云われ升
 か表向よりやア長の暇の知れた事だサア一所に往てお氣の毒だが退職すべエ 栗山「ム
 、異な理屈を云ふ奴だアシカシ拙者も勘辨致さんと云ふ次第でいはいが是見ろ此通り紫
 色よ腫上つて居るの 駒「うれい誠は濟まねへから私があり代つて幾重も御説を致しま
 す實は夫での痛みますべエ 栗山「ム、免す奴でいはいが外ならん角田駒四郎の詫言面じ
 て助け置を命冥加赤奴だ宜角田は御禮を申せ先夫の左様と拙者も此身形でい代参も務らん
 でいはいか 駒「成程貴所もいゝな濡濕ぼれて居の仕様がねへからマア私の所へ御出で
 なせへ左様して御城中から着替でも取寄せ着替て御出なせへ 馬士「ナンズらんを事をし
 て居と猶人よ知れらア左様すると貴所の耻だからナ幸ひ今日の天氣が好からナアニ歩行な
 がら曝へ漸々と干よ 栗山「ナニ大きよ御世話だ餘計な言をど立腹致し沸々云ながら栗山
 佐平の澁々面にて馬士を引連れ榛名山の道へ賑きました草三郎も角田駒四郎も厚く禮を陳
 べて秋間道の家へ歸り有りし次第を重兵衛夫婦よ委細物語れば夫のよい親分に逢たが

